J24-220

THE TRUTH OF CHRISTIANITY

BY COL. W. H. TURTON

TR. BY MR. TATSU TANAKA

基督教の眞理

英國陸軍中佐ダブリユー、エチ、タートン原著

日本田中達飜譯

東京 教文館藏版

明治
44. 2. 9
内交

基督教の眞理

目次

第一篇　自然宗教

第一章　宇宙には創造者ありし事……一頁
第二章　創造者は此の宇宙を意匠したる事……一〇頁
第三章　此故に神の存在は非常に近眞のものなる事……三六頁
第四章　人類は自由者なる責任者なりといふ事……四八頁
第五章　神は人類の幸福を顧念し給ふ事……七八頁
第六章　此故に神は人類に啓示を垂れ給ふべき力ありといふ事……一〇七頁

第七章　此故に奇蹟的啓示は信ずべきものなる事……一二八頁

第二篇　猶太教

第八章　其創造談は神の啓示に由れるものなりし事…一四九頁
第九章　其起源は奇蹟に由りて證明せられたりし事…一七九頁
第十章　其歴史は奇蹟に由りて證明せられたりし事…二二五頁
第十一章　其歴史は又豫言に由りて證明せられたる事…二四七頁
第十二章　此故に猶太教は多分眞實なるべき事……二六八頁

第三篇　基督教

第十三章　基督教は信用すべきものなる事……二八七頁
第十四章　四福音書は外部の證據より見て眞實のものなる事……三三二頁
第十五章　四福音書は内部的證據より見て眞實のものなる事……三六〇頁
第十六章　四福音書は使徒行傳の證據より見て信實のものなる事……三九一頁
第十七章　此故にキリストの復活は恐らく眞なるべき事……四一一頁
第十八章　其他の新約の諸奇蹟も恐らく眞なるべき事…四六三頁
第十九章　猶太教の豫言は基督教の眞理を保證する事…四九六頁
第二十章　キリストの品性は基督教の眞理を保證する事…五三〇頁
第二十一章　基督教の歴史も亦基督教の眞理を保證する事…五五二頁
第二十二章　要するに他の證據も此の斷案を證明する事……五七七頁
第二十三章　三の信經は新約より推論するを得るものなる事……六〇五頁

第二十四章　此故に基督教の眞理は非常に近眞的なる事……六四一頁

目次終

基督教の眞理

英國陸軍中佐　ダブリユー・エチ・タートン原著
英國宣教師　ジ　エ　ー　・　ハ　イ　ン　ド　飜譯

第一章　宇宙には創造者ありし事

(甲)宇宙の起源

宇宙と其起源と自由勢力との說明。

(一)哲學的論證＝宇宙若し起源なしとすれば、宇宙萬般の事皆必ず循環系となさゞるべからざるが如し。而して、こは信ずべからざるとなり。

(二)科學的論證＝進化の經過とエチルギーの消散とより論證す。

(乙)宇宙の創造者

獨一超自然の原因ありて宇宙の起源をなせり。

本書は、基督教の眞理を信ずる理由と、又之に反對する理由とを、併せ講究せんとするものにして、所謂基督教の眞理とは、後章にも説明するが如く(即ち第十三章に)三信經に記載せられたる教理是なり。今之を講究するに方り、題目を分ちて三編二十四章となす。就中、第二編は、猶太教に關するものなれば、特に趣味を感ずるとなき讀者は、之を看過せられて可なり。而して此の第一編は、專ら自然宗教を講究するものにて、即ち神の存在に關する大なる諸問題と、神自ら人類に啓示を垂れ給へりと察せらるゝ理由を説くを其本旨とす。いで、初よりして、順次之を説明せん。

(甲)宇宙の起源

今こゝに宇宙といふは、物質的宇宙のとなり。此故に物質的宇宙といへば、宇宙間にありとあらゆる萬物の總稱にて、唯此中に加はらざるものは、有無尚ほ未定の非物質的、靈的存在物あるのみ。次に此の宇宙に起源ありといふは、如何なるとかといふに、宇宙が曾て自由勢力なるものに、働き掛けられしとありとの意なり。而して自由勢力とは同一の境遇の下にありても、何時も必ず同一の行動をなすといふに非ず、却て其意のまに〳〵、或は行動し、或は行動せざるを得る勢力の謂なり。勿論、自然界に於ける既知の諸勢力中には、一として此の自由勢力と相等しきものはあらず。さりとて自由勢力の如何なるものなるかを解するは、必ずしも困難ならず。是れ人類は皆斯くの如き勢力(即ち自由意思)を有するもの〻如くなればなり。吾人は斯くいふとも、人類の意思は、眞實自由のものなりと獨斷するには

あらず、只自由勢力なるものありて、其意の欲するまに〳〵、或は行動し、或は行動せざるを得るとは、是れ人の熟知せるところ、又一般の會得せるところなりといふ而已。

此故に、宇宙に起源ありとは、昔曾て宇宙は、前陳の自由勢力に働き掛けられしとありとの意なり。他語以て之をいへば、宇宙は、自然界の一定不變なる勢力の下にありて、永遠より存在するものにあらず、却て外部の干渉によりて存在するものなりとの意なり。今、之を證明するため、こゝに講究せんとする論證二あり。便宜のため之を呼んで、哲學的論證、科學的論證と言はんとす。

(一)哲學的論證

哲學的論證とは他なし。吾人此の問題に就て考ふる時、宇宙に起源なしと言はんとすれば、今日百般の事皆、循環系の一部となるの止むを得ざるに至るをいふ。其理如何といふに、若し自由勢力なるもの絶えて是れなしとせば、物質は永遠ならざるべからざるは、是れ言ふを待たず。蓋し物質の隨時出現するは、必然たるを得ず、已に必然たらずとすれば、何等かの自由勢力に歸因すべき筈なるを以てなり。之と等しく自然界の勢力といひ、物質の固有性と稱するものも、永遠ならざるべからざるは是れ亦言ふを待たず。是れ是等のものに、隨時何等かの變動起れりとすれば、そは必ず自由勢力に由るべき筈のものなればなり。事情若し斯くの如くならんには、新しきといふは、今日一つも在り得ざることとなるべし。是れ自然界の勢力は、皆永遠より活動せるものなれば、是れより生ずる事件といふは、悉く皆永遠の昔發

生せるものなるが故なり。果して然らば、今日百般の事皆決して新しきものにあらず。却て今より前に發生せるものにて即ち循環系の一部に相違あらざるなり。

偖この説は、疑ひもなく、一種可能的の説なり。試みに思へ、今後宇宙は幾多の年月を經て、太古と全く同樣の星霧または其他の狀態に復歸するものとすれば、こゝに再び、前と同樣の變化を始むることとなるべし。若し然らんには、宇宙は、永遠無始の古より、斯る變化を繰り返へしつゝありしものといふを得ん。是れ余が此説は、可能的の説なりといふ所以なり。されど此説は、只可能的の説といふまでにて、確かに可信的の説にはあらず。若し可信的の説ならば、過去、現在、未來百般の事件は、既往に於て繰り返さるゝこと、幾千幾萬回、將來に於ても繰り返さるゝこと、幾千幾萬回なるべき筈なればなり。されど之を一例として、人類の歷史の如きものに適用して見よ。その全く可信的ならざるを發見し得べきなり。

此説既に信ずべからずとすれば、吾人は之に代るべき説を採らざるを得ず。そは、即ち宇宙は、一定不變なる自然界の勢力の下にありて、永遠より存在するものにあらず、却て外部の干渉によりて存在するものなりとの説是れなり。他語以て之をいへば、宇宙には起源ありきといふの説是れなり。勿論この説に就ても、種々の困難は、即ち是れあり。されど、此説に就ての困難は、前説に就ての困難ほどには大なるものにあらず。且つ其困難も多くは人の無知に歸因するものなるぞかし。例へば、吾人は、物質は永遠なりや否やを知らず。また物質は、宇宙の起源の際、一種不可思議の有樣にて、存在するに至れるものか、否やをも知らず。若し又、物質は永遠なりと假定し、之に自由勢力が、働き掛けたりとすれば、如何樣に働き掛けたりや。其時始めて、物質をして今日の如き固有性を有せしめたりとせんか、或は又其當時の物質の狀態を變更せしめたりとせんか。是れも亦吾人の知るところにあらず。加之、自由勢力なるものは、曾て宇宙に働き掛けしとありしに、今日は何故、斯くの如き樣子なきか。是れまた吾人の知り得ざるところ。況んや此の自由勢力とは如何なるものかを知ることに於てをや。否々、自由ならざる勢力、例せば重力の如きものにても、之を知るの困難は、決して自由勢力を知るの困難に讓らざるなり。されど吾人は以上列記せることを知らずとて已に知れることをも疑ふべき道理なし。而して余を以て見れば、吾人々類の知れること一あり、他なし、現在百般のことは循環系の一部なりとは信ずべきことにあらず、己に信ずべきことにあらずとすれば、宇宙は自ら永遠に存在するの力なく、却て何時か曾て、自由勢力に働き掛けられしものに相違なしといふと是れなり。之を要するに宇宙には起源なしといふを信ずるよりも起源ありと信ずる方、事遙かに容易なりとす。

(二)科學的論證

然るに前記の斷案は、方今一般に認定せらるゝ二個の科學上の學説により、有力の證明を受く。二個とは即ち進化と、エチルギーの消散是れなり。就中、前者は、若干年前、宇宙には起源ありしといふを示

すものゝ如く、又後者は若干年後、宇宙には終末あるべしと言ふを示すものゝ如し。而して今此の兩說の孰れかを是認するとせば、今の論點は充分之を確定するを得るなり。

兩說の中の第一なる進化論のことは、本書第二章に於て、之を論述すべし。只こゝに一言し置くべきことは他なし、かの進化性を具有せる宇宙の原子なるものは、何等外部の力を借らず無始より存在すといふが如きことは斷じてあるべからずといふと是れなり。若し夫れ無始より存在せば、進化の作用も無始の昔に開始せられたるべく、隨つて、今日は早や其進化は結了したるべき筈なればなり。而して斯くの如きは、事實、確かにあるべからざることにて、進化は現に今日も尙ほ其進行中にあり。若し然らずとするも、僅々數千年前までは、全く然りしなり。斯く已に、進化の狀態は、無始なるを得ずとすれば、即ち必ずや、其始なかるべからず。而して此始は、何ものぞといふに、決して必然にあらず。已に必然にあらずとすれば、必ず之を自由勢力に歸せざるを得ず。言を換へていへば、進化なるものには是非とも其前に進化者ありしとすること、是れ理論の必然なり。進化は自ら其進化を始むるを得るものにあらざるなり。

次に第二のエチルギー消散說といふは、宇宙は漸次、最後の溫熱均一狀態に向ひて進行しつゝあるものゝ如しと說くもの是れなり。是れエチルギーは凡て皆熱を生ぜしむるものにて、且つ熱を均一に分配せしむるに由る。若し夫れ熱にして均一に分配せられなば、溫度はまた是れより昇騰することを得ざる狀態に達すべし。偖この說は、一般の是認せるものなれば、今之をこと〴〵しく證明するの必要なし。只一言し置くべきことは、此のエチルギー消散說は、是れ亦已に確定の學說たる、かのエチルギー保存說に矛盾する所なしといふと是れなり。蓋し宇宙のエチルギーなるものは、其全額即ち量よりいへば、保存せらるゝものにて、又若し其質よりいへば、消散若しくは均一に歸すべきものなればなり。例せば現今、我太陽の中に保存せらるゝ熱は、漸々空間に分配せらるべく、而して、こは、我太陽系統にのみ限らず、全宇宙皆然り。只此のエチルギーが全部消散し盡すは、今より幾百萬年の後なるか知るべからざれど、永遠といふ長き時日に比すれば、言ふに足らず。事情已に斯くの如し。此故に今日の如き勢力を具へし宇宙が、無始より存在し、曾て何等の外部的干涉をも受けしことなしとすれば、今より遠き昔、已に此のエチルギー消散の狀態に達し居らざるべからず。此を以て、エチルギー消散說にして若し誤謬ならずとせば、宇宙に起源ありしといふは、啻に近眞の說なるのみならず、又確實の說なるに似たり。

然るに、こゝに一つ講究せざるべからざる反對論あり。即ち反對論者はいふ、如上の推理は、陳腐の舊說にて所謂『物皆原因なかるべからず、故に第一原因なかるべからず』といふものゝ變形のみ。斯くの如き說に對しては、第一原因にも亦原因なかるべからず。斯くの如くにして、無限に溯らざるべからずと言はゞ事足るべしと。されど此の反對論は、肯綮に當らず。是れ所謂る第一原因なるものは、諸他の原因とは、其種類を異にするものなればなり。即ち第一原因は自由原因なり。之に反して、自然的諸原

因は自由のものにあらず、却て他の自然的原因の結果にて、此の自然的原因自らも亦、他の自然的原因の結果なり。吾人の所謂る第一原因とは、他の原因の結果にあらざる原因なり。他語以て之をいへば、他に動かさるゝことなくして、能く自ら動くことを得る自由の原因なり。吾人、一たび斯くの如き原因に到達せば、また、それより以上の原因を求むる必要はあらざるなり。

果して然らば上記の反對論は成立せず。此故に吾人は、斷じていふ、宇宙には起源ありと。而して吾人が目下、此の宇宙の起源者たる勢力に關して知れることは、只其自由勢力なりしといふことあるのみ。斯くて、吾人が到達せる斷案は、之を簡略にいへば他なし、必然的に作用する自然的原因のあらざる前、自意的に作用せる第一原因なるものありきといふと是れなり。

(乙)宇宙の創造者

次に吾人は、この第一原因につき、此上尙ほ知り得るほどのことを講究せざるべからず。而して最初に先づ一言すべきは、此の第一原因は、唯一原因なりきといふにつき、今日にては粗ぼ異論なしといふことなり。是れ、近代の科學は、宇宙を一貫せる一致あることを全然證明し盡したればなり。見よ、同一の材料は、宇宙到る處に用ゐられ、且つ此の地球に存在する元素にして、太陽及び星辰中に發見せらるゝもの、亦尠からず。又見よ、重力なるものは、遍滿普及のものにて、遼遠なる星辰にも影響すると等しく、此の地球の極めて微細なる物体にも影響す。又見よ、發光エーテルなるものあり。恰かも一種の太氣の如く、宇宙到る處に瀰蔓す。その他、此種の例は、枚擧に遑あらざれど、こゝに之を擧ぐるは、必要なきことなるべし。是れ宇宙は(其言已に之を含示する如く)一個の全体なるは、何人も之を認むる所なればなり。而して此の一事、已に明かに第一原因は、唯一原因なりしことを示す。

第二に、此の第一原因は、超自然的のものなりしといふとも否定するを得ず。超自然とは、此の第一原因は、諸他の自然的勢力と異にして、自由のものなりしを言ふに外ならず。其何故に自由のものなりしかは、前に述べたるが如くなるがためなり。即ち第一原因は、重力の如きものにあらず、分子と分子との引力の如きものにもあらず。化學上の飽和力の如きものにもあらず。是等の諸勢力及び之と類似の諸勢力は、同一事情の下にありては、常に同一の作用をなす。然るに、第一原因なる勢力は、全く之に反したる性質を具ふ。即ち自由勢力にて、或る一定の時、宇宙を起源せんことを自意的に決定したる一勢力なり。此の勢力を稱して超自然と言へるは、斯くの如く諸他の自然的勢力と著しき相違あるを高調せんとの意に外ならず。

最後に吾人は、此の宇宙を起源せし唯一超自然の原因を呼んで、其創造者と言はんとす。此に於てか、本章劈頭に掲げたるが如き題目は出で來れるなり。論者若し之に反對して、宇宙には起源なし、只一種の自由勢力ありて、無始より之に作用せるものなりといはんか。其自由勢力は亦、必ず唯一超自然のものに相違なく、隨つて之を宇宙の創造者と呼ぶも差支なかるべし。

第二章　創造者は此の宇宙を意匠したる事

意匠とは起原力に兼ぬるに豫知を以てせるとの謂なり

(甲)意匠の證據

意匠の證據は、此の自然界中の有機物を通じて、打ち消すべからざるほど夥し。されど今は之に訴へて、創造者の存在を示さんとするにあらず。只其豫知を示さんとするのみ。

(一)時計の例＝時計に意匠の痕跡あり。是れ時計の用途を豫見せし製造者のありたるとを示す。

(二)人の肉眼にも亦意匠の痕跡あり＝隨つて之にも亦其意匠者なかるべからず。

(三)集積的證據＝意匠の他の痕跡。

(乙)進化論の反對

(一)進化の意義＝進化は方法なり、原因にあらず。

(二)進化と當論證との關係＝進化は益々意匠の證據を强大ならしむ。

(丙)自由意思論の反對

(一)自由意思論は頗る近眞ならぬ說なり＝之に種々の理由あり。

(二)自由意思と豫知とは撞着せず＝故に自由意思論の根本論法は成立せず。結論。

吾人は前章に於て、宇宙に創造者のありしとを論定せしが、本章に於ては、此の創造者が、果して此の宇宙を意匠せしや否やを調査せざるべからず。偖、意匠とは、起源力に兼ぬるに、豫知を以てしたるとの謂なり。此故に、こゝに人ありて、自意的の動作をなし、之と同時に、此の動作より發生する結果を豫知したりとせば、之を稱して其結果を意匠したりといふ。今、宇宙に關しては、創造者なるものありて、宇宙を起源せるとは、前に已に之を說けり。果して然らば、こゝに起れる問題は、此の創造者が、宇宙を起源せる時、自己の動作の結果如何を豫知したりや否やといふと是れなり。若し之を豫知したりとすれば、本書の用法により、創造者は、其結果を意匠したりと言ふも差支なし。而して此の結果といふ中には、直接又は間接に今日の宇宙の狀態を、みな包容せり。

所謂る豫知なる語は、必ずしも創造者が將來の事件を悉く思想せりといふの意にはあらず。一々の樹木に於ける葉の位置の如き瑣細のとをまで、思想したりとの意にはあらず。只創造者は、其欲するまに〳〵何事をも豫見する力ありたるものにて、此の意義よりすれば、即ち萬事を豫知せるものなりといふのみ。之を此の逆例ともいふべき記憶に比較せよ。人皆その一生の間に起れる百千の事件を記憶する

力あり。されど、此の百千の事件は、同時に悉く其人の心眼の前に并列せるにはあらず。瑣細の事件に至りては、全く其心眼に映せざるも是れあらん。今も亦然り、創造者は、實際考慮を用ゐざるも、尚ほ能く萬國の歴史に於ける將來の事件を悉く豫見する力ありたるなり。之を要するに、こは一種の豫見なり。否寧ろ豫知なり。而して此の豫知は、意匠といふ言の中に、包容せられ居るものなりとす。

(甲)意匠の證據

次に余の論せんとするは、意匠の證據なるが、是れには其種類極めて多く、殊に自然界中の有機物に於て然り。即ち此の自然界中の有機物には、無數の物体ありて、何れも皆之を發生せしめたる原因そのものに、豫見の力ありたるを示すに似たり。但し、こゝに一言、斷はり置くべきよあり。即ち其物体に意匠の痕跡あるを見て、之を創造者存在の一證となさんとする人、往々あれど、吾人の目的は、こゝにあるにあらず。吾人は只之に訴へて、創造者の豫知力を證明せんとするものなりといふと是れなり。創造者の存在は、前に已に、之を證明し了れり。且つ宇宙が之によりて起源せられたりといふ事實も亦然り。吾人の今、研究せんとするとは他なし、創造者が之を起源せる時、能く其前途を豫知したりや否やといふと是れなり。而して之を肯定する證據は、打ち消すべからざる程に多し。即ち自然界到る所に、高下樣々なる意匠の痕跡あり。斯く此の證據は、余り廣大にして、之を遺憾なく處置するは、容易の業にあらず。思ふに之が最上策は、ペイリの有名なる時計の論證法を用ゐ、第一に先づ、時計の例によりて、意匠の痕跡とは如何なるものなるかを示し、第二に人の肉眼の如き或る一個の機關が如何樣に、此の痕跡を具ふるかを論じ、最後に此の證據の集積的性質を說くと是れなり。

(一)時計の例

人若し時計を取りて之を檢すれば、必ず之に意匠の痕跡あるを發見す。是れその各部は、或る一個の目的のため、組立てられ居るを以てなり。即ち時計の各部は、或る運動を生ずるやうに構造編成せられたるものにて、而して此の運動は、一定の規律により、一日の時間を指示するやうにせられたり。然るに此の各部にして、其構造斯くの如くならず、其配置また斯くの如くならざらんには、或は全然運動を生せざるか、左なくば、時計の目的を果さゞるならん。此點よりして、下し得る推論二あり。第一は、時計には、某の處、某の時に、製造者ありしに相違なしといふとなり。又第二は、此の製造者は能く時計の構成を會得し、時計の實際の目的を達せしむる樣之を意匠したりといふと、是れなり。

此の斷案は、確實にして動かすべからざるものなり。たとへ吾人が、時計製造の場合を實見せしとなく、時計製造の技倆ある人を知らず、時計製造事業には、何の觀念もなく、また機械の作用に關しては全く之を解せずとも、此の斷案には、少しの影響だもあるとなし。否、是等凡てのとは、吾人が此の未知の時計製造者の技倆に對する敬意を增さしむることは是れあるべし。されど時計製造者の存在に對し、又は、之を特種の目的のため製造せりといふに對し、疑念を起さしむるが如きとは、斷じて是れあらじ。

此際、或は、時計を説明するものありて言はん、時計の各部は、嚴に自然法に則りて運動す。自然法に則らずしては運動すること能はず。要するに、時計には、別段、意匠といふほどのものあることなしと。されど、吾人は、斯る説明を聞きて、之を時計の説明とは感ずることなかるべし。却て、吾人の感ずる所は他なし、時計の各部は、其動作、自然法にかなへりといふは、然ることながら、時計の各部は、或る目的のため、一致の運動をなすてふ事實あり。即ち時計の各部は、時計をして時間を報知せしむるため協力す。是れ即ち時計に意匠あることを證明すといふと是れなり。他語以て之をいへば、吾人の所感は他なし、物質の本性といふとは、只時計の説明の一部に過ぎずといふとなり。又時計をして、時間を報知せしむるには、此の本性を利用し得る怜悧の時計製造者必要なりといふとなり。

偖、一層探究の結果、時計は、其運動中、第二の時計を產出する絕妙不思議の能力を有するものなるを發見したりと假定せよ。而して此の理由は、第一の時計に、第二の時計を作出すべき模型を具へ、又之を組立つる機械を有するがためなりと假定せよ。此の假定は果して前の斷案に對して、如何なる影響あるべきや。曰く、吾人の時計に對する敬意と、未知の時計製造者の妙技に對する確信とを增すに相違なし。萬一また時計に斯くの如き特種の性質なく、一々熟練の製造者を必要とすれば、一層、時計製造者の技倆を信せざるを得ず。而して、此の斷案は、所謂る第一の時計なるものが更にそれより以上の時計より生出し、又は其他の時計より生出せりとの事實に過へりとも、毫も動搖するとなかるべし。吾人の感ずる所は他なし、時計は一々、その前の時計より生出せるものなりとも、斷じて之に由りて意匠せられたるにはあらずと言ふと是れなり。されば、之がために、一切の時計を意匠せし時計製造者が、某の處、某の時に、存在したりとの吾人の確信は、寸毫だも減ずるものにはあらざるなり。

以上述べ來れる如きは、即ち是れ時計の論證法なり。されば、吾人若し意匠の痕跡を發見する場合には、何處にか必ず其意匠者あらざるべからず。而して此の斷案は、假令他に如何なる反對理由を生ずるとも、それがため動搖するものにあらず。果して然らば、吾人若し此自然界に於て、意匠の痕跡を有する物体を發見せりとせんに、此の物体にも亦其意匠者あるに相違なしといふは、蓋し明白の推論なり。而して、こゝに注意すべきは、此の推論は、人工と、自然工との類似、非類似には敢て關係せずといふとなり。時計の例は、只意匠論の如何なるものなるかを分明ならしむるための一例として擧げしに止まる。されど、人間若し意匠の痕跡を有するものを作りしとなく、又、之を作る力なかりしとも、意匠論それ自らは依然として、精確の論たるべきなり。

更に時計の例につき補證する所あらんに時計製造者の存在と、此の時計製造者が、時計を製造せりとの事實とは、他の理由よりして、已に是認せられ居ると是れ吾人の認めざるべからざる所なり。また吾人が、斯る意匠の痕跡に訴ふるも、敢て、他意あるにあらず、只時計製造者の之を製造せる時、已に其時間を報告すべきを豫知せしに相違なきを示し、併せて、此の目的のため、彼は之を製造せることをも示さん

ためなり。これも亦吾人の承知し置くべきことなりとす。而して、若し然らんには、前の推論は、一層有力なるものゝ如し。

(二)人の肉眼

次に吾人は、意匠が痕跡を有する自然機關の一例として、人の肉眼につき講究する所あらん。勿論是れは平凡の例なれど、平凡なればとて、敢て擯斥し去るべきにはあらず。偖、明瞭に物を見んとすれば、之に必要なるは、物の映像を眼底に顯出せしむることなり。所謂る眼底とは、網膜即ち視神經の展開せるものにて、印象を腦髓に傳ふることを掌る。而して、元來、眼なるものは、此の映像を生出する視力器にて、或點に於ては、望遠鏡と頗る相似たる所あり。また其意匠の痕跡は、夥多にして、打ち消すべからざるばかりなり。

第一、明瞭の映像を生出せしめんとすれば、肉眼に於ても、望遠鏡に於ても、共に光線をして屈折せしむるを要す。而して此の屈折を來すものを、肉眼にありては、水晶液といふ。水晶液は、其形の彎曲せるに於て、其地位に於て、又其光線に及ぼす効力に於て、望遠鏡の透鏡(レンズ)と相似たり。之に加ふるに、水晶液にも種々あり。故に光線は、幾種の水晶液を通過する間に不完全の映像も、自ら完全す。若し水晶液にして、只一種のみならば、多少、種々の色に分解せられたる光線のため、映像は不完全たるを免かれざるべし。望遠鏡に於ても、元は、斯る故障ありき。然るに能く此の故障に勝ち得たるは望遠鏡製造者が種々の材料もて透鏡を製し、以て肉眼に於ける種々なる水晶液の効力を模するに至れる時のことなるが如し。

第二に肉眼は、近きは幾吋より、遠きは幾哩に至るまで、種々の距離にある物体を見るに適せしものならざるべからず。望遠鏡にては、之をなさんとすれば、或は他の透鏡を加ふるか、或は燒點を變更する等の方法を用ゆ。肉眼にては、如何にして此の結果を來すものか、確實ならず。只此の結果あるは明了のことにして、且つ其精確また驚くべきものあり。即ち數哩に亘れる風景も、直徑半吋の面積内に縮寫せられ、而も其内にある無數の物体は(少くとも大なるものは)悉く皆現はれ、一々その大きさと形と色と地位とに隨ひ、之を看別するを得べし。而も斯くの如き遠距離のものを見得る其眼は、亦數吋の距離にある書籍を讀み得るぞかし。

第三に肉眼は、强弱種々の光力に適せしめざるべからず。此の結果を來すものは即ち虹彩にして、虹彩は環狀をなせる一種の屏風なり。また伸縮自在の力を具へ、能く瞳孔をして、大小宜しきに適せしむると共に、又常に之をして圓形を失ふことなからしむ。之に加ふるに、虹彩は多少、自整の力あり。是れ光力過度の場合には、瞳孔は直に收縮すればなり。斯くの如き工夫は寫眞機に如何ばかり有用なるべきや、亦斯くの如きものを發明する人あらば、吾人は、如何ばかり其技倆を歎美すべきや、是れ贅辯を要せざるとなりとす。

第四に肉眼は、各種の方向にある物体を見る力あり。是れ肉眼の構造は、頭を動かさずして、左右上下に非常の速力をもて、廻轉し得るものなればなり。第五に眼の實用上に肝要のものは、濕氣と清潔なるが、之がために、一種特別の液体は絶えず之に供給せられつゝあり。また之と同時に、過剰の濕氣は、鼻に達する骨の穴を經て流出し、茲に蒸發す。第六に此の貴重なる機械には、一對二個あり。此の二個は、其特別なる裝置により、一方の負傷せる場合に、只他の一方を以て、能く物を視るを得べし。而も通常は、兩者全く相一致して物を見得る仕組なり。第七に眼は出產以前已に形成せられ居るものなるを思へば、吾人が之に對する驚歎は、更に一層を加へざるを得ず。蓋し眼は、豫見的機關なり。即ち未だ其用途なき時に、已に製造せられたるものなり。此點は之を丁寧反覆熟考する時は、何事よりも一層明かに、意匠を指示するものなりとす。

其他、肉眼に就ては、尙ほ言ふべき點尠からず。されど、上に掲げしだけにて、概略、證據の如何なる種類のものなるかを示すに充分なり。要するに眼なるものは、極めて複雜にして、且つ巧妙なる視力器なり。されば、之を見て、是非とも下すべき斷案は他なし、眼は必ず何人かに由りて作られしものなりといふことなり。又之を作れるものは必ず其用途を知りて、之を意匠せるものなりといふことなり。

こゝに一言注意すべきは、右の斷案も亦、先きの時計に關する斷案と同樣吾人が種々智識に不充分の點あるがため影響を受くるものにはあらず。即ち吾人は、眼が如何樣にして、作られしかを知らず。又眼の各部に就て、少しも其道理を知らずとも、眼にして已に存在する以上は、必ず何人かの之を作りたるべきことを確信す。また此の製造者は、其特別なる用途のため、之を意匠し、且つ吾人よりも其構造に關して遙に能く熟知したるべきを確信す。

此際或は眼を說明するものありて言はん、眼の各部は、自然法に則りて製出せられたるものなり。自然法に則らずしては、製出せらるゝことなかるべし。要するに眼には別段意匠なるもの存することなしと。されど吾人は斯る說明を聞きて、之を眼の說明と感ずることなし。勿論、眼の各部は自然法に則りて製出せられしものに相違なし。故に、各部互に孤立のものならんには、別段辯明すべきほどのことは無かるべし。されど眼の各部は孤立のものにあらず。却て其種々複雜せる部分は、一つの驚くべき點に於て相一致す。即ち各部、力を併せて人をして物を見るを得せしめんとし、此他に別の目的あるを見ず。是れ即ち說明を要する點なり。吾人思へらく、眼の各部を組合せし原因と、人の物を視る事實との間には、必ず何等かの關係なかるべからずと。換言すれば、此の結果は意匠に基けるものに相違なし。

自然界各種の有機体は、父子相續するものなりとの事實は、少しも右の斷案に影響なし。否、若し斯くの如くんば、先きに時計の場合にも述べし如く、最始の有機体には、非常の妙技を施せしものといふべく、吾人は之を思ふて只驚歎を增すのみ。之に加ふるに、意匠なるものは、一として親の力に由るにはあらず。言を換へていへば、小供の眼に意匠あばれとて、そは其父母の知力即ち意匠力に由るにあら

ず。否、父母は透鏡の形狀や、虹彩の作用につき、設計せるとなく、却て全然之を知らざるを常とす。此の父母の父母にありても、亦之に同じ。此を以て、斯くの如くに如何ほど昔に溯るとも、探究上、何等の得る所なし。意匠は依然として解決せられず、吾人は依然として意匠者を求むるなり。

此を以て吾人は斷定す、眼に存する意匠の痕跡は、兎に角、意匠者の存在を證する極めて有力明了の論證なりと。而して眼なるものが、宇宙間唯一つにて、他には自然界に意匠の痕跡を有するものなくとも、それがため此斷案は、其効力を失ふものにあらざるなり。

(三)集積的證據

然るに、此の論法は、以上述ぶるが如くに停らずして遙に有力なり。蓋し此の論法は、三の意義に於て集積的なればなり。第一に眼は只一人の人に於てのみ發見せらるゝものにあらず、實に幾百萬の人に於て發見せらるゝものにて、一々意匠の痕跡を示し、一々意匠者の存在を必要とす。

第二に、人の肉眼は、人の肉体にある幾百のものゝ中の一例に過ぎず。耳も口も皆等しく同一斷案を證明するものにて、肺臟心臟また然り。且つ夫れ是等諸種の機關とても、孤立的の機關にはあらず、何れも人体の一部を成し、能く人体に適合せると共に、また機關相互にも能く適合せり。而して幾百の機關が、一々其意匠を顯はし、一々意匠者の存在を示すとせば、此の一々が孤立にあらず、此の一々が相互に能く適合せるとに至りては、一層意匠者の存在を示すと謂はざるべからず。之に加ふるに、人の心なるものも亦人の身体と同樣、是れ亦辯明する所あるを要す。夫れ分子は、豫見的の作用をなすと能はず、隨つて驚くべき意匠の痕跡を具へたる人体を製出すると能はず。況んや能く意匠の痕跡を辨知して之を論證する力ある人の心を製出するとに於てをや。

第三に、人類は、自然界に於ける數百千の有機体の一に過ぎず。而して此の數百千の有機体は、等しく意匠の痕跡を呈するのみならず、中には、人の肉眼に於けるよりも、一層大いなる技巧を顯すものも尠からず。

勿論、劣等の有機体は、通常高等の有機体よりも單純にして、意匠の痕跡も比較的著しからざれど、其存在は、等しく明了なり。植物の花は之が實例として人の多少熟知せるものなり。而して吾人は、意匠の道理を解する能はざる場合にすら、尙ほ其存在を推定することを得。例へば、團栗の如き、其發達して槲樹となるを得るは、其構造實に絶妙のものに相違なし。且つ之と共に注意すべきは、或種の動物の本能に於ても、又動植物相互の關係に於ても、意匠の證據ありといふと是れなり。就中、動物は、有機物を食物となすものにて、而も自ら之を土壤、空氣、水等より製出するの力なく、植物を得て、之を其用途に供するなり。

證據は、啻に上記に止まらず。蓋し此の世界自ら意匠に由りて成れる痕跡を有すればなり。若し夫れ此の世界をして、單に渾沌たる狀態に止まらしめば、吾人或は創造者自ら其行動の結果を豫知せざり

しなりと臆斷するかも知るべからず。されど吾人の住する此の地球の如きは、驚くべきほどに能く生物の扶養に適せるものなれば、之を單に偶然に出現せるものとは言ひ難し。之を製出するためには、知慧も、力も共に無かるべからざりしは、言ふを待たず。果して然らば、又豫想あり、豫想者ありしと謂はざるべからざるなり。

此故に吾人は、此の問題全部を通覽して斷言す、自然界に於ける種々の現象は、皆歴々として意匠の痕跡を呈す、眼の如き機關にありては、殊に然りとす。且つ夫れ自然界には一致あり、而して其各部は、相互に無數の感應と反應をなす。例せば光無き時は眼は用を爲さず。果して然らば、一の物に意匠あるは、凡ての物に意匠ある證據といふべし。加之、此の意匠者は即ち又、自然界全体を作出せる宇宙の創造者に外ならずとの斷案も、明白にして贅辯の要なし。此の論法に對しては、重要の反對論と見るべきもの二あり、而してに二に限る。便宜のため、之を呼んで進化論の反對及び自由意思論の反對といはんとす。

(乙)進化論の反對

此第一の反對者論はいふ。自然界の萬物は、一定の法則に從ひ、進化の經過により現出せるものなり。此故に、或は創造者なるものありて、今日現存の諸現象を豫見せるかも知るべからざれど、所謂る自然界に於ける意匠の痕跡なるものは、皆是れ法則の必然的、不可避的結果に外ならず。創造者なるものありて、實際之を然らしめたりとの證據あるを見ざるなりと。偖、今この反對論を論明するに先だち、第一に聊か丁寧に講究せざるべからざるは、自然法及び自然力とは如何なるものかといふと是れなり。先づ自然法とは、自然界の諸現象に現はれし齊一を意味す。例せば多少の例外もあれど、熱が物体を膨脹せしむるを見て、即ち之を自然法又は自然則と稱す。されど、こは吾人が熱に斯る力あるを知るを意味するのみにて、何故熱に斯る力あるかを知るの意義にはあらざるなり。他語以て之をいへば、熱なるものは、殆んど凡ての場合に、膨脹を起すを見、熱は即ち膨脹の原因なりと推定するのみ。而して、熱が物体を膨脹せしむるを自然法と呼べばとて、之に由りて、此の現象の理由は、少しも説明せられたるにあらず。斯くの如きは凡ての現象に關して皆然り。此故に自然法なるものは、何物をも説明せず。只説明を要する諸の事實を表はすものに過ぎざるなり。

之と共に注意すべきは、自然法なるものは、何等の結果をも來すとなしといふと是れなり。即ち自然法には、何等の强制力もなし。例せば、重力の法則が遊星を動かすにあらざるは、尚ほ航海の法則が船舶を進行せしむるにあらざると等し。之を動かし、之を進行せしむるものは、即ち其法則に從ひて作用する何等かの能力、何等かの勢力なり。次に自然力とは、吾人の知れる限りにては、終始常に或一定の法則に從ひて作用する勢力をいふ。自然力は、自ら撰擇の自由を有せず、己れの隨意に、或は作用し、或は作用せざる力を有せず。却て同一の境遇の下にありては、何れの時にも、又何れの處にも、同一の作用をなさゞるべからざるものなり。いざ是れより進化の問題に移り、第一に先づ其の意義を講究し、第二

に目下の論證との關係を說かん。

(一)進化の意義

進化なる語には、有機的進化と、自然淘汰と、適者生存との三を包含す。第一の有機的進化とは、他なし、現在若しくは既往に、此の世界に存在せる各種の生物は、何れも皆其前にありし一層單純の生物の子孫にて、此の單純なる生物は更にそれよりも單純なる生物の子孫なり。斯くして順次、其の源に溯れば、最も原始的なる或種の生物に達すべし。斯くの如きは、是れ有機的進化の大意なり。次に自然淘汰說といひ、適者生存說といふは、即ち此有機的進化の生ずる方法を說明するもの也。凡そ如何なる有機体にありても種々の小變狀を來すは珍しきことに非ず。而して此の小變狀の中にても、生存競爭上、該有機体に利益を與ふるものゝみ永續せらるべきものなり。即ち斯くの如き小變狀は、終には其子孫に遺傳せられ、斯くして漸次、高等生物は發生するに至るといふ。偖この兩說は、猿より人類生ずといふが如き突然的變化に訴へず、徐々に有機的進化の生ぜしことを說くものにて、是れ即ち此の兩說の長所なりとす。

以上述ぶる如くなるを以て、進化は、方法にして原因にあらざるは、是れ勿論注意すべきとなり。即ち進化は、或る變化を發生せしめたる法式のみ、之を發生せしめたる原因にはあらざるなり。かの小變狀なるものは、何れも皆、別に何等かの方法もて發生し來るものなり。而して此の小變狀の發生せる後に至り、自然淘汰說は、初めて有用のものゝみ獨り永續する理由を說明することを得。此の小變狀そのものが如何にして發生するかは、自然淘汰說の能く說明し得るところにあらざるなり。否、自然淘汰說は却て、小變狀の前より既に存せることを假定す。小變狀、存せざる時は、淘汰すべきものもあるべからざる道理なればなり。果して然らば、自然淘汰とは、剪除作用にして、播種作用にはあらざるなり。試みに有機体に起れる種々の變狀を見るに、或ものは有益にして、或ものは有害なり。而して其の示すところは、無益のもの滅亡し、有益のもの獨り永續する方法是れのみ。換言すれば、適者は如何にして生存するかを示すに過ぎず。されど、適者生存なるものは、寸毫だも、適者は如何にして生存するかを說明するものにはあらず。今、一つの極端なる例を擧げんに、こゝに百頭の動物ありとし、其中の五十頭は眼を有し、五十頭は盲目なりとせよ。さすれば、此の眼を有せる五十頭が如何にして盲目なる五十頭よりも其種類を永續せしむるに適せるかを知るは困難のことにあらず。されど、こは如何にして此の五十頭が最初に眼を有するに至れるかを說明するものにはあらず。而して之と同じ論法は、他の諸の場合にも亦適用するを得るものなりとす。

果して然らば、各有機体の變化なるものは、最初如何にして起れるものなりや。普通にいふ場合には之を偶然に起因すといふ。されど嚴密にいふ時は、斯くの如きことは、實際有り得ざることなり。偶然といふ語は、自然界の或勢力より生ずる結果が不明にして之を說明するを得ざる場合に、假用せらるゝ便宜

の語に過ぎず。此故に偶然は、之を措いて顧みずして可なり。されば、之が說明には只二途あるのみ。第一は、自然界の有機体は皆自由意思を有し、隨意に行動すといふもの是れなり。また第二は、否、彼等には、自由意思なし。彼等の行動は、必然に由るといふもの是れなり。第一の假說は、吾人、後に至りて之を論述せん。又第二の假說は、現に吾人の講究しつゝあるものなり。而して、こは自然界の凡ての有機体にありて皆同じ。是れ皆單獨の機械にして、其前途はかの外部的自由勢力(即ち創造者)が之に作用せし最後の時に、已に一定せるものなればなり。所謂る最後の時とは、進化論による時は、最初の生物が發生せる時なり。それより以後は、萬物みな普通の自然力によりて發生せるものなり。果して然らば、萬物は皆自働的機械なり。前に存せしものより生じたる必然的結果なり。

(二)進化の結果

以上論ずるが如くなる時は、前に自然界の諸機關を論じ、眼の如きものを初めとして、一切皆創造者の意匠せるものなりといひ、隨つて宇宙全体皆然りと言へるは、誤謬なるべきか。否々、進化論は却て前論を確實にするものなり。今此の理由を明かにせんに、自然界の有機体に創造者または其他の勢力の干渉もなく、さりとて又自由意思の存するにもあらずとせば、地球も萬物も皆大なる機械の團塊に等し。此の機械の各部は如何ばかり複雜なるものにもせよ、又如何なる活動をなし、且つ互に相反動するにもせよ、又之がため如何ほど長き年數を費すにもせよ、最後に至りて、遂に意匠を示せる一つの機關を生ずるが如きとあらば、是れ即ち此の機械の製造者が、豫見したるもの、創造したるものと謂はざるを得ず。之と等しく、機械の一團塊が、長時日の間運轉したる後、遂に一個の時計を現出するが如きとあらば、吾人は猶豫なく斷言せざるべからず、此の機械を製作して之を運轉せしめしものは何人にもせよ、其主意は即ち時計を現出せしめんとするにありたるなりと。然るを今若し時計が現出したるのみならず、時計製造者も現出し、其他地球上にありとあらゆる物皆悉く現出したりといはゞ、此論法は纖薄となるべきか、斷じてさる理由あらざるなり。

此故に進化論の示す所は他なし、自然界全体は、長期の繼續作用にて成れるものにて、斷片的に成れるものにあらずといふと、是れなり。果して然らば、苟も其の目的が豫見せられたるものたる以上は最初より豫見せられしものたらざるべからず。之を換言せんに、自然界の一致を以て見れば、一の物に意匠あるは、凡ての物に意匠ある證據なり。之と等しく、進化を以て見れば、苟も意匠あるを認むる以上は、最初より意匠あるを認めざるべからず。此に於てか、吾人は結論す、自然界の諸機關は眼の如きものを初めとして皆意匠の證據を具へたるものにて、是等は別々の意匠に成れるにもあらず、後日の思ひ付きにもあらず、最初より皆一大意匠の中に包容せられたりしものなりと。而して、こは偶々以て、吾人が此意匠者に對する敬歎を增さしむるに足る。果して然らば、進化論はその最も極端にして、且つ自働的のものにても、未だ以て意匠者を否定するを得ず。然るを況んや、少しも自働を主張せず、却て自然界

の内在者、萬物の指導者たる創造者の不斷的行動によると說く進化論に於てをや。

之に加ふるに、著しき意匠の痕跡中には、到底進化論にて說明する能はざるものあり。たとへば、人の肉眼の如きもの是なり。夫れ物を見んと欲し、又は物を見んと企つるに由りて(盲目の動物に斯る力ありと假定して)眼を得らるべきにあらざるは言ふを待たず。されど、或は說をなすものあらん、太古未發達の有機体の中には、元形的の眼を具へしものあり。此の眼は、物を視る力なきものなるも、その構造及び地位は共に眼に類せるものにて、後世に至り發達して眼となれりと。此の說を以て見る時は創造者には眼を意匠する力なかりしものなり。若し然らずば最初より完全の眼を動物に與ふべきにあらずや。

されど、一歩を讓りて、眼は無用のものとしても(而して眼は無用のものなりとは、少くとも疑はしきことなり。是れ眼は多少光を感ずるとのるを以てなり。)此說は尙ほ意匠論の味方なり。蓋し創造者は、或る一定の設計に基き、徐々たる進化の經過を以て、自然界の萬物を生じたる如くに、人の肉眼をも生じたるは、有るべからざることにも非ざるを以てなり。若し夫れ此の見解を外にしては、かの元形的の眼なるものは、到底不可解なり。是れ斯〳〵の如き眼は、生存競爭上、その所有者に何の實用もなきを以て眼なり。元來、眼は一個の豫見的機關たりしなるべく、即ち徐々に進化し、時代を累ねて完全に至れるものにて、其の完成するまでは、實用なかりしものなり。果して然らば是れまた他のものと同樣明かに意匠を示すといふべし。之に由りて是を觀れば、無規律の進化(無規律の進化とは、單に所謂る偶然の變化より起るものを進化といふとの說なり)も、適者生存も、到底眼を說明するに足らざるものなり。眼を完全に說明せんとすれば、自然淘汰は不可なり。却て超自然淘汰を以てせざるべからざるなり。されど今は、論證の都合上、これを然らざりしものと假定し、眼も其他の機關も、皆單に自然的の方法に由りて生じたるものと想像せよ。之と等しく、人の手の如きも、猿の足より進化せるものと想像せよ。即ち猿が(勿論無意識に)手として之を使用せんとし、物を把握せんとしたるより進化したるものと想像せよ。此の想像は果して意匠證據論を顚覆すべきか。否々、之を顚覆せざるのみならず、却て之を援護するものなり。是れ蓋し猿が手として使用せんとするまに〳〵、將來遂には化して手となるべき足を製するとは、初めより直ちに手を製するに比し、尙ほ一層の意匠を要する道理なればなり。之と同じ論法は、之を廣く一般に適用するを得べし。此故に、今日現存の自然界の諸機關にして、何れも皆自働的に、單純の機關より進化せるものとせんが、さすれば、此の單純の機關に加へたる意匠は、その量實に無限のものなりと謂ふべし。

斯くの如くにして、進化を說かんとすれば、必ず其前に內備ありしことを認めざるべからず。如何なる生物にても、其最始の生物より進化せんとすれば、それに先だちて內備あるを要すればなり。隨つて進化作用を以てする創匠は、之を直接製造を以てする創造に比し、一層驚くべきものと謂ふべし。而して、

前にも已に言へるが如く、創造者は種々のものを一々手を下して創造したりと言ふよりも、寧ろ進化といふ一大系統を設け、之によりて所要の結果を生出せりといふは、創造者觀としては遙に高尚のものゝ如し。是れ其場合には、結果を收むるの法式が、結果と同樣に驚くべきものにして、且つ結果と同樣に知慧と豫見とを示し、互に優劣あるとなければなり。果して然らば進化とは、最も高尚の創造法なるものゝ如し。而して啻に有神論を顚覆せざるのみならず、却て有神論の有する困難を救ひ上ぐ。是れ各有機体の各部は、即ち意匠によりて成れるものにて、且つそれも無限者に相應しき有樣に於てせしことを示せばなり。

吾人若し一層進化の源に溯り、最も原始的の生物は既存の非情物より自ら進化せるものなりといふとも、右の論證は、毫も痛痒を感ずるとあらず。否其非情物が、更に單純のものより進化せりといひ、其單純のものが、更に如何なる原形的のものより進化せりといふとも、尙ほ痛痒を感ずることあらざるなり。其理由他なし、今日現存する結果にして意匠を示せる以上は、之を基礎とせる意匠者存在の推論といひ、更に一歩を進めたる意匠者豫知の推論といひ、共に確立不動なり。假令是等の結果は、地球の尙ほ未だ星霧たりし時代より已に定まり居たるものなりと信ずとも、此の推論は敢て動搖せず、偶々吾人が此の意匠者の技量に對する敬意を增さしむると、是れあるのみ。

(丙)自由意思論の反對

最後に講究すべきは一層重要の反對論にして、即ち自由意思論より起るものなり。論者即ちいふ、自然界に於ける諸の有機体は、何故多少の自由意思を具へ、以て自ら最も己れに好都合なる形体を取れるものとなさゝるや。例せば時計に就て考へ見よ。時間を報告するは、時計に取りて有利のことなりとし、又彈機、車輪、指針等は各自由意思を具ふるものとせば、即ち是等のもの自ら相集まりて、最も好都合の配置を取れるものと看做し得べし。已に斯く看做す以上は、時計製造者が此の配置に適するやう、之を豫想し之を製作したりといふが如き假定は、之を設けざるも可なるに至らんと。

偖、肉眼の如き、意匠を示せる自然界の機關は、常に之が所有者の幸福を助くるもの故、斯くの如き場合には此の反對論も、强ち信を置くべからずとせず。されど後段にも說明する如く、こは頗る近眞ならぬ說なり。加之、此の自由意思といふ說そのものも、實は維持すべからざる說なり。言ふまでもなく、吾人は有機体に自由意思ありと認むるにあらず、今は只自由意思あるかも知るべからずと假定して言ふのみ。而して若し之を否認するが如き人あらば、此の反對論は其人に取り全く無効なり。

(一)自由意思論は頗る近眞ならず。

こは、三の理由よりして明了のことなり。第一、自然界の最下級にある有機体は、よしや自由意思を有すとも、極めて少量のものならざるべからず。例せば、草木の如きものが、人類のものに似たる自由意思を有すべしとは、如何にも想像し難きことなり。而も此の草木にも意思の痕跡は歷々たり。第二、高等

の有機体にありては、或は自由意思を具へて、一定の目的に進む力あるかも知るべからず。されど彼等が自己の使用に供するにあらずして、只子孫の便益となるべき機關、即ち眼の如きものを有する理由は分明ならず。且つ又盲目の動物が、如何にして眼は貴重のものなるかを知り、如何にして眼を得る適當の手段を知り得たりや。是れ亦疑はしきことならずや。第三に、自由意思を有すると、萬疑ふべからざる人類の如きものにありても、之によりて己れの欲するものを悉く發生せしめ得る證據は、一つも是れ無し。例せば、人類は、二の眼に滿足せず、三の眼を得んとを望むとせよ。何人か能く此の第三の眼を得べき途を知り得るものぞ。而も人類自ら己れに二の眼を與へたるものとすれば、時間だにあらば三の眼をも己れに與へ得べき道理ならずや。

以上掲げたる諸の理由よりして、自然界に於ける意匠の痕跡は、創造者の力によるにあらず、却て有機体自身の力によるといふは、如何にも近眞らしからぬ說なり。然るにこゝに反對論に取りて一つの有力なる論證あり。若し此の論證にして成立せば、前段述べたる三の理由を覆へすに足らん。其の論證とは、たとへば人類の如き動物は、事實上自由意思を具ふといふことなり。加之、人類の如きは、或程度まで己れの自由意思を用ゐて、其狀態を變更するを得べく、且つ實際之を變更すといふをと是なり。此に於てか論者はいふ、人類將來の狀態如何を豫知するは、創造者にありても不可能のとなり、是れ自由意思と豫知とは、必然相兩立せざるものなればなりと。されど此の後段は一般の承認せざる所なり。

(二)自由意思と豫知とは撞着せず

行動の自由と、行動の將來を豫知すといふとは、之を一見すれば、相兩立せざるものゝ如し。されど丁寧に之を吟味する時は、少くとも疑はしき所あり。自由意思者が如何なる行動をなすべきかを豫知するは、或る場合には、必ずしも不可能の事ならざるは、是れ吾人の經驗の示す所なればなり。例せば、或る一定の外部的事情の下にありては、我自ら明日如何なる行動をなすべきか、自ら之を豫知し得るが如き是れなり。此の外部的事情の確實ならざる場合には、我自ら將來の事件を豫知する力なし。隨つて豫知とは、人類にありては、豫察といふと異ならず。されど、一定の事情の下にありては、我れ自ら我將來の行動を豫知して粗ぼ誤りなきを得べし。たとへば、我健康に異狀なく、また何人も我に椿事を傳へず、曰く何、曰く何と、其事情一定せる時は、我自ら明朝何時に事務所に出勤することを豫知し得るが如し。而も、我自ら我行動を豫知したればとて、此の行動は我に取りて自由ならずと感ずるが如きとは萬々なし。我今夜わが明朝なすべきことを知れるため、我それを爲さざるべからずといふ理由なし。我將來の事件を豫知すればとて、將來の事件は之がために來るにあらず。即ち豫知は、斷じて原因にはあらざるなり。行動の來るは、わが自由意思による。我は只わが自由を如何に使用すべきかを豫知するのみ。而して斯くの如きは恐らく此の問題に關する人類普通の感情なるべし。果して然らば、我の豫知は必ずしも我の自由意思と衝突するものにあらざるに似たり。此故に、我若しわが將

來の行動を人に告げたりとも、其人の豫知は、わが自由意思と衝突することなし。隨つて、或場合には、外部の事情の如何を見て、甲者が乙者の行動を豫知し、而も乙者の自由を妨げざる樣にするは不可能にあらず。之を要するに、人類の場合にありても、自由意思は必ずしも豫知と撞着するものにあらず。但し實際上常に相撞着するは、全く人の自ら周圍の事情を知ると完全ならざるに由る。されど創造者にありては然らず、是等周圍の事情を完全に知れるものなり。然らざるも之を知り得るものなり。此故に其自由意思は一層その豫知と撞着することなし。

而して、吾人をして一層之を確信せしむるものあり。そは自由意思者の行動如何を豫知する困難は、よし如何程大なりとも自由意思者を創造するの困難に比すれば言ふに足らざるものなること是なり。夫れ經驗を離れて言ふ時は、吾人恐らくは、自由意思者の創造を以て實際不可能のことなりと言ふなるべし。されど人類は兎に角創造せられたり。果して然らば、此の大なる方の困難に克ち、自由の人類を造れるほどの創造者が、小なる方の困難に克ち、人の將來の行動を豫知することを得ざる道理やある。之に加ふるに、自由意思と豫知とは、常に必ず撞着するものならんには、創造者は自己の行動を豫知するを得ざるものなるべく、若し之を豫知せば其行動は自由のものならざるべし。されど斯くの如きことは、共に實際是れあるべしとも思はれず。斯くいへばとて、吾人は創造者が己れの行動を豫知せりといふにもあらず、自由なる人類の行動を豫知せりといふにもあらず。只創造者が、之を豫知するは、不可能の事にあらずといふのみ。他語以て之をいへば、自由意思と豫知とは必ずしも撞着するものにあらずといふのみ。

而して斯くの如きは、吾人の恰も示さゞるべからざる點なり。夫れ自然界に於ける意匠の痕跡は、創造者に豫知あることを示して、其證據充分なりと思はる。然るに論者は此の證據あるにも拘らず、尙ほ之を否認せざるべからずといふ。而して其理由に曰く、人類の如き自然界の或る有機体は、自由意思を有す。此故に豫知は事の性質上、不可能のことなりと。されど斯る反對說は、豫知の不可能にあらざるを認むると共に直に無効に歸せんのみ。

偖、吾人は本章に於ける論證を約言する所あらんに、第一には、意匠を說明して、是れ創造に兼ぬるに豫知を以てせしものなりといへり。第二には、自然界に於ける意匠の證據を講究し、而して特に之を自然界よりし、其一例として人の肉眼を撰び、論證を此點に集中せしめたり。而して此の證據論は、完全不可抗のものたるが如く思はれたり。是れ特に、創造者の存在といふが如き、已に是認せられたる事項の證明に用ゐらるゝことなく、單に創造者の豫知を證明するに用ゐられたればなり。第三に吾人は、此の論證に對して進化論と自由意思論とより起る二つの反對論を講究せり。然るに丁寧なる調査を遂ぐるや、前者は却て此の論證を保證し、後者また此の論證に衝突するものにあらざるを發見せり。故に吾人は此の問題の全部を通覽して敢て斷言す、創造者は宇宙を意匠したるなりと。

第三章　此の故に神の存在は非常に近眞のものなる事

(甲)神てふ言の意義

(乙)神の二屬性

宇宙を意匠し創造したるペルソナル、ビーイング。ペルソナリチーに關して數言す。

(丙)神は不可知的なりとの反對論

知慧と能力。

(丁)前論を約說す。

こは或點までは事實なり。されど何事にても、其實性は不可知的なり。只吾人は何事につけても、多少之を知ることを得ば、それにて滿足すべきのみ。

(甲)神てふ言の意義

吾人は前章に於て、創造者が宇宙を意匠せることを斷定せり。換言すれば、創造者が宇宙を創造せる際、其前途を豫知せることを斷定せり。偖、吾人は斯く意匠するの力あるものを呼んで、之をペルソナル、ビーイングと謂はん。而して神とは此の宇宙を意匠し、且つ之を創造せしペルソナル、ビーイングを呼ぶ名なり。此に於てか、本章の初めに掲げたる題目は起れるなり。

されど吾人は次の問題に移るに先だち、ペルソナリチーてふ語に就き一言すべきことあり。抑も此の語は、之を人類に適用する場合には、之を此に用ゆるよりも一層廣意に用ゆるを常とす。即ち此語に意匠の力といふが如きとの外、尙ほ自意識（即ち自己を考ふる力）の如き他の屬性をも加へて之を用ゆ。さればペルソナリチーてふ語には思想、欲望、意思てふ三の意義を含むといふ學者多し。されど余を以て見れば、是等凡てのものは皆意匠の中に含めり。是れ我若し何事かを意匠すれば、最初に先づ之を思想し、次で之を願望し、最後に之を遂行すべきものなり。吾人は次の章に於て人類果して此に定義せるペルソナル、ビーイングてふ語の意義に適ふや否やを調査すべけれど、こゝに二の點につき述ぶる所あらん。

第一。吾人若し人類のペルソナリチーを認むとせば、是れ即ち創造者のペルソナリチーを證明する一個獨立の論證なり。是れ創造者は兎も角已に人類を生出して、之に其諸屬性を賦與したればなり。隨つて創造者は、單獨なる非ペルソナルにもあらず、また勢力にもあらず。是れ非ペルソナル、ビーイングや勢力は、ペルソナリチーてふ觀念を抱く能はざるものにして、殊に人類に於て斯くの如き結果を生じ得べきものにあらざればなり。換言すれば人類をペルソナル、ビーイングとすれば其創造者をもペルソナル、ビーイングと認めざるを得ず。

之に加ふるに、後にも說かんとする如く、人類にペルソナリチーありといへば、人類に心と精神ありと

いふことを包含す。されど心といひ、精神といひ、共に物質的手段を以てして發見し得るものにはあらず。此點は物質的手段を用ゐて神を發見する能はずといふ反對論の答となすに足れり。吾人若し之を發見し得べしとせば、一層驚くべきことなり。即ち望遠鏡は天の神を發見する能はず。顯微鏡は人の心を發見する能はず。されど此の兩者の存在は、他の理由よりして確實のことなり。之を通俗の語を以ていへば、吾人の發見し得るものは、兩者何れの塲合にも、只外部の家のみ、其の內の住居者にあらず。

第二。人類のペルソナリチーてふ觀念は、一大困難を惹き起す基なり。而して此の困難は、有神論の諸難問中、最大のものなりと認むる人も多き程なり。そは創立者も亦人類と同じ意義にてペルソナリチーなりと信ずるに至るとをいふ。蓋し人類のペルソナリチーといへば、其普通の意義に於ては、即ち個人といふとなり。而して個人性といひ、獨立存在といへば、其人以外に、何物か別個に存在するものあるの意を含む。隨つて何等かの制限ある意を含む。然るに宇宙の創造者即ち第一原因は、永遠、遍在、且つ萬物を包容する者の如くなるを如何せん。

此點は是れ疑ひもなく困難の點なり。されど、此の困難は恐らく吾人の無識に因るものならん。ペルソナリチーとは、人類にありては制限を含示す。されど創造者のペルソナリチーは必ずしも制限の意味ありと認むるを要せず。之と等しく人類にありては、見るといへば、即ち其視官あるとを含示す。されど神にありては、見るとは寧ろ此言を以て最も適切に代表するとを得る其不可知的屬性にて、少しも視官を含示するとなし。要するに人類の觀念は、之を神に移す時は、必ず不完全、不充分のものたるを免かれず。而して尙ほ之に添へて一言し置くべきとあり。他なし、第一原因をペルソナリチーと呼ぶに躊躇する人は、ペルソナリチーてふ語が不精確なりとの理由にて躊躇するにあらず。寧ろ不適當なりとの理由にて躊躇するものなりといふとなり。此の人々はいふ問題は、ペルソナリチーとペルソナリチー以下の或者と號れを取るかといふにあるにあらず。寧ろペルソナリチーとペルソナリチー以上の或者と號れを取るかといふにありと。夫れ第一原因を叙述すには、人類の意識を叙述する言に於てすべからざるは、猶ほ人類の意識を叙述するに、植物の機能を叙述する言を以てすべからざると同し。斯くの如き事情なるを以て、吾人はペルソナリチーてふ語の意義を制限し、之を意匠の意味となすを適當と思量せり。而して此の意義よりすれば、宇宙の創造者は、ペルソナル、ビーイングなりとの證據は、前段已に論ぜし如く、不可抗的のものなり。

(乙)神の二屬性

次に吾人は、稍丁寧に此の創造者の兩屬性たる知慧と力とを考察せざるべからず。偖此の兩者は意匠の力あるペルソナル、ビーイングてふ思想の中に自ら含まれたるものなり。蓋し意匠とは本書に用ふる意義よりすれば、創造即ち自由に何事をもなすとと、豫知即ち事前に設計するの意義とを含みたれ

ばなり。此故に吾人若し此の意匠といふ語を、多くの場合に於けるが如く、只設計の意に用ゆるならば、ペルソナル、ビーイングは意匠と遂行と二つの力を兼ねたるものなることを記臆せざるべからず。就中、前者は或計畫を立つるに堪ふる心といふ意を含み、後者の遂行するに堪ふる自由勢力、若しくは自由意思といふ意を含む。果して然らばペルソナル、ビーイングといへば、是非とも意匠の知慧と、遂行の力とを有するものならざるべからず。而して宇宙の廣大無邊にして、有機体の複雜無限なるを思へば、創造者は極度にまで此の二つの屬性を兼備し、全知全能のものなりと斷言すること、蓋し理の當然ならんと思はる。

されど此の兩語に與へし意義に注意するは是れ大切のことなり。先づ全知とは有らん限りの凡ての知識を有することをいふ。若し不可能と看做すべき知識ありとすれば、そは只自由動物の將來の行動如何といふと是れのみ。而して斯くの如き知識も實は不可能のものにあらざるは、既に已に之を說けり。此故に、全知には全く何等の制限もなきものなりとす。

されど全能といふことに至れば、其場合前者と相同じからず。全能とは前にもいひし如く有らん限りの力を有することをいふ。委しくいへば、不可能ならざる程のことは、一切之をなすに堪ふることをいふ。勿論基督信徒の中には、神には能はざる所なし（太十九〇廿六、廿六〇三十九）と答へんと欲する人もありぬべし。されど斯くいひ給へるキリスト自らが、其祈禱の一發端に若しかなはゞといふ語を冠せしを見れば之を無制限の意義に解するを得ず。而して不可能といふ語を嚴密の意義に用ふとせば、神は不可能のことをもなし得べしと思ふは不道理のことなり。不可能のことは圓の特性を以て三角形を造るが如き、人に二つのもの丶自由撰擇を許しながら、是非とも其一を取らしめんとするが如きにて、こは神にも不可能のことなり。果して然らば智慧と力とは即ち是れ神の二大屬性にて、尙ほ其第三屬性に就ては、第五章に至り講究する所あらん。

尙ほ之と共に注意すべきは、神は只既往の宇宙の意匠者、起源者たりしに止まらず、尙ほ現在の維持者たるが如きことは是れなり。即ち神は今日も尙ほ自然界到る處に活動しつゝある遍在的の力なり。而して自然界に斯くの如き力あるは、是れ殆んど否定すべからざることにて、且つ此の力は創造の力と同一のものなることも、實際、最も近眞的の假說なり。斯くの如くにして、神は凡ての自然的勢力の原因なること、猶ほ神は既往に曾て其創造者たりしと同じ。而して第二原因と稱せられ、自然原因と稱せらるゝものは、言としては便宜の言なるも、事實としては恐らく存することなかるべし。實に第二原因は第二勢力と稱するに差支なからん、されど嚴密の意義に於ては原因と稱すべきにあらず。原因は自由ならざるべからず。また發起の力を有せざるべからざればなり。此故に人類の自由意思若し自由のものならば、こは眞の第二原因なるべし。されど自然界の勢力に至りては然らず。是れ只必然的の出來事を前後相連結するのみ。隨つて之を原因と稱するを得ず。此點を稱して往々自然界に於ける神の內住

といふ。而して其意義は殆んどペルソナル的なる神の遍在といふと異ならず。即ち神は『少しも離れ居らざるものなるが故に、近しと呼ぶとさへ當らざるものにて』、其影響は自然界の何處にも及ばざる所なきものなりとす。

而してこゝに一言し置べきとあり。即ち神若し遍在ならば不可見的ならざるべからず。若し可見的ならば必ず何等かの輪廓ありて必ず人類の目に觸るべく、斯くの如くにして甲の處にあると同時に乙の處にあるを得ざるべし。且つ神若し自然界に內住し、而して一切の自然的勢力は神の意思の直接的結果に外ならずば、神の意思に異動なき限り自然界の勢力も亦變更せざるべしといふと是れなり。此故に今日自然的勢力が變動なきとは、少しも有神論に不利益のものにあらず。是れ變動常なき神に取りて不利益なるべきも、智慧あり、一定の目的ありて其力を運用する神に取りては斷じて不利益のものにあらざるなり。

(丙)神は不可知的なりとの反對論

最後に吾人は以上諸章に記したる全論證に向けられたる大切の一反對論を講究せざるべからず。即ち論者はいふ。人の心は第一原因を證論するに堪へざるものなり。是れ人類には無限を領得するだけの力なければなり。普通の言にていへば神は不可知的なればなりと。

偖此の反對論は或る點までは事實なり。即ち或る意味よりいへば、神は不可知的なるとは何人も皆是認す。神の存在と其屬性とは余り廣大なるが故に、人の心は其全部を領得するに堪へず。又人の言は完全に、精確に之を言ひ顯すに堪へず。隨つて吾人の此問題に關する說述は如何ほど最負目に見るも、只事實に近きものたるに止まる。吾人は神の存在を端倪するを得るのみ。決して之を領得する能はず。即ち神の存在の意義を知了し得るは只神のみ。此故に神の眞性質は不可知的なりといふを是認するに於て吾人は少しも躊躇せざるなり。

されど嚴密に之を言ふ時は、何事も皆然らざるはなし。人も亦其眞性質は不可知的なり。而も吾人は人に就て多少知る所あり。之と等しく自然界の諸勢力も、其實相は、不可見、不可知的なり。而も吾人は其結果より推して多少之に就て知る所あり。また物質とても、之を碎いて分子となし、原子となす時は、同じく神秘なり。而も吾人は物質に就て知る所尠しとせず。且つ夫れ此の多少の智識なるものは、右何れの場合に於ても、其不完全なるがために虛僞なりといふとは更になし。果して然らば、神の眞性質は不可知的にもせよ、吾人が部分的に而も眞實なる神に關してのの智識を有すといふに何の妨かある。又此の智識を科學的秩序に排置するに何の妨げかある。之を要するに、吾人は神に關して、一切悉く之を知ると能はずと雖も、多少之を知ることを得るものなりとす。

尙ほ此に一言すべきは、自然神學と自然科學とは此點に關して相類似せるものなりといふとなり。即ち兩者とも自然界に於ける目擊的現象に基ける推測を根據とせるものなればなり。例せば吾人は墜落

物体の運動を目擊し、此の理由を說明すとて、重力と稱する一種の勢力の存在を推定す。之と等しく、吾人は自然界到る處に意匠の痕跡を發見し、之に由りて何人か之を意匠せる者の存在を推定す、少くとも此の意匠者の豫知を推定す。而も吾人は此の兩者何れの場合に於ても、現象の原因に就て何等直接の智識を有するにあらざるなり。尙ほ或點よりいへば、神學は科學ほどに不可知的のものにはあらず。即ち吾人には現實なる心と、自由なる意思とありて、ペルソナル、ビーイングの行動を見ざるも、尙ほペルソナル、ビーイングの存在を推定することを得せしむ。之に反して重力の如き自然的勢力に關しては、吾人その結果を見ざれば全く其如何なるものかを知るに由なし。そは兎に角吾人は何の問題に就ても只部分的智識を有するのみ。而も此の部分的智識は吾人をして最後に不可知者にとは到達せしむるなり。

されど大切の點は蓋し此にあり。吾人は科學に於ても、神學に於ても、只部分的智識を得るに過ぎざれど、此の部分的智識だにあらば、吾人の目的に取りて充分なり。部分的智識は完全の智識にあらず。されど實際上の目的に取りては少しも不足なし。重力の實体は如何なるものなるにもせよ、吾人に取りて如何なるものなるかは吾人之を知る。吾人若し斷崖より飛ぶ時は、即ち地に落つることは吾人の知る所なればなり。神學に關しても亦然り。神の實体は如何なるものなるにもせよ、吾人に取りて如何なるものかは吾人之を知る。即ち神は人類の創造者にて、隨つて又次章にも說くが如く、人類は之に對して皆責任あるものなるは吾人の知る所なればなり。而してこは吾人に必要の實際的知識にて、且つ又之を得るに難からざる知識なりとす。

且つ夫れ、吾人の推理力は或程度までは斯る問題を判定するに不適當なるべきも、此の問題は非常に大切の問題なれば、何とか之に斷案を下し置かざるべからず。殊に神の存在を肯定する時は是より人の日常生活にも大切の結果顯はるゝを以て、是非とも斷案を下し置くの要あり。然るを之を未決の儘放棄するは、實際之を否定すると同樣と知るべし。たとへばこゝに沈沒に瀕したる帆船ありとせよ。然るに其傍に一の滊船ありて、是れも危難の中にあれど、帆船に對して乘客を轉載せんと言ひ送れりとせよ。其時乘客中に我若し滊船に轉乘せば一層安全なりと思はるゝ理由充分ならず、故に手を拱さて此の帆船に止まるべしといふものありとせよ。是れ即ち實際上滊船には轉乘せじと決心したると同樣といふべし。今神の存在なる問題に於けるも亦然り。人の理性は、不完全のものなればとて、之を未決の儘に放棄せんとするは、實際上神の存在を否定すると同樣なりとす。

然るに、論者は尙ほ主張して言はん、吾人の理性が何とか此の問題を判定せざるべからざるとには異議なし。また吾人の理性は是非とも吾人をして神の存在を斷定せしめんとするものなるとにも異議なし。されど正直に斯る斷定を信ぜんとすれば種々の大困難あるにあらずやと。然り、種々の大困難あるとは吾人も亦之を認む。苟も思慮ある人にして此の大困難を無視せんとするが如き人は一りも是れあら

じ。されど、問題は畢竟大困難を撰ぶか、小困難を撰ぶかといふに歸す。而して理性にして愈々問題を判定すとすれば、吾人の信仰をして出來るだけ抵抗の尠き方面へと動かさしめざるべからず。然らば抵抗の最も少き方面とは何處かといふに、こは前にも說きたる如く、此に說けるところの各題目を信ずるば困難少く、之に反對のことを信ずるは困難多し。例せば宇宙には起源ありと信ずるは困難少く、宇宙には起原なしと信ずるは困難多きが如き是れなり。其他の諸題目に關しても亦之に等し。而して斯くの如きは、此種の問題に關して許されたる唯一の證據法なり。吾人は未だ曾て神の存在を證明せんとせしことなく、又此の假說には何等の困難もなしと粧はんとせしともなし。只吾人は、種々の困難のあるには相違なきも、此の假說は即ち宇宙の起源と現狀とを說明するに最も近眞的の假說なるを示せるのみ。此故に吾人は判定す。專ら理性によりて判斷する時は、(是れ本書の取れる方針なり)、神の存在は極めて事實らしきことなりと。

(T)前論を約說す

最後に吾人は前來述べ來れる論法の梗概を略說せん。第一、現時の宇宙は、變化に次ぐに變化を以てし前後相續けり。而して是等の變化は幾度も繰返さるべきものとも思はれず。已に繰返さるゝことなしとすれば、必ず之に其起首なかるべからず。而してこは進化論及びエチルギー消散說も亦共に證明する所なり。隨つて此の起首若し必然たる筈なしとすれば、そは何處かに、自由勢力の力に由れるものならざるべからず。而して自由勢力なるものは必ず超自然的勢力たるを要す。是れ自然的勢力は自由ならずして、却て常に一定の法則に從ひ作用するものなればなり。之に加ふるに、自然界には一致あり。是れ超自然的勢力は唯一なるを示す。而して此の唯一なる超自然的勢力こそ吾人の呼んで創造者といふものなれ。

第二に此の創造者は、其意匠の痕跡よりして判斷すれば、自ら己れの行動の結果を豫知せるものに相違なし。而して此の斷案は進化と撞着せず、又人類及び其他の動物に自由意思の存在することとも相矛盾せず。此故に此の創造者は、意匠の知慧と、實行の力とを兼具せるペルソナル、ビーイングならざるべからず。

更に此の論證全体を一層簡短に言ひ顯すことを得べし。即ち宇宙(現狀の如き)は無始より存在せるにあらず。隨つて宇宙は一つの結果なり。即ち結果として生じたる或物なり。何等かの方法にて生ぜしものなり。隨つて他の凡ての結果と同樣其原因なかるべからず。又この結果は到る處或種の一致を顯せるが故に之が原因は唯一ならざるべからず。また此結果は設計せられ配置せられたるの證跡を或る部分に顯せるが故に、設計の力と配置の力とは共に其原因に存在せざるべからず。之を換言すれば、意匠の痕跡を示せる宇宙は結果なり。而して其原因は少くとも之を意匠せるペルソナル、ビーイング是れなり。此のペルソナル、ビーイングを呼んで之を神といふ。

第四章　人類は自由なる責任者なりといふ事

(甲)人類の心的屬性

人類は肉体を有すると共に又心を有す。二種の反對論中、唯心論は今日殆んど主張せられず、又唯物論は可能的の論に相違なきも非常なる困難を有す。

(乙)人類の道德的屬性

(一)人類は意思を有す。

(二)人類の行動は幾分か其意思によりて定まる。

(三)此の意思は自由意思なり。

(四)之に加ふるに、人類は己れの意思の自由なるを知る。此の自由意思は人類をして意匠するを得しめ、又ペルソナル、ビーイングたるを得せしむ。

(五)此故に人類は己れの行爲に就て責任を有す。換言すれば如何に其自由意思を用ゆるかに就て責任を有す。

(六)また人類は道德的感情を有す。此の道德的感情は、人類をして行爲の正邪を辨別せしむ。又人類は是により道德性者となる。

(七)最後に人類は良心を有す。即ち此の良心は或場合に於て行爲の正邪を判斷する直接の方法なり。

(丙)動物と人類との區別

兩者の間には大なる心的相違あり。されどこは程度の相違ならん。又兩者の間には全然道德的相違あり。蓋し動物は既知の自由意思を有せざるもの丶如く、隨つてペルソナル、ビーイングにあらざればなり。

(丁)結論

人類の性質は恐らく三部制ならん。其無比無類の地位。

以上已に自然宗教の根本眞理たる神の存在のことを論定したれば、その次の問題は他なし、自然界はこゝまで吾人を導けりとすれば、此上は吾人また進歩の手段なきか如何といふと是れなり。此上尙ほ神にまれ、人類にまれ、又人類の將來にまれ、一層知識を得たしとは、是れ何人も望む所なるべく、而も之を得る手段は、果して是れなきものなるか。偖此の疑問の出づると共に吾人は愈々天啓宗教、即ち神、何事をか人類に啓示したりとの問題を論ずべき順序となれり。啓示の有無は幾分か人の性質如何に關係す。即ち人は啓示を受くべき價値ありや否やに關係す。亦幾分か神の性質如何にも關係す。即ち神は啓示をなすらしきものなるや如何に關係す。本章に於ては專ら此の前者に就て論ずべく、而して人類

の心的屬性と道德的屬性とを別々に講究する所あらんとす。若し夫れ其肉体的性質に就てはこゝに之を說くの要なかるべし。是れ目下の論證とは何等の關係もなきものなればなり。

最初に一言し置くべきことは、凡ての科學が皆目擊上の事實に其基礎を置くと同じく、人性に關する科學も宜しく人性に關する目擊上の事實に其基礎を置くべし。決して或は然らんといひ、或は然らじといふが如き疑はしき先天的推理に其基礎を置くべからずといふと是れなり。之に加ふるに、吾人は人性を論ずるにも、亦その他のことを論ずるにも、完全の標本に基きて立論すべし、決して不完全の標本に基きて立論するとあるべからず。即ち野蠻人の如き、又小兒の如きものは、是れ人類の不完全なる標本に過ぎず。之を人類全体の代表者と見るべきにあらざるなり。

(甲)人類の心的屬性

人類の心的屬性とは即ち人類の思想及び感情をいふ。偖心的現象の、体的現象と殊別のものなるは是れいふを待たざるとなるべし。即ち物質には、大小、重量、色彩、形狀、硬軟あり。之に反して心には一切斯くの如きものなく、是等のものを思想及び感情に適用するに、全く無意義なるを發見す。而も人類には、心的現象と、体的現象と、兩つながら存在す。即ち吾人は皆心と名づくる思考する或ものを有することを意識す。之と同時にまた物質(即ち肉体)と名づくる動く、或るものを有することを意識す。此の心と物質との二つは絶對的に別物なり。決して(一元論の唱ふるが如く)一体の兩名にあらざると、猶は圓と三角とは一形の兩名にあらざると同じ。而して問題の性質上、此の內的確信即ち意識は此の問題に判斷を與ふる唯一の方法なり。蓋し心にして已に存在すとせば假說上物質とは殊別なるべく、已に物質と異なれば無形なるべく、己に無形なれば或は實驗室や或は科學的方法にて發見し得べきものにあらざるを以てなり。

されば、此の內的確信は吾人の知識の基礎にて、是れより以上の確證なきことは、吾人の記憶せざるべからざるとなり。かのユークリッドが立てたる問題とても全体は部分よりも大なりといふが如き內的確信より演繹せるものに過ぎず。然るに人類の性質は複雜のものにて、半は心、半は肉体なるより、之を解すると容易ならず。その結果唯心論及び唯物論と稱する正反對の兩說の一を採用するに至れる人尠からず。

前說即ち唯心論は之を不問に付して可なるべん。是れ今日にては殆んど之を主張する人なければなり。此說の主意は人類には唯觀念即ち心的現象あるのみ。物質といふが如きものあることなしといふにあり。即ち人生の全部を夢と看做す說なり。此說は敢て矛盾せる說といふにあらざるも、余は未だ矛盾せずして此說を主張せる人に遇ひしことあらざるなり。

後說即ち唯物論は、前說に比すれば頗る重大のものなり。此說に據るに、心といふが如きものあることなし。吾人の呼んで思想及び感情といふものは、頗る複雜せる腦髓の分子の運動に過ぎずといふ。偖心

と腦髓とが極めて密接の關係を有するものなるは、何人も之を否認せざるべし。されど密接の關係あればとて、兩者は同一なりとは言ふべからず。即ち腦髓は心の機關にて、心は之を借りて作用するものに過ぎずと思はる。また吾人の知れる限りにては、心は、腦髓に由らずして作用する能はざるも、兩者は確かに別々に存在するものなるべく、亦恐らくは種々の事情の下にありて別々に作用し得るものとはる。要するに腦髓に由らざる思想ありと思ふは、腦髓に由る思想ありと思ふと同樣、思別に困難のとにあらず。只吾人のこゝに斷言し得ることは、吾人經驗の範圍にありては、此の兩者の間に何等かの連絡あるが如く思はるといふことは是れなり。

然るに此の唯物說は、之を承認せんとすれば、種々の大困難あり。蓋し心的現象は人の腦髓の如き高等物質の特性にあらざれば、即ち凡ての物質の通性たるべき筈なればなり。而して高等物質の特性なりてふ前假說に就て言はんに、之に對する從來の說明は斷じて說明にはあらざりき。水若し其凝結する時に、思想もせず、感じもせず、而して水素は其燃ゆる時に、窒素は他の元素と化合する時に、是れ亦思想もせず、感じもせざるものならば、何故是等の原素及び是れと類似の原素が人に於て相一致する際思想を有し、感情を有するものとなるか。而して斯くの如きを事實なりと斷言するは斷じて此の現象の說明にあらざるなり。

又凡ての物質の通性なりてふ後假說よりいへば、心的現象はたとへ輕少ながらも凡ての物質に存せざるべからず。即ち炭素も水素も、皆多少思想し感覺するものにて、余の凭りかゝれる机も、余の用ゆる筆墨も亦然り。斯くて物質が複雜なる腦髓の形を取るや、其思想及び感情も亦等しく複雜となる。是れ即ち吾人の稱して思想といひ、感情といふものなりといふ。偖此の說は勿論不可能の說にはあらず。されど只可能といふだけに止まり、別段有利の證據なく、而して之を信仰するの困難なる、實際信用すべからざるほどなりとす。

斯くの如くにして、右の兩說は共に承認することを得ず。隨つて吾人は我が內的確信の如く、吾人は肉体と心とを有すと信ずるの外はあらず。是れ人性の結局的事實なり。而して吾人の之を確信するは、その他の種々の事を確信すると同じ。但しこは證明若しくは疑訝すべき性質のものにあらざるを以て、諸他の結局的事實に於けると同樣、只之を假定し置くの外なきものなりとす。

然るにこゝに尙ほ唯物說につきて一言し置くべきことあり。即ち唯物說にして若し矛盾なからんとすれば、人類に心ありといふことを否定するの外、又人類に無形の物ありといふことを一切否定せざるべからず。即ち人類は運動する物質に外ならずと主張せざるべからず。されど斯くの如きは吾人の記憶力の非認することたり。蓋し吾人の記憶力は十年前の我も今日の我も同一の我なることを吾人に確信せしむるものなればなり。而も吾人の肉体は腦髓を初めとして凡ての分子皆此間に一變せることは是れ吾人の知る所にあらずや。果して然らば、此の物質的のもの、悉く變化する間にありて、終始一貫變化すること

なき無形の或ものありて、吾人に存すべき筈ならずや。而して此の論法は吾人の意識之れを證明す。蓋し同一といふ感も(或は種して人格的同一といふこともあり)是れ亦吾人が內的確信の一なるを以てなり。

此に注意すべきは、人類の此の場合と樹木の場合とは相同じからずといふこと是れなり。通俗的にいふ時は、樹木の凡ての分子は十年の時日間に一變するものなれど、十年前の樹木と今日の樹木と異なる所なし。而も之れを人類の場合ど相同じからずといふ理由は他なし。吾人の知る所によれば、樹木には今日の狀態と既往の狀態とを連結するものなく、十年前に起れることに就ての記臆といふもの更になきと是れなりて然るに人類には是れあり。是れ人類と樹木との相違せる點なり。人類は十年前に起れることを今日之れを記臆す。而かも今日の人類の身体には、十年前にありし原子若しくは分子といふもの一つゝ是れあらず。此故に、人類には原子及び分子の外に何ものか存せざるべからず。換言すれば、無形の何物か存せざるべからず。已に無形の物存せば、唯物論は論理上自ら倒れざるを得ざるなり。

(乙)人類の道德的屬性

次に吾人の論すべきは、人類の道德的屬性なるが、之を解剖して左の如くなすを得べし。

(一)人類は意志を有す

第一に、人類は普通の言に所謂意思と稱するものを有す。勿論之れを嚴密にいふ時は、意思と人類とは別物にあらず。故に意思を有すといふは、犬を有すといふとは同じからず。意思は意思する人自身なり。意思力の所有者自身なり。されど此の普通語は能く一般に了解せらるゝを以て、茲に之を用ふることとせり。偖人類が意思を有することを信ずる重なる理由は、勿論人類の意識なり。即ち人類は自ら意思を有することを感ずるものなり。而して此の意思なるものは、肉体及び心に對して親密の關係を有するも、而も同一のものにあらず。却て多少此の兩者を支配するが如くなることあり。たとへば余自ら余の手を擧げんと決心し、而して之を擧ぐることあり。或は又幾何學上の問題を考へんと決心し、而して之を考ふることあり。此の二つの場合に於て、決心と、決心後の体的行動若しくは心的行動とは、互ひに別物なること、余自ら之を感ず。此を以て人類の意識より立論する時は、(又人類の意識より立論する外他に方法なし)人類は肉体及び心を有すると同じく、又意思を有するものなりとす。

(二)人類の行爲は幾分か其意思によりて定まる。

第二に、人類の行爲は(其思想も亦)往々にして其意思によりて定まる。此の意味他なし。人類の意思は其四肢を動かすの力あり。此を以て一例を擧げていへば、人類は其欲する時其手を擧ぐるを得べく、故に人類の意思は其行爲を定むる力ありとなり。斯くいへばとて勿論人類の意思は直接その四肢を動かす力ありとの意にはあらず。その四肢は筋肉によりて動かされ、筋肉は神經によりて支配せられ、

神經は腦髓の運動によりて動かさるゝものなればなり。然らば意志のなし得ることは何ぞといふに、此の腦髓の運動に一定の方向を與ふると是なり。而して意思の此の作用は諸他の勢力と相合して目擊する如き結果を來すなり。

偖人類の意思が人類の身体に及ぼす此の作用に就ては、人類一般の經驗之を證明す。是れ人類は兎に角その意のまに〳〵其四肢を動かす力あるものなればなり。げに人類は自ら願望する時は、此の室内を徜徉し得るや否やとの問題ありとせんに、多數の人は之に對して、實驗せよとの確答を與ふべし。斯る事情あるにも拘らず、意思は物質にも斯る作用を及ぼすかといふに至れば、頗る近眞的ならず。また頗る解し難きこととなり。自ら他の説明を求めざるべからざるに至る。

されど之れに對する滿足の説明は一つだも提出さるべしとは思はれず。是れ蓋し我体を動かさんとの我希望と、又我之を動かすことは、同時に若しくは殆んど同時に起ると頻繁且つ普通にして、兩者の間には必ず何等かの關係なかるべからずと見ゆるを以てなり。此故に、之れに對する説明には二あり。第一は願望が腦髓に變化を來す(而して腦髓の變化は、我身体を動かす)とすることなり。第二は腦髓に何等かの變化ありて、其結果我は我身体を動かし、亦身体を動かさんとの願望を起すとすることなり。即ち説明は此の二途の外に出でず。願望、物質的變化を起すにあらざれば、物質的變化、願望を起すものならざるべからず。されど此の二つの説明は共に解すべからざる説明なり。如何にして無形の願望が物質の分子を運動せしめ得るや。或は物質分子の運動が如何にして無形の願望を生じ得るや。是れ共に吾人の得て想像する能はざることなり。されど何れが比較的近眞なるべきかといへば、前者即ち然るもの〻如し。是れに二つの理由あり。

第一、意思は通常行爲に先だつものなりといふことなり。例せば余は擧手を願望して然る後ちに擧手す。最初に擧手して然る後ち擧手を願望するにあらず。されど此第一理由だけにては、未だ確實とは言ふべからず。是れ前にも言ひし如く、擧手は腦髓に於ける一種の運動の結果にて、腦髓の運動は或は願望の先きなるやも知るべからず、否願望を生せしものなるやも知るべからず。但し吾人の推定は勿論之と正反對なり。

第二、進化の作用よりする理由なり。夫れ意思にして若し物質的行動の結果にて、其原因にあらずとせんか、物質的行動は意思なるもの〻全く是れなき場合にも行はるべきこと是れ明白なり。即ち意思は一種無用の偶然的結果なるべし。されど若し其場合には、物質的行動獨り行はれて意思は全く進化せざるべきこと是れ殆んど確實なり。其理由は進化が無用のものを永續せしめ、完全せしむる能はず、而して物質に影響する力なき意思は、之れを物質の見地よりいへば全く無用のものなるを以てなり。而して此等の論證は人類日常の經驗(多數の人には殆んど何等保證の要なき經驗なり)を保證す。その經驗とは他なし、人の意思は兎に角其四肢を動かす力あるものにて、隨つて又其行動を定むる力あり

といふもの是れなり。

(三)人類の意思は自由なり

次に一言すべきは、人の意思は自由意思なりといふ事にて、こは頗る大切の點なりとす。またこは前項說ける問題とは全く別種の問題なり。前項に於ては人の擧手は是れ其の擧手せんとする願望の結果なることを論定せり。而して本項に於て吾人の講究すべきは、此の願望は果して人類の自由のものか、抑も亦止むを得ざるに出づるものかといふこと是れなり。此中後說を稱して、必然論若しくは、定道論といふ。必然論とは、人の行動は必然に定まるものにて自由のものにあらずと主張する說をいふ。

勿論自由意思論にしても、定道論にしても、人の意思は動機若しくは理性に左右せられ、最强の動機の通りに作用するものなるは即ち之を認む。換言すれば力ある動機、勝を得るものなるは、即ち之れを認む。然らば此の兩說は如何にして相違を來せりやといふに、全く動機といふ語の意義、曖昧なるに原因す。試みに問ふ、意思を左右する動機とは、果して如何なるものなりや。皆是れ外部的のものにて、外より來りて意思に影響を及ぼすものなりや。或は又多少は內部的のものにて、意思が或は己れの力より、或は既得の材料より生せしめ得る(必ずしも生せざるべからざるとはいはず)ものなりや。之に加ふるに、動機の力なるものは、凡て皆一樣のものにて、何等かの結果を生せんとすれば、かの物質力と同樣、只連合を要するのみなりや。或は又動機の力なるものは强弱相同じからず。此の强弱如何を判別するは只意志のみ能くする所なりや。たとへば動物慾を果さんとするの動機は、人のために一身を犧牲にせんとする動機よりも强きか、將た弱きかを判斷するは、只意思のみ能くする所なりや。此の兩見解中、前者は必然論の主張にして、後者は即ち自由意思論の主張なりとす。

勿論何れの場合にも、人の血統、敎育、包圍等即ち遺傳と境遇とは、其人の撰擇に大なる影響あり。されば是等は骨牌を鬪はす人の手に比せらるゝものにて、即ち其の人は之を用ゐて巧拙如何樣にも之を鬪はすを得るなり。斯くの如くにして人の自由意思なるものは其人の機會を善用するともあり、又惡用するともあり。只大切の點は人の意思の自由の限度如何といふにはあらず、寧ろ意思は自由なりや否やといふにあり。

然るにこゝに一事の不思議なることあり。即ち自由意思なるものは、多數の人には自明の理の如く思はるゝものにて、人生普通のことゝ解せらるゝに拘らず、之れが絕對的證據は、擧ぐるを得ざると是れなり。却て反對論に基きて萬事を說明するも亦、毫も差支を見ざるが如き奇觀あり。是れ人は如何ほど其意思を自由と思へばとて、また斯く爲さゝるを得ざりきと言ふべからざる場合なきを見ても明かなり。こは人の皆是認する點なり。之れが絕對の證據は事情自ら之れを擧ぐるを得ざるものなり。こゝに於てか吾人は推斷に訴ふるの外なきことなるが、之れに就ては兩論とも各々二つの大切なる論證を

有す。

先づ自由意思に有利なる方よりいへば、其一大論證は即ち人類の意識是れなり。夫れ人類の自由意思を有すとは是れ極めて普遍的の確信にて、又極めて確實なる確信の一なり。人類は何れも皆其日常の經驗上、必ず此の確信を抱かざるを得ず。たとへば、其手を擧ぐるも、亦之れを擧げざるも、共に自由なりとは、皆是れ人の感ずる所なり。斯く此の確信は已に人類日常の經驗に基ける確信なり。故に單に先天的論證を用ゐて、こは近眞的ならずといひ、こは解し難きことなりといふも、此の確信は顚覆することあるべからず。是れ人類の意識よりも、斯くの如き論證の前提が却て誤謬なるを其常とするを以てなり。

然るに此の論證に力の加はるを覺ふるは、人の自由意思の信仰は爭ふべからざる信仰にて、是れに原因もあり、又目的もあるべきを思ふ時是れなり。先づ其原因よりいへば、人の自由意思の信仰若し事實ならざらんには、如何にして能く進化するを得たりや。是れ進化論の論點よりしては解すべからざることなり。試みに思へ、人若し一種の自動機械たるに止まらんには、自ら自由のものなりと信ずる信仰ありたりとも、以て其狀態に少しの影響をも與ふるを得ざるべく、隨つて此の信仰は全然無用のものたるべし。然るに此の信仰は啻に進化したるのみならず、又完全の程度に達し、人性の固有となれるが如くなるは何ぞや。次に又其の目的よりいへば、兎も角も、人類を創造し給へる神が、何故に虛僞の確信を、人性に植ゑ付くるが如きことをなしたりや。實にこは多數の人には、如何にもあるまじきことゝ思はるゝ點なるべし。果して然らば、意識の點よりする論證だけにても、自由意思論は最早確定の說の如し。

然るに此の論證には事實上更に人類の經驗の十分なる保證あり。即ち人類の經驗によるに、人の行爲は、變化極まりなきものなり。かの化學界や物理界には、自由勢力なるものなく、萬事皆一定の法則によりて現はるゝが故に、前後必ず同一なるに比すれば非常の相違あり。此故に此の理由だけよりするも、人の行爲は變化極りなし。故に人には何等かの自由勢力ありて存すと言ふも差支なきものゝ如し。されど論者或はいはん、人の行爲と雖も、之を全体として考ふる時は一定不變なり。多數の人は同一事情の下にありて同一行動をなすを見て知るべしと。されどこは自由意思を否認する推論とは認むるを得ず。是れ多數の人が同一の行爲をなしたればとて、少しも怪しきことにあらざればなり。且つ夫れ人の行爲の同一は、無機界に於ける同一とは全く類似せず。是れ無機界にありては、物質の分子が常に變化なく同一の作用をなすものなればなり。以上述ぶるが如くにして、自由意思に有利なる論證に二つあり。第一は人類の意識にして、第二は之を保證する人類の經驗なり。思ふに是れより有力の論證は他に是れあるべからざるなり。

次に自由意思論に反對の一大論證を擧ぐれば、自由意思は自然界の變則なりといふにあり。是れ自

然界の勢力は必ず同一の作用をなすものにて、隨意に或は作用し、或は作用せざる自由勢力といふが如きものは絶對的に是れあらざるを以てなり。然るに人類にはたとひ如何ほど、少量にもせよ、斯くの如き勢力ありといはゞ、人類は即ち一定の法則に束縛せられざるものにて、たとひ全部の超自然者にあらざるも一部の超自然者なりと。

偖此の論者の言は一々之を是認するを得べし。是認したればとて將た何かあらん。人類は一部の超自然者なりとは信ずべからざるとなるか。何ぞ夫れ然らん。是れ人類を創造し給へる神自ら超自然者なればなり。神は自由意思を有したまふ。此故に若し適當と思ひ給ふ時は、能く此の特性を人類にも授け給ふを得たりしなり。換言すれば或る限度の内にありて、或る程度を限り、人類をして種々の行動をなすを得しめたりしなり。勿論、物質上の科學をのみ研究せる人には、人に自由勢力ありといふとの如きは如何にも近眞的ならぬとと思はるべし。されど人の行動を研究せる辯護士、裁判官、警察官等より見れば、人類は一箇の自動機械なりといふとの如きは、同じく近眞的ならざるなり。

之れと同じ道理は又他の場合にも當て嵌まるにあらざるか。たとへば、草木なき島に住して、只管無機化學をのみ研究する人ありとせよ。斯る化學者には樹木は全然變則のものにあらざるべきか。而かも樹木は存在す。又其存在を認めざるを得ず。此故に化學は之を分ちて有機、無機の二となさゞるを得ざるに至り、且つ有機化學に關する規則は、無機化學に適用すべからざるものと認めらる。斯くの如きは是れ自然界の現象を取り扱ふ科學的の方法といふべし。然るに之と同一の法式は何故之を人類にも適用するを得ざるか。人類は意識と經驗との二論證により、自由意思を有するものと認めらる。果して然らば此點は之を是認せざるべからず。隨つて吾人が此の宇宙間に於て見聞する勢力は之を分ちて二となすを要す。一は即ち一定不變の勢力にて、他の一は自由の勢力是れなり。前者は自然界に於ける一切の不變的勢力を包含し、後者は人類の有する自由意思と稱せらるゝ變化的勢力を指す。自由意思は或は變則的のものなるべし、されど其證據は之を打ち消すを得ず。

之に加ふるに、人類の占むる地位は頗る變則的のものなるを思へば、此の變則も亦左程怪しむべきことにはあらず。人類に自由意思ありといふは、鑛物または植物に自由意思ありといふとは相同じからず。何れにしても人類は無比無類の生物にて、此の世界にありては最も高く、最も重要のものなり。隨つて之を一部的超自然なりといふとも、左まで怪しきとにてはあらざるなり。

最後に吾人の記憶せざるべからざるは、自然界の勢力を一定不變のものとする觀念も、畢竟是れ理性の演繹に外ならずといふと是れなり。且つ吾人が人類に就て知る所は、宇宙に就て知る所よりも多し。是れ前者に於ては自由意思を意識すれども、後者に於ては宇宙の同一を推定するに過ぎざればなり。實に人の自由意思は吾人が直接に知り得る唯一の勢力なり。所謂る自然界の勢力と稱せらるゝ重力の如きものに至りては、嚴密にいへば是れ吾人が目擊の事實を説明せんとする時に用ゆる假説のみ。之

れに加ふるに、前にも已に說きたる如く、是等の勢力とても、實は皆創造者の自由意思に起源せるものゝ如し。果して然らば、吾人の判斷し得る限りにては、凡て勢力の結局的原因は、之を何等かの意思に求めざるべからず。

次に自由意思に反對する第二の大切なる論證をいへば、自由意思論はエチルギー保存說と兩立せずといふと是れなり。是れエチルギーを創造するにあらざれば、自意的行動は一切あるべからざるがためなりといふ。されど、こは疑はしき說なり。是れ蓋し意思なるものはたとひエチルギーを生せずとも、若し能く之を制御するを得ば、自由に活動し得るものなるを以てなり。且つ夫れ意思にして若し時間或は勢力の方向を變ずる力あらば、自由に活動するを得るものなり。所謂る時間を變ずるの力とは、活動をなさんとする時間を、自由に撰擇し得るをいふ。たとへば、今わが手を擧ぐべきか、若しくは一分時後にすべきかを自決し得るをいふ。次にまた勢力の方向を變ずる力とは、例へば、わが右の手を擧ぐべきか、左の手を擧ぐべきかを自決し得るをいふ。意思若し此の二の勢力を具ふとせば、自由意思者は是れ潛勢力の貯藏所といふも可なり。蓋し意思は此の潛勢力を化して隨意の時間、または隨意の方向に運動せしめ得るものなるを以てなり。果して然らんには、意思は別段エチルギーを創造するに及ばずして能く自由に活動し得るものにてあるなり。

此故に吾人は此の問題の始終を通覽し、以て斷案を下さん。人の意思は自由なり、自由意思を認めて初めて、人類の意識と符合し、また人類の行爲の變化をも說明し得ればなりと。且つ夫れ、自由意思は、自然界の變則には相違なきも、變則なればとて、信用を置き難しといふ理由なし。また此の自由意思論はエチルギー保存說とも矛盾するとあらざるなり。

(四)人類は己れの意思の自由なるを知る

以上、吾人は已に人の意思の自由なるとを斷定したれば、次の點即ち人は自ら其意思の自由なる事を知るとの箇條を說明する必要なし。蓋し此の一點は却て自由意思を是認すべき大切の論證として用ゐられしほどなればなり。されど人自ら自由意思を有することを信ずるを證明せんとすれば、此他に尙ほ幾多の論證あり。是れ此の信仰は、その實行にも顯はれ居ることなるを以てなり。たとへば、人の自ら目的を立てゝ汲々之に達せんことを努むるは、是れ自由意思あるに由る。換言すれば、人類は自由意思あるが故に又意匠することを得るものなり。自由意思あるが故に、本書に用ゆる意義に於て、ペルソナル、ピーインクたるを得るものなり。而して、人類に意匠力あるとの證據は到る所に之を見るを得るが故に、特に茲に之を擧ぐる必要なし。

次に人類は、古今東西、皆自ら自由なるを確信せし證據は、其言語に顯はれたり。即ち我は欲すといひ、我は撰ぶといひ、我は決心すといふが如き句は、何れの國語にも存するのみならず、又是等の句及び是れに類似せる句は、會話をなす際頗る大切にて、自由意思を否認せんとする人の如きも、覺えず是等の

句を用ゐ、暗に己れも敵も双方共に自由なるを認むるほどなり。然り「我」若し變動常なき分子の集合に過ぎずとせば、如何にして議論をなすことを得るや、是れさへ解し難きことといふべし。但し吾人は此の上此の論證を敷衍する必要なし。是れ人自ら自由意思を有することを信ずるは爭ふべからざることなるを以てなり。

(五)人類は己れの行爲に對して責任を有す

次に論ずべきは人類の責任なり。人類の責任とは、人類自ら其自由意思の使用法如何につき責任を有すとの意なり。而して是れは人類自ら己れの自由なるを知るによりてなり。加ふるに、人類の意識も亦充分之を證明す。是れ責任の心は、人類固有の確信の如くなればなり。勿論是れにも諸他のものに於ける如く例外なきにあらず。されど人類全体に就て考ふる時は、人類は己れの責任を信ずるものに相違あらざるなり。

且つ人類は神または其他の超自然者に對して第一に此の責任を負へるものなることを信ず。勿論人類は其同胞人類に對しても責任なきに非ず。殊に其隣里鄕黨に對して責任を有す。されど少しく熟考しなば、人類に對しての責任の根本思想ならざるは明了なり。是れ人類は其同胞人類に對して責任を負へるものなるよりも、第一に其創造者に對して責任を負はざるべからざるものなればなり。たとへば兒童は第一に其父母に對して責任を有す。而して第二に其結果として其兄弟姉妹に對して責任を有す。之と同じく神は人類を造り給へるが故に、人類は神に對して責任あり。又神は吾人を他の人類の間に置きたまひて人類社會の一分子たらしめんとし給へるが故に、比較的輕少なりと雖も、人類に對しても亦責任あり。斯くの如くにして所謂人類兄弟主義は、神を父と認むることの自然の結果なり。

(六)人類に正邪の道德心あり

次に論ずべきは人類正邪の道德心是れなり。偖人類は之を全体として見る時は一種驚くべき力ありて自由なる其行動の性質如何を判別し、一方を正、一方を邪と曲直を識別するは是れ否認すべからざる事實なり。且つこゝに序でながら一言したきは、道德上の惡即ち罪の存在は、是れ不幸にして否認すべからざる事實なるが、こは人類自由意思論の副證たるが如き觀あると是れなり。其理由如何といふに、若し人類に自由意思なき時は、人類の惡逆は神の作れるものと言はざるべからず。勿論斯くの如き場合には、人類の惡逆は嚴密の意義に於て罪にあらざるべし。是れ人類若し自由意思を有せずば、是れ一箇の機械の如きものにて、神に對して（又人に對しても）罪を犯す能はざるものなるは、時計の其製造者に對して罪を犯す能はざると等しければなり。斯くの如き人は、不完全の人なるべし、即ち時計の不完全なる時計たるとあるに等し。されど、惡逆の人にはあらず。而も此世に惡逆の人あるは皆人の認むる所なり。それは擱き斯くの如く行動の性質如何を判別する力あるものを呼んで、吾人は之を道德性

者といふ。此故に人類は道德性者なり。人類は正と邪とを判別する所謂る道德心なるものを有すればなり。

此の道德心の意義如何は、之を人類の他の觀念、たとへば視覺の如きものと比すれば、大いに明了となるを覺ふべし。今夫れ甲者が正と邪とを判別するは、乙者が赤と黃とを判別し、又は靑と綠とを判別するに同じ。然るに此に一人ありて他の人が靑と思へるものを綠なりといへばとて、或は又數人の色盲若しくは盲者ありたればとて、之がために人類一般が色を判別する力を有すとの事實は打ち消さるべきものにあらず。また他の例を擧げんに、他の人の不味と思へるものを一人たとひ美味となしたればとて、之がために人類一般味感を有すとの事實は打ち消さるべきものにあらず。道德心に於けるも亦之に同じ。他の人の邪と思へることを一人たとひ正となしたればとて、或は又數人の正邪を判別する能はざる箇人ありたればとて、之がため人類一般が道德心を有すとの事實は打ち消さるべきものにあらざるなり。

こゝに一つ注意せざるべからざるは、此の正邪の感念なるものは、或る行爲の結果たる愉快若しくは不愉快といふものとは全く別物なりといふと是れなり。例せば、余は熱湯に手を入れて苦痛を感じたるの故を以て、また熱湯に手を入るゝことをなさゞるべし。されどこは或る行爲が邪なるが故に之をなさずといふとは全く相同じからず。其他、こは又實利若しくは自利心といふものとも相同じからず。蓋し或る行爲は何等の益をも與へず、却て害を與ふるも尙ほ正しき行爲たることもあればなり。之を要するに『愉快なること、利益あることに就ての五十回の經驗は、正しきことに就ての一の確信をも作るに足らず、否作ること能はず』。即ち此の二種の觀念は、種類に於て異なるものにて單に程度に於て異なるのみにはあらざるなり。

此の道德心も太古その起源は眞に微賤のものなりき。否微賤のものなりしならん。されど之がために道德心を輕蔑し、または其價値を疑ふは當を得ず。若し然らば人の理性も亦同一の理由よりして之を輕蔑せざるべからず。而して人の理性の價値若し疑ふべきものならんには、凡ての科學皆滅亡の外はあらず。

(七)人類の良心

最後に人類の良心に就て說明せん。偖良心は往々道德心と混一せらるゝことあり。されど此の二者の全く別物なるは、少しく熟考せば明了ならん。見よ、或人は道德心を具へ、行爲の正邪を分類する力あるも、或る特別の行爲の正邪何れに屬するかを直ちに知る能はず。此人或は何等かの材料に基き、推理して其正邪を知ることあらん。否複雜の行爲を見ては、何人も斯くの如き方法を取らざるべからざることあるにあらず。されど一般にいふ時は、人類は斯る迂遠の方法を取るを要せず。是れ人類には良心と稱する一種の感くべき或るもの具はりて、何等の論證、何等の推理をも借らず、直覺的に行爲の正邪を人

類に報告するに由る。故に良心なるものは恰かも道德心の機關の如く、たとへば視力の機關たる眼の如きものなり。眼は或色を赤、或色を綠と辯別す。良心また然り。或る行爲を正、或る行爲を邪と辯別す。而して此の何れの場合に於ても、辯別は咄嗟に行はるゝものにて、推理よりする演繹とは全く別物なり。尙ほ此に一言し置くべきは、良心は行爲をして或は正しからしめ、或は邪ならしむるものにあらずといふことなり。是れ猶ほ眼が色をして或は赤たらしめ、或は綠たらしむるとなきと同じ。即ち良心は只或る行爲を正、或る行爲を邪と報告するに過ぎざるなり。

偖人類は之を全体としていふ時は、皆良心を有すると是れ爭ふべからざる事實なり。老幼、貧富、學不學皆等しく之を具へ、古今萬國何れの人種の間にも亦存在せり。即ち吾人は一人として之を有せざるなし。而してこゝに一の奇とすべき事實は、良心は意思とは獨立のものにて、恣に之を處分するを得ざるが如くなると是れなり。即ち吾人は良心を匡正するとなく、良心却て吾人を匡正す。見よ、良心は何れが正にして、何れが邪なるかを吾人に報告するのみならず、また吾人が正を行ふを絶對に是認し、吾人が惡を行ふを絶對に否認す。而して良心の最も著しき効果の一は實に此の否認の感なり。即ち惡事をなせる後の悔恨自責の感なり。此の否認の感は實際何れの人にも存する一般的のものなり。而して是れも亦人の自由意思を證明する別の論證なり(實際は最早入用なき程なれど)。是れ人の行爲若し自由のものならずば、何故之を痛悔するとあるか、是れ解すべからざるとなればなり。

以上述べ來れる所は人類の道德的屬性なり。果して然らば人類は又自由意思者、責任者なり。然るに此の斷案に對しては、往々反駁を試むるものあり。而して其理由は、一つは動物と人類との間に類似あるに由る。又一つは動物も人類と同樣、自由意思者、責任者といふと難く、さりとて何れに其區別の存するかを指示すると容易ならざるに由る。乞ふ吾人をして聊か此の問題を調査せしめよ。

(丙)動物と人類との區別

偖、或種の動物と人類との身体上の相違は、眞に微々たるものなり。且つ若し多くの人の考ふる如く、人類も、動物も、共に同一の祖先より出でしものとすれば、身体上の相違は左まで重大のものにあらず。また之に伴へる心的相違は、大は大ながらそれも單に程度の相違なるべし。是れ高等の動物には、心の萠芽と認むべきものゝ存するを見ればなり。此故に吾人は進みて動物の道德的屬性を調査せざるべからず。されど不幸にして之に關する吾人の知識も不完全のものたるを免かれず。吾人は人類の道德性を論ぜんとするに、人類の意識を以て論證の基礎となす。されど動物の道德性を論ぜんとするに、吾人は其基礎とすべき意識につきては一つも之を知ると能はず。是れ動物の言語につき何等かの發見あるにあらずんば能くすべからず。此故に動物は自由意思を有するや否や(初めの三點に就ては)吾人之を斷言すると能はず。勿論、彼等にして之を有せずば、反對論は最早成立せず。此點已に是れ動物と人類

との明了なる區別なればなり。されど吾人は斯くの如き速斷を下す權利を有せず。却て之と反對の側面に種々有力なる論點あり。少くとも高等動物に關して然り。此故に此の問題は討議に付するを可とするなり。

されど次の論點即ち既知的自由といふ點に及べば、吾人の論據は前者に比して大いに確實なり。是れ動物が之を有すと看做すべき道理、少しもなく(只、人類より之を類推するの外には)否却て之を有せずと看做すべき有力の道理種々あるを以てなり。且つ夫れ人類が自ら己れは自由のものと信ずる論據は、其根據只其意識にあるにはあらず。こは其行爲にも顯はるゝものなり。即ち人類は之によりて意匠する(即ち其豫見の目的に達せんとして働く)を得るものにて、動物には之に對應するもの一つもあることなし。是れ動物の作品には、何處にか意匠を示せる所もなきにあらねど、決して動物の力に由るものとは見へざればなり。此の種の無意識的意匠力は別に本能といふ稱あり。而して此の本能を豫想を含有せる眞の意匠力より別物なりとするには四個の理由あり。

第一の理由は、本能は猿、馬、犬の如き最も知力に富める動物に、必ずしも最も著大なるにあらずといふことなり。否却て動物に於ける此種の意匠力は、知力の多きものほど却て少きもゝ如しと。是れ極めて著しきことにて、此事自ら已に本能と意匠力との間に何等かの相違なかるべからざるを示す。

第二の理由は、動物は特別なる少數の場合にのみ、意匠する力あるものなりといふと是れなり。たとへば、鳥には巧妙に其巣を營造する力あり。されど鳥は造巣以外の目的に此の建築の才を應用すること能はず。少くとも之を應用するとなし。之と同じく蜂は最も完全なる數學の原則に基きて其巣を構造す。即ち三の菱形ありて、六角形の角壔を閉ざし、其角度の正確なる、最少量の材料をもて最大の空間を包容すべからしむ。(大英百科全書九版第三卷四九〇頁を見よ。その角度は百〇九度廿八分と、七十度三十二分となり)。而も蜂は、此の數理を他の何事にも適用すること能はず。此他、蜘蛛と其巣を初めとして、之と同じき例、その數多し。而も之に由りて推察する時は、是等の動物が其巣を作るは、本能と稱する一種特異の原因によりてするものなるべく、人類同樣既知の自由なるものを具へて、一の場合に限らず、諸の場合に意匠を施し得る能力あるがためならざるは明かなり。

第三に、是等動物の造巣、若し各自の意匠よりするものならば、其知力は非常に高尚のものならざるべからず。されど彼等の知力は決して高尚のものといふを得ず。是れ彼等は他の點に於ては、頗る愚鈍の行爲をなすものなればなり。例せば、蜂若し開放したる窓より飛び込み來れりとせんに、其の數理に通じたるに拘らず、自ら前路を辿りて飛び去るを知らず、却て閉せる窓に至り之に突き當りて徒らに羽敲きするを見るなり。且つ夫れ動物の本能は世界中何處も皆同じ。國によりて優劣あるが如きこと是れあらず。是れ彼等に理性なきに由る。理性あらば必ず優劣あるべき筈なればなり。

第四に、以上掲げたる數個の場合に於てすら、動物のなす所には何等進歩の徴を認めず。即ち蜂の作れ

る最後の巣窩は、其最初の巣窩に比して別に優れる所なく、否吾人の知れる限りは數千年前に作られし巣窩にだも優れる所なし。果して然らば、蜂なるものは其經驗によりて、何等益する所もなきものなり。前に作れる所を改良せんとして、之に變更を加ふることなきものなり。人類は之に反す。其既知の自由により絶へず既往になせし事業に改良を加ふるを怠らず。之に由て是を觀れば、動物は恰も生產者の如し。たゞ其指示せられたる規則に從ひて働くのみ。決して創造者にはあらず。創造者は自ら意匠を立て、其既往の經驗を利用するものなればなり。又動物の幼者は全く何の經驗もなきに尙ほ長者と同樣の本能を有す。此に於てか知る、動物の本能なるものは先天的に動物に具はれるものにて、後天的に修得せしものにはあらず。隨つて、其本能によりてなせることには、或は意匠らしきものありとも、そは動物自らの力に由るにあらず。是れ恰も眼や其他の機關に顯はれたる意匠と同樣、全く創造者の力に由るものなりとす。

或は言はん、高等動物の中にても特に人類に接觸する者の行爲には、隨分豫想と意匠とを有するが如く見ゆる行爲あり。例せば、犬の如きは今日骨を地中に埋め置き、翌日往いて之を求むるが如きとありと。されど是れよりも一層著しく意匠を顯せる行爲さへ本能によりて之を說明し得らるべしとせば、斯くの如き行爲も亦本能によりて說明し得らるべきものと思はる。

此に亦此の斷案に力を添ふる者あり。そは動物は何等責任の感を有せざるが如くなる事實是れなり。

言を換へていへば、正邪の觀念を有せざるが如くなると是れなり。而して此の感念は人類にありては其既知的自由の結果なるを思ふべし。勿論之に反對するものはいはん。吾人は犬が我意に反せることをなすを見れば、之を罰するとあり。是れ暗に犬が此の行爲に責任あるを認むるものなりと。されど此の反對は當らず。犬に加ふる罰は單に犬の聯想に訴ふるものかも知るべからざればなり。犬には其他の動物と同樣苦痛を避けんとする自然的衝動あり。此故に犬は必ずしも責任を感せずとも、又必ずしも惡事と思はずとも、記憶上より苦痛を伴ふと思はゝ、行爲は避けて之をなさゞるなり。然り而して、多くの場合には吾人未だ曾て動物が其行爲に對して責任ありと認めたることなく、又其他に害を加へしを見て、之を罪と認めたることもなし。此に於てか吾人は斷定す。道德的屬性は即ち是れ動物と人類との間の大分界なりと。其理由他なし。動物は自由意思を有す。否有するなるべし。而も其自由意思は既知の自由にあらず。此に於てか、動物は人類の如くに意匠すること能はず。隨つて又、ペルソナル、ピーイングにあらずといふと是れなり。

此の問題を結ぶに先だち、尙ほ二箇の點に就て一言する所あらん。第一、此の既知的自由を人類と動物との間の分界となすは、困難のことならずといふにあらず。されど、之を其他のものゝ分界となしたりとも、尙ほ困難あり、否却て大困難あるかも知るべからず。たとへば、猿若しくは犬に意匠の力ありと言へば、それにて困難は減ずべきかといふに然らず。只分界線の置き所が稍低くなれりといふに過ぎず。

海月に意匠の力ありや、若しありと謂はゞ、槲若しくは海草に意匠の力ありや。要するに、既知的自由は、恐らく生物全体の通性にあらず。已に生物全体の通性にあらずとすれば、必ず何處かの分界ならざるべからず。而して之を動物と人類との間の分界とするは、其他の何處の分界とするよりも、困難少きものなりとす。

第二は、第一よりも一層大切の點にて、吾人は動物に就て未知の點あればとて、それがため人類に就て知る所をも疑ふの道理なしといふこと是れなり。若し之を疑はゞ、不道理是れより甚しきはなし。聰力、視力、記臆力等は、如何なる動物より之を有し始むるかを判定するは困難なればとて、人類に視力、聰力、記臆力あるを非認する人やある。論者の疑は之と同樣なるべきなり。

(T)結論

吾人は今や此章を結ぶべき順序となれり。抑も人類には、体的現象と、心的現象と、道德的現象の三あり。而して此の三現象は各自別種のものにて彼此互に混同すべきものにあらざるは明了なり。たとへば、肉体强健の人、必ずしも知力强健なるにはあらず。又知力偉大の人、必ずしも德性强健なるにあらず。之に由て是を觀れば、人性は實際三部制のものなるべく、而して此の三要素は、肉体、心、靈といはゞ蓋し最も適稱ならん。その中心は人の心的推理力に當り、靈はその自由の道德性に當る。而して人の身体と心とは共に自由意思即ち靈の部分的統轄の下にあるものなるが故に、靈は即ち人類の主要の自我なりと認めざるべからず。果して然らば、人類は之を嚴密にいへば、斷じて有機体には。却て肉体及び心といふ二の機關を使用する自由意思者なり。肉体及び心は、此の自由意思者の所有にて、自由意思者は此の二の機關より成るにはあらず。此の自由意思者は即ちペルソナル、ピーイングにて、其自由の靈は、自ら己れの自由なるを意識し、而して身体と心とを統轄す。

論じて此に至れば、吾人目下の斷案は粗ぼ明了なり。即ち前にも論せし如く、人類は自由意思者にて、其自由は人類をして他の自然的勢力と異なるものたらしめ、又部分的の超自然者たらしむ。次に人類はまた責任者にて、其責任の感は既知的自由より起り、且つ諸他の動物と異なるものたらしむ。若し之を一層簡潔に言ひ換ふれば、人類は其自由によりて無生物と別異し、其責任の感によりて諸他の動物と別異す。されば人類は一種特異の地位を占むるものにて、地球上また人類に似たるものなし。而して人類が既知的自由を具へて能く意匠し、又能くペルソナル、ピーイングたる點よりいへば、只、神にのみ似たるものといふべきなり。

第五章　神は人類の幸福を顧念し給ふ事

(甲)之を是認する證據

神はペルソナル、ビーイングなると共に又道德性者なるが故に其受造者を顧る力あるものならざるべからず。而して神は殊に之を人類の爲めになし給ふべし。種々の慈愛的意匠の痕跡は此點を證明するに似たり。されど之に二大困難あり。

(乙)人類の微賤なる事

(一)人類若し微賤なりとも神は尙ほ之を顧念し給ふべきを示す反對諸論證。

(二)人類眞實の價値。

(三)他の遊星に於ける假定的住民。

(丙)惡の存在する事

(一)動物に於ける物質的の惡(災)。此の惡は、其量多く、其存在の理由を欠き、又全く無用のものなりとの反對論あれど、此說は成立せず。

(二)人類に於ける物質的の惡災。此の困難を除去せんとして提出せられし種々の方法。之が解釋は、思ふに神は、惡を意匠せしも惡を欲望せずといふにあらん。惡は人の品性を淘冶するに必要なるを以て神之を意匠し給へるのみ。

(三)人類に於ける道德的の惡。道德的の惡は自由意思に必要なるを以て神は之を欲望し給はざるも之を意匠し給へり。而して惡人も亦他の諸の惡と同樣必要のものなり。

(丁)結論

神の善德の中には慈愛と正義と兩つながら之を含有す。

吾人は前章に於て人の性質を論じ終りたれば、本章に於ては手段のあらん限り神の性質に就て講究する所あるべし。特に神は人の幸福を顧念し給ふと見ゆるや否やを講究すべし。而して吾人は第一に先づ之に有利の證據を調査し、次で之に反對の二大論證たる人類の微賤及び惡の存在を論じ、最後に如何なる意義に於て神は善德のものといふべきかを說かんとす。

(甲)之を是認する證據

第一に神は確かに人類の幸福を顧念し給ふの力あるものなり。是れ神は啻にペルソナル、ビーイングなるのみならず、また道德性者なればなり。偖、神を道德性者といふは、是れ道德的論證と稱する一種

の有神證據論より出づる自然の結論にて、また人類自由意思論にも關係あり。今簡單に之を說かんに、元來、自然的諸勢力は、皆同一のものにて、同樣の境遇の下には、必ず同樣の作用をなすものなれば、如何ほど之を、併せたりとも、隨意に或は作用し或は作用せざる自由勢力を生出し得べきにあらず。自然的勢力を併せて、自由勢力を生出せしめんなどゝは、全く無稽の考なり。然るに人類に前にも已に是認せるが如く、此の自由勢力あり。而して此の自由勢力は、自然的勢力より生れ出でしものたるを得ざると共に、又自ら己れを生せしものとも思はれず。隨つて此の自由勢力は、前にありし自由勢力より來れるものなるべく、その自由勢力は更に前の自由勢力より來れるものなるべく、斯くして益々其源に溯れば、遂に無始より存在する自由勢力に達すべし。而して此の斷案は全く別の論法よりせしものなれど、吾人が第一章に於て達せしものと同一なるは諸君の記臆する所ならん。

已に此點に就きて異議なしとすれば、其次の點は此の自由勢力即ち自由意思者は、己れの自由を意識せるものならざるべからずといふことなり。隨つて又行爲の善惡を辯別するの力ある道德者たらざるべからずといふことなり。げに人類が此の驚くべき力を具ふといふ事實だけを以て見るも、人類の創造者も亦之を具ふるものなるは確實なり。是れ此力は凡ての体力、心力等と異なる特種のものにて、到底是等のものより進化し出づべき筈なければなり。換言すれば正邪の觀念は体力及び心力の中に存せず。隨つて体力及び心力は如何なる結合をなすとも到底之を生出すること能はず。之に由りて是を觀れば、道德的の人類あるは、即ち道德的の神あるを暗示すと謂ふべし。

以上論ずる所は、吾人の良心充分に之を保證す。良心は前にも謂ひしが如く、行爲をして、或は正たらしめ、或は惡たらしむるものにあらざるも、其正邪如何を吾人に報告するものなり。隨つて良心は或者と吾人との間の媒介者なり。而して此の或者とは吾人に良心を與へし神に外ならざるを以て、良心は通俗の言にて、神の聲と稱せらるゝとあり。此の良心は吾人に語るらく、吾人は正を行はざるべからず。正は神の吾人に望みたまふ途なればなりと。果して然らば、此の神はまた行爲の正邪を判別する力ある道德性者たらざるべからずとの結論を生ずるなり。

道德的の神は、確かに其受造者の幸福を顧念し得るものに相違なし。然り、神は、後にも說明する如く、恐らく之を顧念したまふといふに止まらず。確かに之を顧念したまふと其證據多し。

第一に、神は其創造し給へる凡ての者を顧み給ふべしとは、是れ當然の推論なり。若し之を顧み給はずとすれば、何故之を創造し給へりや。是れ解すべからざることならずや。殊に人類は、神と同樣のペルソナル、ピーイング、又道德性者として、且つ神と同樣の屬性の幾分をも賜はれるものなれば、神が之を顧み給ふべしとの推察は、勿論一層的中せりと謂ふべし。之に加ふるに、此の宇宙には人類以外にペルソナル、ピーイングたり、道德性者たるものあるべしとは、學術の示さゞる所、此故に人類或は神の顧念に價せざる所ありとするも、吾人は人類以外に人類ほど神に顧念せらるゝに足るものあるを知らず。況

んや、創造者は其受造物の一をだも願念せざるべしとは思はれざるをや。

此の先天的論證は、之を實地目擊の事情に照せば、一層確實となるを覺ふ。試みに自然界を見よ。殊に人類を見よ。到る處に意匠の痕跡を發見するのみならず、其意匠は即ち慈愛的意匠なるを發見す。慈愛的意匠とは、被意匠者の安寧幸福を增進する意匠をいふ。例せば、人の眼を見よ。こは第二章にも一應說きたる所なるが、其際言ひし如く、眼には種々の複雜せる部分あれど、皆一つの目的のために協力するものなり。即ち人をして物を見るを得せしむると是れなり。而して此の事實より推論を下し、此の各部を兎も角組成し給へる神は、其目的、全く人をして物を見るを得せしむるにありしと言ふは蓋し必然の勢なり。且つ今、之に一歩を進め、神の斯くして人に物を見るを得せしめ給へる目的は（少くとも其重なる目的は）全く其幸福に資するにありしと斷定するも、是れ亦當然の次第なり。その他これと同樣の斷定は、自然界に於ける幾千の機關に就てもまた下し得べきなり。

然るにこゝに二個の小反對論あり。第一は、人類の眼には多少不完全の點ありて、種々の疾病傷害に罹り易しといふもの是れなり。偖此の反對論は一應尤もなれど、此の不完全なるは、眼の構造に取りては偶然のものにて、眼球構造の本來の目的にあらざるを知らざるべからず。眼は物を見るが爲に作られしものにて、痛疼を感せんがために作られしものにあらず。而も時々其痛疼を感ずるとあるは、思ふに是れ頗る複雜の機關たるに由るものならん。故に此點は今の論證に影響を與ふるに足らざるなり。

第二の反對論はいふ。眼の如き有用の機關は此の自然界中其數少からざれど、凡ての機關皆悉く有用なりといふにあらず。例せば、猛獸の爪または齒の如きものもありて、是れは却て有害に且つ他の動物に苦痛を與ふる樣意匠せられたるものゝ如しと。されど此の反對論は理とも思はれず。蓋し是等の機關は、該動物に食物を得易からしむるとて、意匠せられしものに相違なく、隨つて此の目的のため恐らく必要のものなるべく、其所有主の幸福を增進するものなり。之を要するに、此の自然界の機關中、一として苦痛を生ずるを目的とせるものは、是れあらず。若し苦痛の生ずるが如きとあらば、そは唯一種偶然的の結果のみ。斯る理由なるを以て、右の兩反對論は共に成立せず。

（乙）人類の微賤なる事

以下少しく他の側面に就て講究せざるべからず。偖こゝに二つの大切なる難問あり。第一は人類の如何にも微賤らしく見ゆることなり。人類は此の世界に於て極めて大切の者に相違なし。また多少神の屬性をも賦與せられたるものなり。而も之を其創造者に比すれば、極めて微賤のものに過ぎずといふもの、即ち此の難問の趣意なり。偖此の難問は今日新たに出で來れるものにはあらず（詩八〇三、四を見よ）。而も近代の學術勃興し、地球は太陽系の一員にて、太陽系また宇宙の一部分なるを示すに至り、此難問はその力を加へたり。此に於てか疑問起る。曰く、此無數の星辰を支配し給ふ神が、地球の如き小世界に住める者を願念し給ふことあるべきかと。こは吾人當面の問題なるが、始めに先づ反對諸論證を

講究し、第二に人類眞正の價値に及び、最後に他の遊星にも住民ありやとの問題を論せんとす。

(一)反對諸論證

第一に、神は人類の如き微賤のものをも顧念し給ふべしとは訝かしきことながら、神が人類の如きものを意匠し、創造し給へりといふとも亦是れ訝かしきことなり。而かも神は之を意匠し、創造し給へるに相違なし。已に之を創造し給へりとすれば、神は人類の幸福を顧念し給ふと疑ひなし。たとひ疑ひありとするも、眞に瑣細の疑に過ぎざるべし。されば、「最初の顧念は、最終に至るまでの顧念の保證なり」。神一たび人類を造り給へる以上は、之を顧りみざるに至るが如きことはあるべからざるなり。

且つ夫れ、萬の受造物は如何ほど微賤にもせよ、之を放棄して顧念せざるは神に相應しき屬性といふべからず。況や自然界の神に於てをや。試に思へ。此の自然界の萬物は一として其微細物たるが故に輕賤せらるゝの模樣なし。否却て微細の昆虫に至るまで宇宙唯一のものなるが如く手落ちなく完成せられたり。夫れ眞の偉大は微細のものを輕蔑するが如きことあらず。神は無限に偉大なるものなり。故に何事も余り大き過ぐるものなきと同樣、余り小さ過ぐるものもなきは即ち其偉大なることの一要素ならん。宇宙を支配し、無數の星辰を保護し給ふ神は勿論偉大なり。然り、思慮も及ばぬほどに偉大なり。而も此の神にして、此の彈丸黑子に似たる世界と其住民とを保護し、而して之を保護すると周到を極め、啻に人類全体を顧念するのみならず、又人類箇々の幸福をも顧念し給ふ力あるものとせんか。此の神は一層偉大の神なりといふべし。然り思慮も及ばぬほどに一層偉大なりといふべし。

之に加ふるに、人類は微賤なるにもせよ、又微賤ならざるにもせよ、各自別々に皆、無比無類のものなり。人類は物質の分子の如きものにはあらず。物質の分子は幾百萬ありたればとて皆相同じきも、人類は一人として全然同一のものといふはあらず。動物や植物と同じ程度に於てさへ、同一のものといふはあらず。是れ人類は各自別々の靈にて、世界の諸他の萬物と殊別なるペルソナル、ピーイングたるに由る。果して然らば、人類は皆個々に或る特別のものを有するものなるが故に、神は人類個々に對し特別の顧念を垂れ給ふべし。思ふに、此の意見は頗る綺矯と思はるゝならん。されど、多少自然界の妙を解するほどのものは、綺矯なりとて之を疑ふことはあらざるべし。

其次に科學の發見に就て言はんに、反對の側面に有利の論點は此處にも亦尠からず。是れ望遠鏡は此の地球が太洋の一滴に等しきことを示したると共に、顯微鏡は又各一滴の中に新世界あることを示したればなり。此故に無限大にして驚歎すべきものならんには、所謂る無限小も亦之と同樣驚歎すべきものにて、人類は依然一種の中央的地位を占む。

例せば、一個の機關の一部、即ち人の肉眼の虹彩の如きものに就て調査するとせよ。其時吾人は此の虹彩が許多の微細なる部分を以て成れるを發見すべく、而して其各部は顯微鏡を以て見れば見る程、益々複雜にして殆んど際限なきに似たり。果して然らば人体諸機關の構成に斯くの如き技巧を示したまへ

る神は、ペルソナル、ビーイングたり、道德性者たり、亦是等諸機關の所有者たる人類其者を顧み給ふべきは殆んど疑なし。勿論動物や植物の機關にも驚くべき幾多の意匠を見るべしと雖も、之がため右の論證は薄弱となるものにあらず。是れ動物及び植物には神に顧みらるべきペルソナル、ビーイグもなく、道德性者もなきを以てなり。

又科學は宇宙の廣大にして、星辰のかず幾百萬、その距離幾百萬哩なることを明かにせしのみならず又宇宙には一致ありて、其各部は互ひに密接の關係を有することをも之を明かにせり。而して是等の星辰を支配したまふ神が、吾人々類を顧念し給ふことを信ずるは別に困難のことにあらず。是れ恰も、是等星辰の中に燃えつゝある瓦斯が、吾人の分光器に感應することを信ずると等しく、易々の業なるのみ。而も瓦斯は分光器に感應す。果して然らば、是れも亦大いに困難を減ずるものといふべし。

（二）人の眞正の價値

加之、科學はまた、人類そのものに就ても、人類の長久なる發達に就ても教ふる所多し。就中、此の後點は、今の論證に頗る大切の關係あり。げに進化論は從來の地位を顚倒し、人類は微賤にあらざるのみならず、實は非常に貴重のものなることを明かにせり。見よ、此の地球は吾人の知れる如く、既往數百千年の間存在し、歩々着々、生物を高等より高等に進化せしめつゝ、遂に人類にとは到達せしめたり。而して此の人類は萬代相傳の家督相續者たり、代々の祖先によりて進化せしめたる數千の長所の遺傳者にてあるなり。

而して此に一つ大切のことあり。そは機關の進化は人類に達してもはや停止せるが如くなることなり。さすれば人類は一層完全なる或者に達すべき階段にあらで、却て此の階段の終點に在りといふべし。思ふに、此の世界には今後も人類より高尚のものは萬是れなかるべし。是れ蓋し人類をして今日まで進化せしめたる原因は、最早其活動を休止し、此上進歩せしむる能はざるに至りたればなり。見よ。人類は道具の使用を悟りたると共に、手の進化は終結せり。又衣服を着用するに至れると共に、身を寒暑に曝して其堅硬强健を增すことを終結せり。又武器を用ゐ機械を發明するに至れると共に、單の膂力は最早必要なきに至り、且又之を增すと能はざるに至れり。

之を要するに、進化作用が心的方面に向ふに至り、体的發達はこゝに終結せり。此を以て、人類以上に高尚の動物はもはや進化し出づることなかるべく、只人類は心的及び道德的には漸次尚ほ完全に發達すべし。されど体的にはもはや進歩することなからんのみ。斯くの如くにして人類は今日迄發達せるものゝ中に於ける最高者にて、今日以後も是れより高等のものは此の世界に進化し出づることなかるべし。果して然らば、進化は其規模廣大にして、長厚、期間、結搆等測知し難けれども、其設計に至りては只一つにて、即ち人類を終點とせしと明了なり。果して然らば、萬物皆神の意匠に成れるものなるが故に、人類も勿論神の最初より前知し、豫期し給へる目的ならざるべからず。

斯く人類を認めて、自然界の悉く趨向せる目標となし、又神（即ち自然界の造主）が終始軫念し給へる重もなる目的となさんか、人類は其價値を增すこと十倍なりといふべく、加之人類は神を以て見れば決して微賤のものならざるを確示すといふべし。

且つ又此に之が理由を擧示するとも敢て難からず。蓋し人類は前にもいへる如く肉体を有すると等しく、又心を有す。而して科學上の諸發見は他の動物よりして人類の進化せるとを示せるを以て、多少人類の肉体の尊嚴を損へるに相違なきも之と同時に此の諸發見はまた心の價値を騰貴せしめたり。是れ此の發見をなせしものは心に外ならざればなり。而して今後人類は何等かの新しき發見をなすとあらんか、其度毎に其地位は益々昇進することあらんのみ。隨つて今日にては人の心は、數百年前の人の想像の及ばざりしほど高貴のものとなれり。げにや、幾萬里外の星辰の運動を認め、又其組織分子の如何を發見する力あるほどの心なるものは、微賤なるべき筈あらざるなり。而して吾人若し人の心は其肉体と等しく無數の年月を重ねて、徐々に進化せしものなるを信ずれば、之がため心の價値は一層增加するものゝ如し。

之に加ふるに、人類は只心を有するに止まらず、また靈即ち正邪を行ふの自由意思を有するものなり。而して（吾人若し幸にして、其地位を距ること余り遠からずば）吾人は恐らく道德的完全は心的偉大に優ること、心的偉大が体的膂力に優ると等しきを知るの時あるべし。萬一、吾人自ら道德的完全の價値如何を了解する能はずとも、神は之を了解したまふ。神は自ら靈にまします。此故に、心と自由意思とを有して、或る程度までは其像に肖たる所あり、且つ遂に發達して道德的完全に到るべきものならんには、そは例ひ小供にもせよ、神を以て見れば、一箇の死物に過ぎざる此の宇宙に優ること萬々ならん。（是れ人類は宇宙よりも一層神に似たるが故に。）果して然らば、既往に此世界に住し、今日また現に此世界に住せる無數の人類に就て、吾人は何といふべきや。彼等の幸福は如何なる人にても斷じて之を輕視するを得ず。然るを況んや、彼等の創造者に於てをや。

（三）他の遊星に於ける假定的住民

されど或は之に反對していふものあらん。他の遊星に就ては如何。是等諸遊星の中にも住民を有するものあるにあらずや。若し然らば大に此の論證を薄弱ならしめ、神は此世界の人類に對しても、又其他の者に對しても、特別の顧念を垂るゝ能はざるを示さずやと。若し夫れ、他の遊星にも此地球に住へると同樣の生物接息せんか、特に此の世界の生物をのみ顧念したまふべしとは勿論背理のとなり。されど、斯くの如きは頗る疑はしき點なり。近代科學の示す所によるに、重力の如き、光の如き、熱の如き諸の自然法は、宇宙を通じて到る處皆等しといふ。之に由て是を思ふに、生存の法則も亦同樣なるべしと察せらる。已に生存の法則同樣にして、且つ他の遊星にも生物存在すとすれば其生物は、此の遊星の生物と粗ぼ相似たるものなるべく、且つ粗ぼ同じ方法にて進化せしものならんと察せらる。果して然ら

んには、規律あり、且つ中庸を得たる熱の供給を始めとして、適宜の大氣の如き、充分の水の如き、許多の便宜なる境遇は他の遊星にも存せざるべからず。而して獨り今日に存するのみならず、既往幾萬年の昔より存せざるべからず。是れ(地球を標準として考ふれば)高等生物の發達には長日月を要すればなり。されど、斯くの如きとは皆確かに他の遊星には是れあるとなかるべし。

然るに、こゝに一つ信仰に困難なることあり。そは此の宇宙の間にペルソナル、ヂーイングの住する所只一つなりとせば、神が無數の太陽を造り給へるは何のためぞといふこと是れなり。蓋し此の無數の太陽の中には、必ず其周圍に遊星を有するものも多かるべしと思はるゝが故なり。されど、こは一應は奇なるに似たれども、實は自然界に於ける神の經綸と全く相符合するものなり。是れ自然界にありては濫費無用らしく見ゆることが、其通則なるを以てなり。此故に此點も亦如何ともすべからざる程の困難といふにはあらざるなり。

而も此の問題は暫らく未決の儘に置くも差支なかるべし。是れ他の世界に住民ありとせば、神は吾人地球上の人民に對すると同樣、此の住民をも顧念し給はざるべき理由なければなり、(否却て熱心に之を顧念し給ふやも知るべからず)。是れ神の能力は無限にして、無限の極小部分も尙ほ極めて大なるものなるやも知るべからざればなり。

(丙)惡(災)の存在する事

次に吾人は、第二の反對論即ち惡(災)の存在よりして生ずる、前者よりも恐らく大切なる反對論に移るべし。論者曰く、此世界は苦痛と不幸とに滿てり。是れ其受造者の幸福を願みたまふといふ神の意匠したる所、創造したる所といふと相容れざるにあらずやと。更に之を他の言をもていはんか。曰く、惡(災)は此世に存在す。而して其惡(災)とは、之を廣意に用ゐて、物質的の苦痛と道德的の邪惡とを併稱するものと見るも可なり。已に斯くの如き惡(災)あり。こは神が之を豫防する能はざりしを示すものにあらざれば、即ち豫防するの意なかりしを示すものにあらずや。而して神若し豫防する能はざりしものとすれば即ち全能にあらず。豫防するの意なかりしものとすれば即ち全善にあらずと。偖此の反對論は疑ひもなく一難問なり。而して頗る重要のものと覺ゆるが故に、其動物及び人類に及ぼす影響につき、詳かに之を調査するところあらん。

されど最初に一言し置きたきは、此の難問は如何なる說に取りても、免かるべからざるものなりといふことなり。試みに思へ。此の凡ての惡は之を善き神の所作とするは、如何にも事實近眞的ならずといふとせよ。然らば之と反對に人類の不幸を希望する惡き神ありて、此世界を意匠したりといふべきか。斷じてさることを言ふを得ざるべし。是れ此の人生に於けるあらゆる幸福は之に矛盾すればなり。此兩說已に共に當らずとせば、その他には只一說あるのみ。即ち無上の神は無頓着の神にて、人類の幸不幸には頓着せずといふもの是れなり。されど此の說も亦近眞的ならず。是れ神は人類をして苦樂を感す

る力あらしめ、且つ頗る鋭敏に之を感ずる力あらしめたればなり。此に於てか、論者或は此の難問を凡ての有神論に對して主張し、無上の神の存在を否認する武器となすとあらんか。一言之に注意すべきとあり、そは即ち有神論は此の難問を充分解釋する能はざるも、無神論、不可識論、また共に充分之を解釋する能はずといふと是れなり。若し夫れ、此の難問それ自らに就て考ふれば、自ら二元論に傾かざるを得ず。即ち善の力と惡の力と、兩つながら無始より存すとの說を認めざるを得ず。されど自然界には一致ありて、二元論とは全く相矛盾せり。之に加ふるに、此の難問は大は大なるも決して如何ともすべからざる難問といふにはあらざるぞかし。

(一)動物に於ける物質的の惡(災)

反對論者はいふ。諸種の動物は無數の苦痛と不幸とに惱まさる。されどこは全然故なきものにて、且つ何等の効用なきものなり。是れ動物は道德性を欠くを以て、苦痛を受くべき故なく、又苦痛によりて益を得べきにもあらざればなりと。乞ふ、吾人をして順次此の諸點を講究せしめよ。

第一に先づ動物の苦痛の程度に就て講究せん。抑も百萬の動物が同樣の苦痛を受くるがため、一頭の動物の苦痛增加すといふは道理上あるべからざることなり。此故に吾人は只苦痛が個々の動物に及ぼす影響を講究すれば足る。必ずしも全動物の苦痛の總量を調査するに及ばざるなり。偖動物が非常に苦むの樣子あるは明白のことなり。たとへば、鼠が猫に捕へられたる場合の如き是れなり。されど其苦痛が實際如何ほどのものなるかは斷言するを得ず。是れ動物の感情は、人類の感情に比し、恐らく遙かに遲鈍のものなればなり。此故に同じ境遇にある時は、人類も同じ苦痛を感ずべしと思ふは大いに誤れり。こは苦痛は腦髓と關係あるものなるを思へば自ら判然すべし。即ち野蠻人は文明人よりも苦痛の少き事實を見ても之を知るを得ん。此に於てか吾人は推察すらく、野蠻人に比して其心的發達の遙かに低劣なる動物は、野蠻人よりも其苦痛遙かに少なかるべしと。而して最下等の生物に至りては全く何等の苦痛もなきものと察せらる。

而して、こも亦目擊の事情に照せば一層確實なるべく、種々なる事實は吾人をして殆んど此の斷案を下さざるを得ざらしむ。例へば、蟹は徐かに己れよりも一層大いなる蟹に呑まれながら、己れよりも小さき蟹を食ふことを止めず、否之を食ふことを止めざるのみならず、如何にも甘げに之を食ふ。こは蟹が殆んど苦痛を感ずることなきを示す。何となれば苦痛は一般に食事の愉快を絕滅する効力あるものなればなり。此他世に知られたる例尙ほ多し。然るに、之が反對の論證といふべきもの唯一つあり。即ち下等動物は、虐待を受けし場合に、其身体を蜷きて恰かも大苦痛を感ずるものゝ如くなると是れなり。されど身体は蜷けりとも、多くの場合に於ては何等の苦痛あるにあらず。たとへば、蚯蚓を兩斷せし時の如き、尾部は頭部と共に蜷けども、確かに苦痛を感ずるとあらざるなり。

之に加ふるに、多少の教育を受けて、知力の開けたる家畜は例外なれど、一般の動物は苦痛を豫知する模様なく、苦痛に思想を集注する力なし。而して是等は人類にありては大いに其の苦痛を増すものなるぞかし。偖前にも掲げし例に歸り、鼠は何時までも生き殘り得べきものにあらずと推定していはんに、たとひ猫に殺さるゝことありとも、そは非常に短時間の不幸なり。恐らく病氣若しくば老衰によりて死するよりも、其苦痛は少かるべし。果して然らば、之を全体よりいふ時は、動物界の苦痛は普通に人の想像せるよりも遙かに少かるべし。而して下等の生物に至りては、全く何等の苦痛だも感せざるならん。

されど、論者はまた主張していはん。以上の説明は幾分か困難を減せしといふだけにて、全く之を除去したるにはあらず。試みに思へ、動物は何故に苦痛を受けざるべからざるか。吾人の見る所を以てすれば、是れ故なき苦痛なり。何となれば、動物は道德性もなく、責任もなきものなるが故に、苦痛を招くほどの惡事をも行ふ能はざればなりと。されど、動物の受くる苦痛若し故なき苦痛ならば、其の受くる快樂もまた故なき快樂なるを記憶せざるべからず。此の兩者は之を公平に秤量するを要す。思ふに苦痛の力なきものには、快樂の力もあることなかるべし。是れ苦痛も快樂も共に同一の神經系より起るものなればなり。且つ夫れ、事實の上より見れば、動物は快樂の量頗る多く、苦痛の量甚だ少し。其の生活は朝より夕に至るまで愉快なること是れ其の常態なればなり。思ふに、同一種の動物に就て、常に幸福なるものと、不幸なるものとを計算せば、幸福なるものは遙かに多く、不幸なるものは之に比するに足らざるほどなるべし。要するに、健康と幸福とは動物の常態にて、疾病苦痛は其の例外なりとす。

之に加ふるに、苦痛は動物に効用なきものとは言ふを得ず。試みに思へ。動物は進歩せしむべき道德性を有せざるは勿論ながら、保存と遺傳の必要ある物質性を有す。而して苦痛の感覺は之がために必要のものなるが如し。げに苦痛の感覺は一種の哨兵なり。動物に危險を警告して其滅亡を免かれしむればなり。例せば動物にして如何なる强熱にも苦痛を感ずることなくば、山林の燒くる時も彼等は難を避くることをせざるべし。又如何なる飢餓にも苦痛を感ずることなくば、或は餓死することも是れあるべし。他の事に就ても亦之に同じ。隨つて苦痛は實際大なる生命保存力なり。果して然らば、動物の受くる苦痛は、効用なきものなりといふは當を得ず。已に當を得ずとすれば、反對論の最終最要の點は即ち敗れたりと謂ふべし。

(二)人類に於ける物質的の惡(災)

以下移りて人類の場合を講究せんに、吾人は不幸にして人類の受くる苦痛は頗る多きものなるを知る。種々の不慮の出來事は言はずもがな、齋闘の生活、苦しき疾病、長びく死等皆人の知る所なり。敢て問ふ。人類の幸福を顧みたまふといふ全能の神が、凡て是等を意匠し給へるものなるかと。

偖こゝに記臆し置くべき大切の事は、物質的の惡(災)は、大抵後段に論ぜんとする道德的の惡に基づくといふと是れなり。殊に人類の受くる苦痛と不幸の大部分は、自己或は他人の惡逆、愚行に由るものゝ如し。されば、人類の苦痛は己れのなせる所にて、神のなせる所にあらず。之に對して尤めを負ふべきものは人類にして神にはあらざるなり。

次に、人生の惡(災)と稱せらるゝものは其實苦痛にあらず、只愉快の足らざるか、若しくは愉快の欠如せるを指す場合多し。例せば、人若し一眼の明を失へりとも、必ずしも苦痛を感ずるに限らず。若し生來盲目の人ならんには、一眼だけにても視力を有することを非常に感謝すべき筈なれはなり。然るに此人は兩眼を有することに慣れたるの故を以て、今只一眼を存することを不自由とするに至れるのみ。之と同じ論法は又他の場合にも適用するを得べし。之に加ふるに、人生の苦痛はたとひ如何ほど大なるにもせよ、其愉快ほどに大いなるものにはあらず。こは大抵の人が皆悉く此世に生存せんとを希ふを見ても明かなり。且つ又、此の世界には無意識の幸福なるもの頗る多し。是れ人類は之を意識せざるも、幸福なり得る樣(而して普通には之を意識せざるも幸福なり)仕組まれしものなればなり。さればとて之を意識せざるが故に、不幸なる人といふは一人も是れあらず。更に又、人類の苦痛もかの動物の苦痛と同樣頗る必要のものなり。是れ苦痛は危險と疾病とを人類に警告して、其滅亡を免かれしむるの用をなせばなり。

之れに加ふるに、此の世界の如き物質的世界にありては自然の勢力が一定の法則に隨ひて作用する以上は、多少の苦痛は是れ避くべからざることなり。例せば、重力にして常に其の法則の通りに作用する以上は、之がため時々高塔の潰倒して人を傷つくることもありぬべし。斯くの如き事變を未然に防ぐ途は、只絶えず神が是等の諸勢力に干渉することあるのみ。即ち通俗の言を以ていへば、奇蹟あるのみ。されど斯くては只人生をして救ふべからざる混亂に陷ゐらしむるに過ぎず。幸にして是等の勢力も、今日にては一定不變の作用をなすが故に、其の然らざるより生ずべき許多の災害は豫見せられ、又豫防せられつゝあるなり。然るに人にして若し之を豫防するとなからんか(たとへば、ヴェスヴィアスの類々たる破裂にも拘らず、尙ほ自ら好んで其山腹に居住するが如きとあらんか)、其責の歸する所人類にありて、他の者にはあらざるべきなり。

たとひ豫見、豫防の途なき、地震または噴火等の如き災あるにもせよ。數千の人が突然同時に死すると(毎年幾百萬の人が斯る災害のため死すべきものと假定して)一人々々徐々に死し、或は長き病に罹りて死すると相比せば、何れを優れりとし、何れを劣れりとせん。是れ俄かに決し難き問題なり。こは勿論想像上よりいふとながら、苦痛の總量は前者よりも後者が少かるべきなり。

故に吾人はいはんとす。人類の苦痛は、人類自身に原因するものを除けば、思ふほどに大なるものにあらず。且つ人世には苦痛のほか幸福も亦是れありて、苦痛と相殺すること是れ其の例なり。更に又多

少の苦痛は單に有益なるのみならず、吾人の境遇にありては避くべからざるとなりと。然るに是等の諸點は眞理に相違なく、又困難を輕減し得たるに相違なきも、未だ以て之を除去し得たりとは言ふべからず。是れ此世には、前條の如く說明し得るもの丶外尙ほ多くの苦痛あればなり。

思ふに、左に記する所は蓋し之が眞正の說明ならん。曰く、神の此の宇宙を創造し給ふや、それと同時に是等の苦痛をも豫知し給へるなるべく、此の意味よりいへば、意匠したまへりとも言ふを得べし。さればとて、之を欲望したまへるなりといふは當らず。否神は却て他の何事かを欲望し給へるなるべく、而して之を達するがために、此の苦痛は必要の條件なりしならん。所謂る他の何事かとは、勿論人の品性の鍛錬と琢磨とに相違なし。而して之がために何等かの苦痛は必要なりしもの丶如し。

試みに思へ。此世に若し苦痛なくば、沈勇もなく、剛氣もなく、忍耐もなく、憐憫もなく、他に對する同情もなく、犧牲、獻身もなく、凡て高尙の人格たるべきものあるとなかるべし。他語以て之をいへば、人類の如き生物は、苦痛に由るにあらざれば、完全に至るとなきものなり。果して然らば、人生の苦痛は決して神の意匠に缺點あるとを顯すものにあらず。苦痛は一つの手段なり。然り、吾人の見る所を以てすれば、人の最高最貴なる品性を發達せしめ、人をして初めて尊敬の價値あるものたらしむるに必要なる唯一の手段なり。且つ夫れ人類の品性は人類自身の力によるにあらざれば造るを得ず、既製品として賦與せらるべきものにはあらず。又、漸を以てするにあらざれば造るを得ず、決して一時に造らるべきものにあらず。果して然らば、神は人類をして絕えず苦痛を忍ばしめ、之によりて陶冶せる特別の品性を有せしめんとし給ふものにて、此の目的を達せんとすれば、神は只絕えず人類に苦痛を與へたまふの外はあらざるなり。

思ふに、斯くの如きは、人類の惱まされつ丶ある物質的の惡(災)の說明として、最も近眞的のものならん。即ち其目的は人の品性を發達せしめ、且つ完全ならしむるにあり。而して此の目的は善き目的にして、他の方法にては、遂ぐべからざる目的なるが故に、物質的の惡(災)は善き神の意匠し給へるものに相違なし。吾人は人生の苦痛の極めて多きを思ふ毎に、(如何なる說明を以てしても、苦痛の多きは、否認すべからざる事實なり)益々神の善德の大なるを感じ、また人類の最眞最善の幸福を來すため、これほどの高價を拂ふを辭し給はざるを見て、其之を望み給ふの如何に切なるかを感ず。げに或人のいひける如く、神若し善ならば非常に善ならざるべからず。是れ神は吾人の住せるが如き世界を作り給ひたればなり。

(三)人類に於ける道德的の惡

然るに論者はまた主張していはん。物質的の惡(災)の必要と價値とは是認するにしても、此の物質的の惡(災)は道德的惡のため非常に其害惡を增大せり。即ち自ら求めて、己れに不幸を來すと共に、又他にも之を及ぼす人あり。斯くの如き道德的の惡は、果して豫防の途なかりしものか。換言すれば、

罪惡は凡て之を此世より排斥するを得ざりしものかと。されど人類を以て自由意思者なりとする以上は、こは到底豫防すべからざるとたりしなり。是れ自由なるものは何時も濫用せられ易きものなればなり。他語以て之れをいはんに、人類は或る場合に正邪何れを行ふも自由たるべしといふと、是れ神の定め給へる所なりとせば、時に惡を行ふことあるは是れ必然の勢なり。こは如何なる全能者も變更する能はざる所にして、若し之を變更せんとすれば、人類の自由を破壞せざるを得ざるなり。此を以て創造者は道德的の惡を意匠したるに相違なきも、必ずしも之を欲望し給へる目的は全く外にあり。而して此の目的を達するがため、道德的の惡は必要缺くべからざるものたりしなり。

而して此の目的とは如何なるものかと、言ひ當つることは、是れ亦困難のことにあらず。試みに思へ。人類若し自由意思者にあらずとせば、即ち機械に外ならず。勿論行儀よき機械には相違なきも、さりとて機械は機械なり。然るに吾人の見る所を以てすれば、人類は是れ神の最高最貴の作品なり。然るを神は、此の作品が單に機械に止まるを本意とし給ふとあるべからず。げに人類は惡を行ふ力あるものにてありながら、善を行ふ自由のものなるが故に、單の機械に優る。こは何人も疑なき點なるべし。已に斯くの如き利益あり。たとひ人類の中に邪を行ふものありたりとも、利害相償ふて遙かに余りありと謂ふべし。此故に吾人が此の自由のために拂ふ代金は決して廉ならざれど、こは其の實價相當の代金なり。善には無限の價ありと稱せらる。果して然らば、自由意思は危險の賜物に相違なきも、此の善を得るがためになくて叶はざるものにてあるなり。

之に加ふるに、創造者が斯く其受造者の行爲を顧みたまふといふには、少しも訝かしきふしなし。一國の君主、若し謀叛を企つるものをも、忠信を盡すものをも同樣に冷遇せば、吾人は斯る君主を尊敬することなかるべし。又一家の親にして、其子の孝と不孝とに無頓着ならば、吾人は斯る親を尊敬することなかるべし。果して然らば、吾人に自由意思を與へ給へると共に、又正邪を辯すべき良心を與へ給へる神は(即ち神の聖旨の如何を知るべき良心を與へ給へる神は)、吾人が正を行ふに、無頓着なることあるべきか。否々さるとあらじ。自ら道德性者にして又人類をも道德性者に造り給へる神は、人類をして自意的に正を行はしめんと願望したまふと、何事を見ても明白の事實なり。果して然らば、神が吾人の邪を行ふを默許し、以て其不幸の結果を受けしめたまふも、皆是れ吾人をして其自由意思より正を行ふことを得せしめんとの聖旨に外ならず。

此の論證を他の言にいひ換ふれば、自由意思者は自由意思を有せざるものに比して遙かに高尚なり。而も自由意思者にして邪を行ふの可能力を缺かば、是れ自由意思者にあらず。此の故に、宇宙にして若し之が創造者の作品たるに耻ぢざるものたらしめんか。換言すれば、最高等の生物(即ちペルソンスをいふ、物をいふにあらず)を其中に保つべきものたらしめんか。稍奇矯の斷案とも思はるれども、道德

的の惡は宇宙に必要のものなり。少くとも惡の可能力は必要のものなり。之を更に簡短の言にいひ換ふれば、神若し善ならば、善を行ふの力ある生物を創造し給ふと是れ必然の次第なり。而して善を行ふの力あるものには、又惡を行ふの力も是れなかるべからず。是れ善と惡とは相并行すべきものなればなり。

然るに論者は又主張していはん。神は人類が如何に自由意思を用ゆべきかを豫知したるべし。隨つて常に之を誤用するが如き人類を作る必要はあらざりしなり。換言すれば、此世には惡人なくして可なりと。之に對する答辯は困難ならず。即ち惡人も亦必要なりといふにあり。殊に人の品性を鍛ひ、之をして道德的完全に達せしむるためには、他の如何なる惡よりも必要なりといふにあり。かの剛氣、恐耐等の物質的の德は、苦痛、苦難等の如き物質的の惡に由るにあらざれば成就せず。道德的の德も亦是れに同じ。道德的の惡即ち罪に由るにあらざれば成就せざるなり。

たとへば、此世に一つの罪だもなしとせよ。されば他人の過失を寛容すといふことも是れあるべからず。時流に抗して正義を主張する道德的勇氣も是れあるべからず。他人が我に加へし損害を赦すといふことも是れあるべからず。善を以て惡に報ゆる（是れ恐らくは凡ての德の中にて最も高きものならん）といふが如きことは勿論是れあるべからず。罪が此世に有り得ればこそ、否、實際存在すればこそ、是等の德も亦是れあるなれ。若し此の世には物質的の惡（災）の外別に戰ふべきものなく、全社會を通じて只善人のみならば、是れ等の德は遂に成立すべからず。由て今此の事情を左の如く說かんとす。

曰く、惡人は惡世界に必要なり。惡世界は人の品性を試驗するに必要なり。人の品性を試驗するは、其自由意思より神に事へんと決心せしむるに必要なり。自由意思より神に事へんと決心するとは、神の望みにかなへる僕たるに必要のことの如しと。

結論に入るに先だち、尙ほ一言し置くべきことあり。他なし、自由意思者の行爲に就ては、豫知といふと豫定といふとは同一にあらずといふと是れなり。神は人類が如何に其自由を利用し、若しくは誤用するを豫知するにもせよ。必ずしも之をなすべしと豫定し、又は强迫するが如きことなし。是れ人類の行爲は假定上自由たるべき筈なればなり。たとへば人類日常の事に於ても、或る場合には或程度まで他のなさんとすることを豫知することあり。而も之をなすべしと豫定し、又は强迫するが如きことあらず。されば豫知と豫定とは頗る大切の區別なり。神は人類が自由意思を誤用するを豫知せりとは言ふを得べし。されど之を豫定せりといふは、全く理由なきことなりとす。

(T)結論

以下吾人は本章に說きたる論證の梗概を擧げん。即ち吾人は先づ神が確かに人類の幸福を願念する力あることを說けり。而して本論に入るに先だち、豫じめ神の斯くし給ふべき推察論を揭げ、次で此の推察論は實際の事情と符合することを、許多の慈愛的意匠の痕跡によりて證明せり。それより次の論

點に入り、人類を微賤なりといふは、寧ろ外觀に止まりて、實際の事情にあらざるを說けり。是れ人類が進化の最終點に其位地を占むるは、其價値を示すものなればなり。且つ又人類の心と靈とも亦之を說明すると共に、人類が此の地球上に於ける、否恐らくは此の宇宙間に於ける無比無類の生物たるとをも證明するなり。

次に吾人は惡(災)の存在に就きて左の如き斷案を下せり。神の此の地球を創造したまふや、之と同時に諸の惡をも豫知したるべきは、是れ否定すべからざる事實なり。此の意味よりいへば、神は惡を意匠したりと謂ふも差支なし。されど神はまた此の惡が只一時的に止まり、且つ此の惡によりて他の方法にては到底得るに由なき永遠の善を得て、尙ほ余りあることをも豫知したまへり。こは人類にては只豫察に止まるべきとなるを、神は能く豫知し給へるなり。此に記臆すべき事は、神の事業は永遠的のものにて、其の經綸は全宇宙を包括すといふことなり。此故に吾人の如き有限の智識にては、能く之を解知することなきも怪むに足らず。吾人は只或る程度まで之れを解知すと謂ひて滿足すべきのみ。

吾人以爲へらく、此世に行はるゝ諸の惡は、『必ずしも目的にはあらず、只目的に達する手段ならん』と。而して吾人の知れる所を以てすれば、是等の惡は思ふに最上の目的を達するための最上の手段ならん。否、曾に最上の手段たるに止まらず、前にもいひし如く、人類の最高、最貴の德を發達せしむる唯一の手段ならん。斯くて吾人は斷案を下して曰く、神は此世の善惡兩者を意匠せしには相違なきも、必ずしも兩者を欲望し給へるにはあらず。且つ此の自然界を見るに、神の欲望し給ふものは善にて、惡は畢竟其不可避的同伴者に過ぎざるを示せる證據充分なりと。

此の斷案を言ひ顯すとて、善德は神の屬性なりてふ言を以てする人、往々あり。偖、此の善德といふ言は、之れを是認しても確かに差支なき言なり。是れ勿論非常に不精確の言に相違なく、且つ事實を言ひ盡さゞるの憾はあれど、或は惡といひ、或は無頓着といふに比すれば、遙かに眞理に近きものなるを以てなり。そは兎に角今茲には此の言を用ゐて言ひ顯せる特別眞正の意義を觀察すること是れ大切なり。

偖、神の善德といひ、若しくは人の幸福を顧念し給ふといふは人の行爲の如何を問はず、一視同仁を以て之れに臨み、また何人をも出來るだけ幸福ならしめんとし給ふとの意にはあらず。斯くの如き說は、惡の存在する事實と到底相兩立せざるなり。神は最眞最善の方法によりて、人類の幸福を進捗せしめんとし給ふ。之れがために神は敢て人類の一時的希望を滿足せしめんとはし給はず、却て人の品性を訓練發達せしめ、以て最高の幸福を味ひ得るものたらしめんとし給ふ。されば、神の性質は單に慈愛といふに止まらず、また正義なり。隨つて神は、人類の幸福ならんとを求め給ふのみならず、また正義ならんとを望みたまふ。此に於てか神は必然の勢として、(是れ神は人を正義たらしめんとするも、其意に反して之を正義ならしむる能はざるが故に)、人に自由意思を與へ、不義を行ひて自ら不幸

を招くも、其自由に任せたまへり。かゝる事情なるを以て、神の性質は慈愛と正義とを兼備せるものなりとの説は、啻に自然界に於ける慈愛的意匠の痕跡の解釋に適するのみならず、また惡の存在の解釋としても、特に道德的の惡の解釋としても適當のものにて、實は斯くの如き現象を調和する唯一方法と思はるゝなり。之れを要するに、慈愛も正義も共に善なるものなり。而して神の善德なるものゝ中には此の兩者を包含す。

偖吾人は善德を以て神の一屬性と看做すとすれば、また神は此の善德を最高完全の程度に有したまふものと認めざるを得ず。是れ吾人が神の他の屬性よりして推測し得る所なり。されば、神は啻に、無限の力、無限の智慧を有したまふに止まらず、又完全の善德をも有したまふものなり。此に完全といふ言を用ふるは、善德の如き道德的のものゝ形容詞として、無限といふ言よりも、一層適當なるに由る。以上神の三の大屬性は、三の重もなる有神的論證と相照應することを思ふべし。第一は因果法に基ける論證にて、是れは全能なる創造者の存在を證明す。第二は意匠よりする論證にて、是れ、神の全知なることを證明す。又第三は人の意識よりする論證にて、是れは神の全善なることを證明す。且つ此の三屬性は前章に於て講究せる人の性質の三側面とも多少相照應す。斯くして吾人の最後に到達せる大結論は如何といふに、即ち神は物質的には全能者、心的には全知者、道德的には全善者といふにあるなり。

第六章　此故に神は人類に啓示を垂れ給ふべき力ありといふ事

こは主として人類未來の運命如何に關係す。

(甲)人類の不死

人類の不死とは、ペルソンの不死をいふ。之に有利なる論證種々あり。

(一)人類の無比無類の地位よりする論證
(二)此世の賞罰不公平なるよりする論證
(三)人類の能力廣大なるよりする論證
(四)人類固有の信仰よりする論證
(五)反對の論證

(乙)啓示は近眞的のものなる事

(一)神の性質よりする論證
(二)人の性質よりする論證＝是れ人類は、心的には能くこれを解するを得べく、道

德的には能く之に由りて利益を得べければなり。之に加ふるに、人類は亦啓示を欲望し、且つ人類の地位の無比無類なる啓示を受くる資格充分なり。

(三)二の反對論＝啓示は或少數の人にのみ與へらるゝものなるを以て不公平なりと稱せらる。又啓示は非常の確證あるにあらずんば信ずべからざるものと稱せらる。されど此の兩說は共に成立せず。

吾人は前二章において人類は自由意思者にして、又責任者たること、神は人類の幸福を顧念したまふことを論定せり。而して今本章に於ては啓示の問題を論ずべきことゝなりぬ。啓示とは、之に定義を下せば、神の直接に人類に與へたまふ超人的知識の謂なり。而して超人的知識とは、啓示によるにあらざれば、人類の得るに由なき知識をいふ。例せば、神の人類を創造し給へる目的の如き、神の人類の行爲に關する聖旨の如き、その他啓示によるにあらざれば人類の到底知ることを得ざる既往若しくは將來の事件をいふ。而して神若し欲し給はゞ、或は異象により、或は夢により、或は其他の方法に由り、斯くの如き知識を人類に與へ得るものなるは、是れ爭ふべからざることなり。且つ夫れ、我は神のことを能く知れるものにて、神の斯ることをなし給はざるは確實なりと斷言し得る人は一人も是れあらず（不可識論者に至りては尙ほ更のことなり）。此を以て啓示は確かに可能的のものなり。されど啓示は果して近眞的のものなるか。こは人類未來の運命如何に關係する所大なるを以て、初めに先づ人類不死の問題を講究し、次で神が人類に啓示を垂るゝことは近眞的のものなるを說かん。

(甲)人類の不死

人類の不死とは勿論人類の靈不死の謂なり。而して吾人若し（第四章に於て是認せる如く）、人類は複雜体にて、自由且つ多少超自然的なる靈より成り、且つ此の靈は其の肉体と心とを統御するものなるを是認せば、死後この靈は如何に成り行くものといふべきや。吾人は肉体の如何に成り行くものなるやを知る。即ち其組成分子は一旦分解せられて他と抱合し、其自然的勢力又化して他の自然的勢力となる。一つとして紛失し、一つとして滅亡するものあるとなし。されど、靈は如何に成り行くものなりや。靈若し自由超自然の勢力ならば、死に臨みて諸他の自然的勢力が分解する際、之と同時に滅亡すべしとは、如何にも信じ得べからざることなり。げに物質が外觀上不滅なるが如きも、亦是れ靈の不死を示すものといふべし。

神若し欲し給はゞ、必ずや靈をも肉体と共に滅ぼし給ふを得ること、猶ほ之れを創造し給ふを得るが如し。されど之を創造するにも、亦之れを滅ぼすにも、何等かの超自然的干涉を以てせざるべからざることゝ思はる。而も人の靈にして已に滅びずとすれば、必ず殘存するに相違なし。是れ靈は人の肉体の如くに分解すべき組成分子を有するものにあらざればなり。今夫れ、吾人の知れる死は只一種あるのみ。即ち甲の成分分解し、更に集りて乙の成分となることなり。されど靈は斯くの如き死を遂ぐるも

のにあらざるが故に、即ち永遠に殘存するものなるべし。而して之に有利なる重もなる論證、四あり。

人類の無比無類の地位よりするもの、此世に於ける賞罰の不公平なるよりするもの、人類の能力廣大なるよりするもの、人類固有の信仰よりするもの是れなり。吾人乞ふ、一々順次に之を講究し、次で其反對側面につき一言する所あらん。

（一）人類の無比無類の地位よりする論證

第一の論證は人類の地位の無比無類なるよりするものなり。殊に人類は數千年間の久しきに亘れる進化の大事業の最終最貴の結果なるを思へば、其不死を信せざるを得ず。試みに思へ。進化の如き大事業は、其他の諸のものと等しく、獨り原因を必要とするのみならず、亦目的をも必要とするものなり。而して進化は能く種々のことを説明するを得るものなるも、自ら己れを説明すること能はず。敢て問ふ。何故世には進化といふが如きものありて行はるゝや。何故死物たる宇宙が能く生物を生じたりや。是れには何等かの動機あるべし。而して之れが動機といふに最も適切のものは、果して如何なるものぞ。之が答は只之を人類に於て發見するを得べし。人類は獨り此遊星に於ての（否、吾人の知れる限りにては、宇宙間あらゆる遊星に於ての）最高動物たるのみならず、又ベルソナル、ビーイングたり、道德性者たり。此故に若し何處にか説明ありて存すとせば、其説明は此處に存せざるべからず。果して然らば、進化は神を其原因とし、人類を其目的とするものなり。此原因は勿論適切の原因なり。されど此の目的も亦果して適切の目的といふべきか。

試みに思へ。人類は今日の儘にて永遠までも存在し得るものにあらず。是れ此の地球は早晩太陽に吸收せらるべきものにて、其の時に至れば生物は皆滅亡すべきものなること、何れの點より見ても明了なればなり。此故に人類も亦不死ならざる時は、遼遠の太古より今日まで繼續して、人類を最終目的とへたる進化全体は、何等の永遠的結果をも有せざるものたるべし。而して不永遠の結果は、此の進化の發起者たる永遠の神の事業としては、如何にも相應しからず。然るに、之に反して人類は不死のものなりとせよ。又此世界は善惡微妙に混淆して、人類の品性を養成鍛練するに適當の場所なりとせよ。又神は他日此の鍛練に堪へたる人、此の苦痛を忍びて神に忠信なりし人に圍繞せられんことを望みたまふとせよ。果して然らば、進化は遂に永遠の結果に達すべきものといふべし。加之反對説にては神秘と見ゆる人類の創造も最早不可解のことにあらず。是れ不死者を完全に達せしむることは、神に取りてさへ相應といふべき重大の目的なればなり。

斯くの如くにして、吾人若し人類の不死を否定せば、進化の大法は全部無意味に歸し、自然界は解決すべからざる謎となり了るべし。之に反して、吾人若し人類の不死を是認せば、少くとも滿足すべき答案を得らるべき望あり。是れ若し然らんには、前にもいひし如く自然界は只或る目的を達するための手段に過ぎずと看做さるゝに至るを以てなり。換言すれば、或る永遠的目的を達するための一時的手

段(恐らく必要の手段ならんも)に過ぎずと看做さるゝに至るを以てなり。目的とは他なし。即ち人類(自由意思を具へたる受造者)を生出することなり。而して自然界若し人類の道德的訓練に適當なる境遇を供給し、以て人類を生出せんか、人類は元來自由意思者なれば、其望みによりては即ち能く正義者となり得べし。所謂る正義者とは、邪を行ふの力ありながら之を行はずして正を行ひ、斯くして或程度まで創造者不死の德を其身に具ふるだけの資格あるに至るをいふ。

こゝに吾人の記臆せざるべからざることは、人類は、嚴密の意義よりいへば、正義者として之を創造するを得ざりしといふことなり。人類は完全のものとして(たとへば機械の如くに)、又は無罪の者として(たとへば小兒の如くに)創造せられ得たるならん。されど人類をして正義者たらしめんとすれば、前にも說ける如く人類その者の協力を必要とす。正義は人類自らの修得すべき德にして、人類自ら邪を行ふの力ありながら自由意思を以て正を行はんと決心するにより得らるべきものなり。是れ勿論一朝一夕に成就せらるべき事業にあらず、且つ幾たびも失敗蹉跌を累ねざるを得ず。されど此目的は永遠の目的なり、故に又恐らく精確の目的なり。而して今日の此の世界は恰かも此の目的を達するに適當したる世界なるが如し。是れ此の世界は、邪を行ひ得る力ある者に與ふるに、正を行ひ得べき無數の機會(人類若し能く之を利用せば、日々斯る機會なき日殆んどなし)を以てするを以てなり。

偖斯くの如くに、漸々徐々人類を訓練完成すと見るは、思ふに是れ此の世界の解釋として、又其の長年月間の進化の眞目的として、唯一精確のものなるべし。而も人類にして若し不滅ならずとすれば、此の目的は之を達するを得ず。是れ此世にありては、一人として、道德的完全に達するものなければなり。たとひ之に達するものありしとも、短時日の間のことに過ぎざるべし。嗚呼、斯くの如き大事業が遂に失敗に終ることあるべきか。或は最も成功して、單に短時日の成功に終るべきか。人類若し進化の終點ならば、進化の發起者たる神は、人類を貴重すべき筈にあらざるか。而して神若し之を貴重し給はゝ、永遠に之を滅亡せしめ給ふが如き筈なし。之を要するに(能く人のいふが如く)微々たることに始まりて、大なる進化を遂げたると、今日の如くなる以上は、之に相應せし偉大の終點なかるべからず。而して此の終點は、必ず人類の不死ならざるべからず。若し夫れ進化論者の泰斗たるロマーニスの言を借りていはゝ、『此の試練說によるにあらざれば、此の世界に何等の意義をも付するを得ず。即ち人生の理由を說明するを得ざるなり』(一八九五年出版『宗教思想』一四二頁)。

(二)賞罰の不公平なるよりする論證

第二の論證は、此世に於ける賞罰の不公平なるよりするもの是れなり。已に前章にも說きたる如く、神は一個の道德性者にましまし、正邪を判別するの力あるものにて、且つ吾人の判斷する所によれば常に自ら正を行ふ者にてまします。然るに神が此世に於て人を賞罰するを見れば頗る不公平の觀を呈す。即ち惡人は其惡を行ひて益々榮え、善人却て不當の苦を受け、生涯を通じて全く苦痛の中にあるが如き

人さへ是れなしとせず。斯る狀態は之を如何に解釋すべきや。

只此の問に對しても、滿足なる解釋一つあり。而して此の解釋の外には別の解釋なし。曰く此世は是れ○人生の全部にあらず、只是れ來世の準備たるに止まる。即ち永久の來世に對する短き試驗たるに止まる。而して此の見地より觀察する時は、外觀上極めて不幸の生活も、外觀上幸福の生活と同樣、試練の價値あり否却て之に優れる價値あり。例せば、こゝに不正の利得といふ誘惑ありとせよ。十錢を抓まんとする貧人も之に抵抗するを得べく、一萬圓を盜まんとする富者も亦之に抵抗するを得べし。而して斯くの如き誘惑に抵抗すると人の品性の養成上に其功ありとせんか(然り確かに其功あり)隨つて今後一層正直の生活を送るに堪ふるものたらしめ得るとせんが、こは貧人の場合と富者の場合とに從ひ、異同あるべきことにあらず。此の道理は、之を凡ての場合に應用するを得べし。例せば、如何なる幼き小兒にも、それに相當したる誘惑あればなり。その誘惑たる、大人を以て見れば、或は噴飯に堪へざるものなるべきも、小兒に取りては實際の誘惑にて、必ず其品性を陶冶するの功あるべし。斯くの如くにして此の世界は若し人の品性を養成すべき準備の時代として設けられしものならば、現在の組織は蓋し此の目的を達するために、極めて適當せるものと謂ふべきなり。

加之、是等の試練及び苦痛等は、又自ら人類將來の幸福を增加する手段となるとあるものなり。たとへば、誘惑に抵抗し果せたるの喜びは、曾て誘惑を受けしことなき人には是れあるを得ず。又他人を苦痛と罪より救ひて、彼我兩者の間に永遠の交を結べる喜は、苦痛もなく、罪もなき世には、是れあるを得ず。之と同じ道理は、他の諸の場合にも、之を當て箝むるを得べし。此故に、人の此世にありて、久しく試練を受け、絶えず惡と戰ふことは他の方法にては能くすべからざる方法と、吾人の到底想像することを得ざる程度とに於て、必ず人類將來の幸福を增すとならん(是れ吾人の皆知る所なるが故に)。果して然らば、苦痛といひ、苦難といひ、一つも之を無用のものといふを得ず。又如何なる微賤の地位も之を賤しきものといふを得ず。要するに來世を信ずる人に取りては人生は何時も生甲斐あるものなり。而して來世に至らば凡て我受けし不義は皆我益となり、我受けし暴虐は皆償はるべきや必せり。

(三)人類の能力廣大なるよりする論證

第三の論證は、人類の能力廣大なるよりするもの是れなり。何を以て然かいふとなれば、人類獨り此世にのみ適せるものとは思はれず。また此世以外の向上心と渴望とを有するを以てなり。即ち人類の力は發達に發達を重ねて、殆んど無限に至り得るものゝ如し。また不死の望みは殆んど凡ての人類の望にて、只此世だけにては、何れの人も充分の滿足を感ずることなきが如し。例せば、此世だけにては、到底充分に實現することを得ざる知識を渴望するもの少からず。特に科學者の如き、即ち然り。斯くの如くにして若し此の世の外に來世なるものなしとせんか、此の人類の運命は其大なる能力と釣合を失すと謂はざるべからず。且つ創造者が斯くの如き無用徒爾の大能力を人類に授くるは如何にも事實らしか

らずと思ふ人も少きにあらず。

こは、自然界に於ける類似の事實より推論すれば、一層確實となるを知るべし。たとへば、卵の中の鳥には、其卵たる限り何の用途もなき元形的の機關あり。而して、此の事實は即ち、鳥が早晩卵を出で來る樣豫期せられたるものなるを證明す。之に反して充分生長したる鳥は、吾人の見る所を以てすれば、全く其現狀に適し居るもの丶如く、それより以上の高等なる狀態を渴望する模樣もなく、又能力もなきもの丶如し。隨つて、鳥には、その現狀以上の高等狀態を預期せられざりしものと推斷するを得べし。之と同一の論法により、人類には或る高等の狀態が預期せられたるものと推斷するを得べし。是れ人類の心的性質も、亦靈的性質も共に、此の現世のみにて全然滿足するとなきものなればなり。之を要するに、動物は皆此世限りのものとして作られたるが如きも、人類に至りては此の宇宙間だけにては、到底滿足するとなきものなりとす。

之に加ふるに、死若し萬事の終點なりとせば、人生の準備時代は其活用時代と全く釣合を失するもの丶如し。人類の道德性の如きは發達に發達を重ねて、遂に死の間際にまで到るもの少からず。而して、此時初めて成熟するものとすれば、その成熟は果して何のためなりや。是れ確に、其の人の死と共に滅亡せんがためにてはあらじ。全能の創造者は、驚くべき巧妙を以て、宇宙間諸他の事物を意匠したまへり。然るに、此の創造者は、其最高受造者に與ふるに、單に無限の能力と、滿足なき渴望と、水泡に歸すべき終生の準備とを以てし、此外別に何等高等のものをも豫期せざりしといふか。何ぞさることあるべけんや。

(四)人類固有の信仰よりする論證

第四の論證は、人類の不滅を信ずる信仰よりするものなり。是れ此信仰は、古今、萬國、學不學、文野殆んど悉皆の人の中にも存するを以てなり。かの新石器時代人種が、其死者を葬る時、之と共に食物及び兵器を以てするは此の信仰の影響なり。又ソクラテスの如き、プラトンの如き哲學者も此の信仰を主張せり。是等は如何に解釋すべきや。之を經驗より起れるものとは言ふを得ず。その他、人類は不滅の欲望を有するに起因すといひ、或は夢中死者に再會せる人より始まりといふが如き說明法もあれど、共に精確のものとは謂ふべからず。夫れ欲望は確信にあらず。夢に至りては、信を置き難しといふも、尙ほ愚かなり。而も、是等は、彼處此處の或る個人が、此の信仰を抱けることの說明とはなし得べきも、古今東西一般の人類が此の信仰を抱けることの說明とはならざるなり。

果して然らば、此の不滅の信仰は直覺的のものにて、且つ人性固有のものなるがごとし。たゞし、直覺的の信仰にも、たとへば正邪の信仰の如きは國柄によりて發達の程度相同じからず。時としては、全く之を欠如せる國もあることなるが、今此の不滅の信仰にありても亦然り。そは兎に角此の信仰は直覺的のものなりといふの確證とも見るべきものあり。他なし、一塚一墓皆之を眼前に反證しつ丶あるに、

尚ほ能く之に堪へて、存立すること此の信仰の如く強きものは、他に是れあらずといふこと是れなり。敢て問ふ。此の不思議の信仰は、是れ誤謬のものながら、尚ほ神の人類に賦與したまへるものなりといふを得るかと。

以上は是れ人類不滅説に有利なる四大論證なり。而して、是等の論證は、人類の地位の無比無類なることゝ、此世に於ける賞罰の不公平なることゝ、其能力の廣大なることゝ、其固有の信仰とより立論せるものにて、其一つだも動物に當て箝まることなし。隨つて人類不滅ならば動物も亦不滅ならざるべからずてふ人口に膾炙せる反對論は成立せざるものなりとす。

(五)反對の論證

然るに人生不滅説に不利なる唯一の大論證といへば、其の靈が其肉体と密接の關係あるが如くなることと是れなり。即ち吾人の判斷し得る限りにては、人類の靈は肉体と同時に生れたるものにて、肉体が父母の疾病を遺傳する如くに靈は其父母の德性を遺傳すること往々あり。また其身体と共に發達し、身体と共に成熟するは確實のことにして、多くの場合には身体と共に漸次衰弱するもの丶如し。此に於てか二者は共に滅亡すとの推論出でたり。

されど此の推論は當らず。其理由如何といふに、曾て前にも說きたる如く、凡て、物質的のもの丶皆悉く變化するに拘らず、吾人には一つの無形のものありて終始殘存することは、吾人の記憶之を證明す。

隨つて、此の無形のものは、(即ち吾人の靈は)死といふ大變化にも堪へて、殘存すべしとは強ち無稽の考にあらず。斯くの如くにして、肉体は靈のための機械の如きものなるべく、靈は之を借りて己れを外界に表出するものなり。されば機械に若し損所あれば、其表出は自ら混亂を來すことあるべきも、之がために靈も亦損所あるものと言ふべきにあらず。たとへば、一人の技手を電信局内に閉ぢ込めたりとせんに、電信機械に損所あれば、外界との唯一交通手段たる其の發信も自ら混亂を來し、遂には停止するに至るべし。されど、之がために、技手にも亦損所ありと言ふべきにあらず。かの重病に罹れる人が、知力意思共に强健にして臨終瞑目の際にまで至ること往々あるは、之を確證するものと謂ふべし。此故に、肉体衰廢すれば心も靈も之に伴ふて衰廢すとは必ずしも斷言すべきにあらざるなり。

以上述ぶるが如くなれば、此の難問も如何ともすべからざる難問といふにはあらず。之に反して前掲の諸論證は、來世といふ觀念の頗る近眞的のものなるを感せしむ。而して此の一事は勿論次の問題に對して非常に大切なる關係あり。然り、啓示の有無は來世の有無如何に關係すといふも、決して過言にはあらず。其理由如何といふに、死若し萬事の終りならば、人生は余りに短かきを以て啓示は有り得べきこと丶しも思はれず。之に反して人類若し永遠に生存すべきものとすれば、事情全く異なるを以てなり。

(乙)啓示は近眞的のものなる事

偖(人類を不滅のものと假定すれば)啓示は、之を何れの側面より考ふるも、頗る近眞的のものなるが如し。是れ神は啓示を與ふるらしく思はるゝ方にましまし、人類また頗る啓示を受くるに適せる生物なるを以てなり。此故に吾人は、初めに此點を講究し、次で啓示に對する重もなる反對論に及ばん。

(一)神の性質よりする論證

偖神は人類の幸福を顧念したまふペルソナル、ビーイング、道德性者にましますを以て、吾人は推論すらく、啓示にして若し人類に益あるものならば(然るならん)之を人類に與へたまふは、即ち神の性質に符合することなりと。而して此の推論に加ふるに、神は慈仁なるのみならず又義にましまして、人類をも義ならしむるため、其性質を鍛錬發達せしめんと望みたまふとの事實を以てせよ。更に又之に加ふるに、人類は來世に於ても生存するものなりとの思想を以てせよ。さすれば、啓示は到底近眞的ならずとは思ふを得ざるなり。

之に加ふるに、吾人が前にも已に說きたる如く、人類は、或る程度まで、神に類似せるものなり。即ち人類は、神と等しく、ペルソナル、ビーイング、道德性者にて、且つ吾人が、科學的に知れる限りにては、神を除けば、人類は宇宙間に於ける唯一のペルソナル、ビーイング、道德性者なり。隨つて又、適切に神の子と稱し得らるべきものなり。且つ神は人類の父がその子女の幸福を顧みるが如く、人類の幸福を顧みたまふものなり。而して人類の父、若しその子女を愛すとせば、子女と何等かの交通をなさんと希ふべきは、是れ確かに近眞的のことなり。今夫れ、人類は何等かの意義に於て神の子女なりとし、また神、眞實に人類の幸福を顧み給ふものならんか、神もまたその子女と交通せんと望みたまはざらんや。

然るに、此の論證を尙ほ一層推し擴げて論ずるものは曰く、何等の交通をだもなすにあらずして、人類てふペルソナル、ビーイングを創造すといふは、神にはあるまじきことなり。たとへば觀覽することなき繪を描き聽聞することなき音樂會を催ふすといふは人類にはあるまじきことなると等し。試みに思へ。ペルソナル、ビーイングが、他のペルソナル、ビーイングと交通する力あるは、是れペルソナル、ビーイングの他と相異の點なるが如し。即ち是れ、ペルソナル、ビーイングの特色の一つなり。此故に神若しペルソナル、ビーイングを創造したりとすれば、之れと何等かの交通をなすは是れ自然のことゝ言はざるを得ずと。

さて神は人類に交通をなしたまふことを是認し、人類が尙ほ幼稚なりし時代(即ち今日吾人の稱して粗石器及び新石器といふ時代)、凡ての點に於て、尙ほ不完全のものたりし時代には、此の交通は如何なるものなりしかといふに、勿論極めて不完全なる初步的のものなりしは是れ進化論全体の思想の吾人に示す所なり。此の不完全なる初步的の交通は即ち今日吾人の稱して自然神學といふものゝ最も單純なるものなり。而して斯る太古にありては自然神學なるものゝ眞理さへ、神の啓示によらずして單に人の理性のみにて發見し得たるにはあらじ。斯くて人類の充分進步して、能く啓示を咀嚼すべく、能く精確

に之を後世に傳へ得る程度に達するや（啓示を精確に後世に傳へんとすれば筆記術の必要あり。隨つてこは比較的後世のことならざるべからず）神は或一定の啓示を垂れ給へるなるべし。而して此啓示は人類の完全に達すれば達するほど、益々完全となりたるならん。而して事情之に相違なかりしとすれば、神の啓示法は自然界に於ける其諸法式と能く相符合すといふべし。隨つて神の性質は吾人が之を判斷し得る手段を有する限りに於て人類に何等かの啓示（而して其啓示は進歩的啓示なり）をなす傾向あるものゝ如し。

(二)人類の性質よりする論證

次に吾人は人類の性質に就いて論ずべき順序となりたるが、人類は是れ恰かも啓示を受くるに適當せる性質を賦與せられたるものなり。これには何人もほとんど異議を挾むを得ず。是れ今日も、昔も、何等かの宗教ありて、行はれざりしところとてはあらざればなり。而して（吾人は歴史前のことに關しては充分の材料を有せざれば、之を除くとするも）凡て重要の宗教は、殆んど皆、眞僞は兎も角、神よりの啓示に其根據を有せざるはなく、且つ之がために、皆、世に承認せられたり。自然神學なるものは、其教旨は如何ほど高尚にもせよ、只それだけにては未だ世間一般に感化を與ふるの力なし。自然神學なるものは、主として書籍の中に存す。而して何れの國たるを問はず、人類の性質は人類をして神の啓示を探求せしめ、要求せしめ、又必要の場合には、之を想像せしむることもあり。吾人若し詳かに人類の性質如何を調査せば、斯くの如きは蓋し驚くに足らざることなりとす。

第一に、人類の心的性質は、啓示を賜はれる場合に能く之を了解し、能く之を認知し得る力あるものにて、又其道德的性質は能く之に由て利益を受くるだけの力あるものなり。是れ人類は單の機械にもあらず、又單の動物にもあらずして、行動の既知的自由を有するものなればなり。隨つて、神若し人類をしてなさしめんと欲することを之に告知し給ふことあらんか、人類は其意に之を望まば、必ず之を行ふことを得るものなり。且つ夫れ、前にも已に說きたる如く、神は人類の行爲を重んじたまふものゝ如し。此故に、神は人類を强迫せず、又其の自由を妨げず、自由に人類をして正邪共に之を行はしむる範圍に於て人類に啓示を垂れ、之を感化して正を行はしむとは是れ確かに近眞的のことなり。而して啓示によりて與へらるゝ知識が、斯くの如き感化を人類に與へ得るは、是れ否定すべからざる事實なり。是れ斯何の如き知識は眞僞如何を問はず、現に斯くの如き結果を幾百萬の人に與ふるを見るを以てなり。加之、人類は啓示を了解し、啓示に由りて利益を受くるの外、また熱心に之を欲望するものなり。我は何故此世に置かるゝや、何故自由意思を與へられたりや、何故此の自由意思を用ふべきものと定められたりや、未來なるものありとせば、そは如何なるものなるべきや。要するに、神が我を創造したまへる目的如何。凡そ此の諸疑問は是れ思慮ある人の、必ず知らんと欲するものにて、且つ之を知るとは、凡ての知識の中、最も高く、最も貴く、又最も知るの價値あるものなりとす。而して人性に於ける斯る結

果は、是れ神の生出せしめ給へるものなり。加之、神は又之を豫知し、之を豫期し給へるものならざるべからず。然り、神は自ら斯る欲望を作りて、之を人に與へ給へるものなれば、自ら之を滿足せしめ給ふべきは、是れ近眞的のことと謂はざるべからず。而して此の欲望は決して他の方法にては滿足することの無かるべし、是れ此の知識は假說上已に超人的のものにて、人の能力以上にあるものなればなり。尙ほ之に一言を加へたきことあり、他なし、吾人は此の事情を解すれば解するほど、又神は不可知的のものなるを感ずれば感ずるほど(不可知的といふ意義は、人類の科學、人類の理論を以てしては、充分に之を知るを得ずといふに止まる)神は必ず啓示によりて、斯くの如き知識を人類に與へたまふならんといふことは是れなり。

而して吾人若し前にも說きたる人類の地位無比無類なるを思ふ時は、前述の事情は一層確實となるを覺ふ。其理由他なし、吾人若し人類の創造及び完成は神の數千年間の素志なるを認むとせよ。さすれば神又た人類と何等かの交通をなさんと望み給ふものとも察するを得べし。之を要するに此の自然界全体は意匠即ち目的の證迹を顯せり。又人類は自然界に於て特別無比の地位を占有す。此故に吾人は左の如く結論するも差支なかるべし、曰く神は人類に就て何等か特別の目的を有したまふものなるべく、且つ吾人の知る所を以ていへば、神は何事か特に人類に告知すべきことを有したまふものなるべしと。此故に吾人は斷案を下していはん。人類の心的性質及び道德的性質といひ、又此の地上に於ける無比無類の地位といひ、皆是れ人類が、何等かの啓示を神より受くるを指示する有力の論證なりと。

(三)二個の反對論

是れより以下は反對の側面に就て講究せん。而して啓示に對する反對論には其重もなるもの二あり。其第一は不公平といふ論據よりするものなり。即ち曰く、啓示といへば是れ之を受けたる箇人若しくば國民に對しての偏頗を意味す。隨つて是れ他の人類に對しては不公平のことなりと。されど此の反對論は成立せず。是れ神の與へたまふ他の福利とても悉く偏頗なしといふにはあらざればなり。否、苦樂、善惡等のものは、此の世界に於て決して公平に分配せらるゝにあらず。偏頗といひ、偏愛といふは、寧ろ此世の通則なり。而して、こは必ずしも、其人の功罪如何に應じて然るにはあらざるが如し。之に加ふるに啓示は只此世限りの利益にあらず。また來世を信ずる人は皆神の公平を確信す。且つ人の審判せらるゝは、神の聖旨を知れる、若しくは知り得たる深淺如何に隨ふ、到底知ることを得ざる高尙の標準に隨ふにあらざるとも、亦彼等の確信する所なり。

第二の反對論は第一よりも更に大切のものなるが、そは神苟も啓示を與へたまふ以上は、其啓示は絕對に人を確信せしむるものたるべしといふとなり。夫れ神のなし給ふとは悉く善し。此に於てか、反對論者は主張すらく、神は人類に啓示を垂れながら、人類をして此の有無如何の判斷に惑はしむるが如き不完全の垂れかたをなし給ふ筈なし。若し然らんには、神は人類をして確信せしむるたけの證據を與ふ

る能はざりしか、又は與ふるの意なかりしかを示し、而してこは兩つながら信ずべからざるとなるを以てなりと。

此の反對論者の說は、一應尤もらしけれど、暫らく之を熟考すれば其確論にあらざるを悟るべし。是れ自然宗敎全体に就ていふも全然同樣なるを以てなり。例せば、神は人類を創造して、自由者、責任者たらしめ給ひながら、之に證據を與ふると充分ならず、ために或者は己れの自由者たり、責任者たるを信じながら、或者は之を否認し、更に進んで己れを造れる神の存在をさへ否認すといふは如何にも訝かしきとなり。而も神は斯くなし給ひるに相違なし。今啓示なるものにありても之に等し。若し神啓示なるものを與へ給ひしものとすれば、其證據は少しも疑はしき廉あらざるなり。

其他此の論點に有利なる證據は尙ほ少からず。是れ啓示以外の種々のことに於ては、人類は全く自由撰擇を許され居るにても知らるべし。たとへば人類は如何なることを思ひ、如何なることを行はゝ、道に戾らざるかを發見すること往々あるも、其都度必ずしも强ゐて其通りに思ひ、又は行はざるべからざるにあらず。神即ち啓示に關しても、此の例に據らしめんとし給へるならん。即ち人類が啓示を信ずるも、將た信せざるも、共にその自由に任かせたまふこと、猶ほ之を信せし場合に其實行と否とを人類の自由に任かせたまへるが如く、又他の場合に正邪の撰擇を人類の自由に任かせ給へるが如し。果して然らば、啓示は打ち消すべからざるほどに、其證據確實なるにあらざれば、神より下れりといふを得ずとは是れ不通の論なり。人類若し少しく丁寧に之を調査するの勞を厭はずば、必ずや之を確信するに至ること蓋し疑なし。但し其證據は必ずしも人に確信を强ゆる種類のものにてはあらず。而して其如何なる種類のものなるかは、次章に於て之を講究することとせん。

以上論ずる如くなるを以て、右二箇の反對論は共に成立せず。此故に吾人は再び前の斷案に立ち歸り、人類若し不滅ならば、啓示は種々の理由よりして頗る近眞的のことなりと謂はざるを得ず。今之を簡單に說明せんに、神若し善にましく、而して眞に人類の幸福を願みたまふものとせば、神は最も高く、最も貴く、又最も慕ふべき知識（即ち神に關する知識）を各みて之を人類に示さずといふ理由あるべからず。且つ又人類にして若し眞に自由者たり、不滅者たり、此世にありては無比無類の地位を占むるものにて、來世にありては永遠に生くべきものとせば、神は之が創造の理由につき、又其未來の運命につき、包みて之を語らず、隨つて之を知らしめずといふ理由あるべからず。此故に吾人若し神の性質と人類の性質と兩つながら之を講究せば、神の人類に啓示を知れ。此世にありては如何にその自由を用ふべきかを敎へ、來世にありては如何なる將來を迎ふべきかを告知したまへりといふは、之を全体より見て頗る近眞的のことと思はるゝなり。

第七章　此故に奇蹟的啓示は、信すべきものなる事

神よりの使節は恐らく信認狀を有するならん。

(甲)超人的休徵

此中には超人的知識の、後日に證明せられたるものと(例せば預言の如き)、超人的符合とを包含す。此の二者は共に疑ふべきものにあらず。

(乙)超自然的休徵即ち證明的奇蹟

奇蹟は『奇事にて特に神の起し給へる休徵なり。其目的は啓示を證明するにあり』

此の定義には三の要素ありて含めり、外觀と原因と目的と是れなり。

(一)奇事として―奇蹟は、經驗に反するもの丶如くなるも實は然らず。只吾人は例證とすべき適當の經驗を有せざるのみ。

(二)神の特別の所行として―奇蹟は自然界の齊一に對する干渉のみ。是れ人類が之に干渉することあると等し。

(三)体徵として　奇蹟は神の性質に撞着するものたるを示すもの一もなし。結論

神は何等かの啓示を人類に垂れたまふを得るものなり。即ち他に傳へしめんが爲に或人を撰みて之に啓示を垂れたまふことを得るものなり。是れ近眞的のことにて吾人の已に前章に於て斷定し置ける所なり。偖是等撰まれし人にして、若し其知識が神より來れるにて人より來れるにあらざるを他に示す手段を有せば、確かに好都合なるべし。斯くいへばとて、此の附屬的證據は決して啓示に必要のものと言ふにあらず。只頗る近眞的のことたりといふに止まる。言を換へていへば、神已に其使節を人類に遣はしたまふ以上は、之に信認狀を附與し給ふべきは是れ頗る近眞的のことなり。況んや、世界の歷史には、往々にして自ら神の啓示を受けたりと詐稱し、其結果人類を誤まるものもあれば、之と區別するの必要あるをや。果して然らば、神眞に啓示を垂れたまへからには、眞の使節には信認狀を附與し以て僞使節と區別したまふと見るは是れ近眞的のことならずや。

斯る理由なるを以て、此の信認狀即ち休徵は人類の揑造することを得ざる種類のものならざるべからず。隨つて超自然的にあらざるにしても、是非とも超人的のものならざるべからず。此故に、吾人は休徵を分ちて、超人的超自然的の二種となすことを得べし。而して本章に於ては、吾人この休徵が果して信用すべきものなるや否やを講究せんと欲す。吾人の斯くいふ意味は、休徵は單に可能的のものたるのみに止まらずといふにあり。神にして存在し給ふ以上は、奇蹟の可能なるは言ふを待たざることなればなり。されば吾人は敢て問ふ。奇蹟は信用すべきものなるや否や。少くとも奇蹟の行はれたりといふ

は近眞的なるや否やと。

(甲)超人的休徴

此中には、先づ後日事實に證明せらるべき超人的の知識、即ち預言の如きものをも含めり。而して吾人苟も啓示を是認する以上は、此の預言に就て何等困難を感ずることなし。若し何等かの反對論を唱ふべしとすれば、そは人類の行爲に關する預言に就てなり。即ち人類の自由に影響すべき預言に就てなり。されど此の反對論たる、是れ前に已に第二章に於て講究せし神の豫知は人類の自由に影響すてふ一層一般的の反對論の一部に過ぎず。隨つて豫言に就て、別段特種の困難あるにはあらざるなり。前にも已に言へる如く、神は何れの場合にも人類が其自由を如何に用ゆべきかを豫知したまふのみ。之に干渉を加ふるものにはあらざるなり。此故に事件なるものは、其預言されしがために起るにはあらず。却て神は、其起るべきを豫知し給へる故に預言せらるゝなり。

豫言に次では超人的符合も亦一種大切なる超人的休徴なり。所謂超人的符合とは、人の行爲、若しくは發言が、不思議にも自然的事件と相符合して、證明せらるゝをいふ。例せば、こゝに一人の豫言者ありて神より啓示を受けたりと自稱せりとせよ。而して其證據として、多くの人々を招き寄せ、一天拭ふが如く晴れたる日に、其獻ぐる犧牲を見物せしめたりとせよ。斯くて此預言者は一頭の動物を屠り、之を石の祭壇の上に置き、其下には火を焚くことをせずして、却て水を澆げりとせよ。然るに、雷雨忽然として起り電光之を擊てりとせよ。偖、世には、隨分、自然の法則に悖らずして雷雨俄に起り、電光或る特別の場處を擊つことは、是れありぬべし。而も此の豫言者の求めたる時間と、求めたる場處とに符合して此の事件起れりとせんか、さすれば、此の符合を豫知し、意匠したまへるに相違なき神が豫言者の言に證明を與へ給へるものと解せざるを得ざるべし。

更に他の言を用ゐて此の論證を再說せんに、かの電光は恰かも故意に犧牲を擊てるもの〻如し。此故に此種の出來事は、普通に稱して、自然力が合理的に作用せるものといふ。勿論、自然界の勢力は合理的の作用をなさゞること是れ其常なり。例せばかの殞石は、たとひ一尺たりとも、或は人を殺さんとし或は人を助けんとして進行するものにはあらず。人類は然らず。即ち合理的の作用をなすものなり。其行動は或る一定の目的に趨向するものにて即ち意匠に基げることを顯す。然らば、今吾人の講究中なる出來事にありては如何といふに、自然界の勢力は、茲にも亦或る目的を以て作用せるもの〻如し。此に於てか、吾人は、堅く推定す、是等諸勢力の造主、自ら前記の目的を達せんとして實際活動せるものなりと。之を要するに、此の出來事は單に超人的たるのみならず、亦是れ豫期せられたる符合なりと思はる。而して、之を科學上の見地よりいふも、全く何等の困難あることなし。是れ是等の出來事も、自然界の常道の一部に外ならざればなり。之に就ては、神は已に宇宙の初め若しくは其後に於て之が手筈を整へ給へるなるべく、神は其豫知し給へる人間の行爲と發言とを證據せしめんがために、其聖旨にかなふ

時と場處とに此の出來事を發生せしめ給ふことを得るものなり。而して神は、此の人類の行爲、若しくは發言に就ても亦之を豫知し給へるなり。勿論斯くの如き符合は、其價値常に必ずしも同一ならず。其出來事の性質が通常なるか非常なるかに從ひて大に等差あり。而して其出來事若し非常のものなりとせよ。特に、其出來事が頗る非常なるか、其符合が頗る著しとせよ。斯る場合には、其出來事を普通に稱して奇蹟といふ。而して其價値は多かるべきも、其符合の機會は偶然なるが故に常に必ずしも多からず。

(乙)超自然的休徵

次に吾人の論ぜんとするものは超自然的休徵即ち嚴正の意義に於ける證明的奇蹟なり。而して吾人は之に定義を下して曰く、奇蹟は奇事にて、特に神の起し給へる休徵なり。其目的は即ち啓示を證明せんとするにありと。此の定義は勿論聖書に記載せられたる奇蹟に適する樣作れるものにて、之に三の要素あり。第一に此の定義は奇蹟を其外觀上より記述せるものなり。曰く奇蹟は奇事なりと。其意味は奇蹟は珍奇非常の事件にて、吾人の理解すること能はざる、隨つて又注意を惹くもの也といふにあり。第二に此の定義は、奇蹟の原因に就て記述せり。曰く、奇蹟は神の特に起し給へるものなりと。其意味は、神其自然界に於ける尋常行爲と異なる特種の行爲によりて起し給へるものなりといふにあり。第三に、此の定義は、奇蹟の目的に就て記述せり。曰く、奇蹟は神の起し給へる奇事にて其目的は啓示を證明するにありと。

偖この第一の要素は、舊約書には、異事といふ言を用ゐて記述せり。また第二の要素は、神の强き手又は伸べたる臂等の句を用ゐて、第三の要素は、休徵といふ語を用ゐて之を記述せり。而して、此の凡ての語は往々にして同時に用ゐられ居ることもあり。(例せば申六〇二十二、七〇十九、十一〇二の如き)更に新約に用ゐられたる言は、異事、異能、休徵の三なるが、是れ亦恰も前記の三要素と相符合するなり。されど新約には單に之を呼んで異事といへる場合なし(舊約にても甚だ稀なり)。されど單に休徵と稱せられ、又は單に異能と稱せられし場合は是れあり。

而して此に注意し置かざるべからざることは、此の三要素は故なくして恣に撰べるものにはあらずといふことなり。是れ蓋し他の出來事とても單に事實としてのみに止まらず、又原因と目的との二點より觀察するを得べく、又觀察せざるべからざるものなればなり。今、此の觀察法の頗る大切なるものたるを示すため、近代史の中の一つの出來事を講究せん。而して之がために撰べる例は有名なるセニ山墜道のこと是れなり。

偖こゝに人ありて此の墜道のことを單に奇事として傳聞し、其原因其目的に就ては全く之を聞き漏らせりと假定せよ。即ち、此の人は、首尾同大なる一直洞の長さ七哩以上に及べるもの、一山脈の下に開通せりと傳聞したりとせよ。又此の直洞は、最初其西端の穴よりして、始まりしものにて、年を經るまゝに、此の兩端の穴が中央に於て、恰も會合せるなりと傳聞したりとせよ。さすれば、此の人は言下に

口を開いていはん。是れ信ずべからざる出來事なり。是れ此の洞穴は凡ての自然的洞穴と全く相同じからざる現象を呈すればなりと。

されど、此際、第二の點なる其原因を擧示したりとせよ。即ち此の洞穴は自然的洞穴にあらで、人類のなせる工なりと稱せられしとせよ。さすれば、其人の豫て抱ける疑問は皆消え失すべきも、之と同時に又、必ず新らしき疑問を起すならん。是れ、斯くの如き洞穴を穿たんとすれば、多數の人々數年の間協力して之に從事せざるを得ず、而も人類固有の性質より推斷するに、徒らに斯く多數の人々が山腹に穴を穿つ理由なく、是れには必ず商業上の目的、若しくは有利の目的なかるべからざればなり。隨つて、此の隧道は只第二點だけにては依然信ずべからざる出來事なりとす。

然るに此際第三の點なる目的を擧示せられたりとせよ。曰く此の洞穴は徒らに山腹を貫ぬける無用の穴にはあらず。特別の目的のために貫ぬかれたる穴にて、即ち鐵道の隧道なりと。此說明一たび出づれば、其信否に關する諸困難は皆消え失すべし。勿論隧道が實際に開通したるを信ずると否とは、吾人の有する證據如何に關するものなり。されど、此の隧道開通の原因と稱せらるゝもの、又目的と稱せらるゝものを講究する時は、之に關する疑の念は悉く晴れ渡るべし。

偖、右と同一の法式は、證明的奇蹟に關しても、之を適用すべきものと思はる。即ち單に之を奇事と看做すべきものにあらず（前に言ひし如く新約の記者は單に之を奇事と看做せしことあらず）、宜しく適の切原因により、充分の目的のために起りたる奇事として之を看做さゞるべからず。奇事をして信を置くに足るものたらしむるものは、實に此の原因と目的との二要素なり。而して此の二要素は、双方とも同樣に大切なり。是れ充分の目的を欠きたる奇蹟は、道德上信用すべからざるものたると同じく、充分の原因を欠きたる奇蹟は、心的に信用すべからざるものなればなり。以下吾人は是等の諸點を順次に講究せん。

（一）奇事としての奇蹟

證明的奇蹟の第一要素は、奇事といふ要素是れなり。蓋し奇蹟なるものは、吾人の經驗に反したる出來事の觀あり。即ち吾人が之と相似たる幾多の出來事を經驗し、それに基きて豫期せる所とは全く相同じからざる出來事なり。例せば、或時三人の者、火爐の中に投ぜられしに、彼等は燒死せずして其中を徘徊し、數分の後には活きて無事に出で來れりとの話ありと假定せよ。

斯くの如き奇事は、是れ吾人の經驗に反せるものなり。隨つて其の甚だ近眞的ならざるは言ふを待たず。されど證據の如何をも問はず、事は近眞的ならざれば即ち皆信ずべからざるものなりと謂ふべきか。ヒユームの論法の此點に存するは、是れ人の能く知る所なり。同人曰く、事件の實否と人の傳說とを問はず、凡そ事の眞僞如何を判斷せんとすれば、經驗に由るの外はあらずと。又曰く、奇蹟は經驗上眞實と認め難く、證據は經驗上誤謬と認め得べき場合には、其奇蹟は寧ろ眞といはんよりも、僞といふ

を當れりとすと。

されど此の論法にして若し誤謬なきものとせば、經驗に反したる凡ての出來事に當て箝まらざるべからず。然るに經驗に反せし出來事は、必ずしも信を置くべからざるにあらず。加之斯くの如き出來事は、千を以て數ふるほど多し。今は只一つの例を擧げん。夫れ人類の聲が如何ほどの距離まで明かに到達すべきものかといふに就ては、凡ての人皆多少の經驗めりで而して此の距離數町の外に出でずとは、近年まで皆人の認めたりし所なり。然るに此に人ありて、英國の一端より他の一端まで通話するを待て初めと聞けりとせよ。此の人、即ちそは全く經驗に反せるとなりと返答したりとも無理ならず。されど、此人尙ほ之に加へて、此故に是れ信ずべからざるとなりといふをも無理ならずと認むべきか。斷じて然らず。此の道理よりして考ふる時は、ヒユームの論法には何等かの欠陷あるものなると明了なり。而して、こは調査により容易に發見するを得べし。即ちヒユームの論法の欠陷は、奇蹟を只奇事として觀察し、其所謂る原因を不問に付したるより起れり。されど吾人は、原因を不問に付するの權利なく、又實驗之を不問に付するともなし。何人にもせよ、初めて或る奇事に就て傳聞したる際、只單に之を既往の經驗と比較し、而して後ち之に斷案を下すといふものはあらず。若し然かせば、ヒユームの想像の如く、奇事は何時も必ず僞たらざるとなかるべし。されど、世には斯くの如き早計のことをなすものなく、人皆先づ其起れりと稱せらるゝ奇事は如何にして起りしか、如何なる事情の下に起りしかを探究す。是れ蓋し當然の順序なり。其理由如何といふに、何等かの原因ありて活動せりと稱せられたりとも、自ら此の原因の何物たるを知らずば、恰かも之と比較すべき經驗を有するとなければなり。而して、此の出來事に有利の證據は、蓋し此點に存す。然るを其人若し之を信ぜずとすれば、そは己れの經驗に反するが故に之を信ぜざるにあらず。却て其の所謂原因と稱するものゝ存在を認めざるか、或は亦其の原因より其結果を生ぜしを認めざるためなるのみ。

此點は、前の例に當て箝めて考ふれば大いに明了なるを得べし。即ちかの人、初めて、英國の一端と一端とにある甲乙兩者通話のことを傳聞せりとせんに、苟も理性を具へし人ならば、之を大早計にも信ずべからざる話なりとはいはず、却て其の原因の探究に着手すべし。其時、此人は、英國の端より端まで電線の張り渡されて、之に電話機と稱する機械を附せられたりと說示せらるゝならん。偖、此の場合に此の人の心には、斯くの如き機械の能力効果につき、或は深き疑念を生ずべし。されど、只一つ明了なるとは、此の事件の如きは其の幾多の經驗中にも當て箝まるものなき珍事なりといふこと是れなり。而して其人が電線のことを擧示せられたる時、其之を信ずると否とを問はず、即ち是れ此事件が其人の經驗圈內より取り去られし時にてあるなり。

果して然らば、以上は即ちヒユームの論法に對する說明といふべし。奇事若し單に經驗に反せし奇事とのみ看做さるゝ間は、誰しもこは眞實にあらじと思はざるは無かるべし。されど吾人若し之を發生せし

もの丶何者なるかを探究し、其特別原因と稱せらる丶もの丶効力は、吾人の知らざるものたるを發見せば、もはやヒユームの論法は當て箝まらず。吾人は只比較すべき同種類の經驗を有せざるものなるのみ。

今證明的奇蹟に就ても、亦全く之に等し。證明的奇蹟は、之を奇事として見る時は、全く經驗に反するものなるに似たり。されど、證明的奇蹟には特別の原因あり、特に神の發生せしめたまへるものなりと稱せらる。言を換へていへば、神その自然界に於ける尋常行動と異なる特種の行動により發生せしめ給へるものと稱せらる。而も吾人は此の原因の効力如何に就ては、全く何等の經驗あるにあらず。吾人は勿論、其原因の存在を否認し、また其効果を疑ふを得るも、經驗に反すとの論法は成立せざるなり。證明的の奇事が事實と反せりと見ゆるは、之を疑ふべき理由とならず。然れども他の奇事とせられしものを疑ふの理由となることあらん。その理由如何といふ、に證明的奇蹟には特別の原因ありて、其特性の解釋となすを得と稱せらるればなり。果して然らば、吾人は移りて、此の特別の原因は實際存在するや否やを調査せざるべからず。換言すれば、奇蹟の第二要素を調査せざるべからず。要するに、吾人の前段述べ來れる所は、奇蹟若し特に神の發生せしめ給へるものなりといふと信ずべしとせば、又奇事として信ずべきものなりといふに止まる。

(二)神の特別の所行としての奇蹟

偖、神若し特別の行動をなし給はゞ、自ら自然界の齊一を犯すべきを以て、茲に種々の大困難を生ずと思へる人少からず。されど後にも說かんとするが如く、神の行動の之を犯すは、人の行動の之を犯すと全く相同じ。共に自然界の法則に悖るといふにはあらず。只兩者とも、自然が自ら發生せしむることを能はざりし結果を發生し得たりといふに止まる。

之を人類の行爲に就ていへば、大に明かなるを得べし。例せば、一脚の卓上に一個の鐵製搖錘を有する時計ありて、精確の時間を報じ居るとせよ。然るに、突然、何人も之に觸れしものなきに、急速の進歩をなし、また一時間ばかりにして、又舊の速力に復したりとせよ。全く此の原因を知らざる人は之を見て、是れ奇事なりといふならん。否更に進みて是れ信ずべからざることなりといふかも知るべからず。是れ(時計の構造に欠點なきものと假定すれば)運動律若しくは重力に何等かの變更ありたるかとも思はるればなり。而も人間が斯の如き奇事を容易く發生し得るものなるは、吾人のよく知るところなり。即ち只臺の下に磁石を置けば足ることなり。こゝに一言し置くべきは、此の擾亂の原因は實は磁石にはあらずといふことなり。磁石は何時も法則の通りに作用するものなればなり。さりとて、又此の磁石を握れる手にもあらず。其の原因は物質に及ぼせる人心の活動是れなり。人心の活動は人の腦髓の中に起り、或る神經力に特別の方向を與へ、是れにより人は其手を動かし、又磁石を握るに至る。果して然らば、此の奇事は自然的手段を超自然的に應用して起れるものといふを得べし。是れ、磁石は勿

論自然的手段なり。而も自然は自ら前記の如くに之を用ふることなきものなればなり。

偖、證明的奇蹟も亦、粗ぼ右と同じ有樣（只吾人は之を知らざれど）にて、物質に及ぼせる神の聖旨の活動により發生するものと稱せらる。換言すれば、自然的手段を超自然的に應用するより生ずるもの也。果して然らば、此の項の下にありては、奇蹟の信ずべきものたるは之を是認せざるべからず。是れ神には、此事に就て作用するの力あること、是れ吾人の知る所なり。加之神は、曾て一たび、宇宙起源の際、之を用ゐ給へることありて、今も亦適當と認め給はゞ再び之を用ゐ給ふを得ること、是れ吾人の知る所なればなり。げに、天地の創造は、諸の奇蹟の中の最大奇蹟なり。已に此の奇蹟あり、他の奇蹟の如きは、一として信ずべきものにあらざるはなし。且つ夫れ、人類は僅かに部分的に自然界の法則を知るものなるも、神は完全に之を知りたまふ。然るに人類は、自然を支配する力も乏しく、自然法の知識も限りあるものなるに、尙ほ能く自然の常道より奇事を發生せしめ、而も其法則に悖ることなきを得。然るを況んや、自然を支配する力も完全にして、又自然法の知識も完全なる神に於てをや。吾人若し之を否認せば、人類には認めたる力を神には否認するに等しからん。

或は之に反對するものありて謂はん。人類は肉体を有すればこそ、能く之をなし得るなれと。之が答は決して難からず。曰く、物質に及ぼす人心の活動は、腦髓の中に起るものなり。されば、肉体は此の原因結果の鎖鎖の一の鎖に過ぎず。故に肉体は神と人との比較を妨ぐることなし。勿論、吾人は、神の如何樣に其の心を物質に及ぼし給ふかを知ること能はず。されど吾人は人類が如何樣にこれを及ぼすかをも知ること能はざるにあらずや。困難をいへば、双方とも同樣の大困難を有するなり。

之に由て是を觀れば、神は自然法に悖らざれば、證明的奇蹟を行ふ能はずといふを得ざるは明了なり。或は個々の奇蹟に關しては、此點に異議を挾む人あるべきも、吾人若し己れが無識をも見込む時は、右の斷案は敢て不當といふべからず。例せば、火爐の中に投げ込まれしといふ三人の話を一考せよ。是れ或は熱の法則に悖れるものと見るを得べし。斯くの如き境遇にありては、熱の法則は必ず人体を燒き盡くすものなればなり。されど、吾人は生命を全うせんとすれば、身体を或一定の熱度以下に保たざるべからざるを是認したりとも、こは爐中にては不可能のことなりしとは斷言するを得ず。是れ極度の熱と極度の寒とは其間頗る近きこと、赤熱の坩鍋中にて水銀を凍結せしむる有名の實驗によりて明かなればなり。若し之を單の奇事として考ふる時は、爐中の三人の話の不思議なるが如くに不思議のことなり。隨つて無識の人は、恐らく双方等しく信ずべからざることなりとて、之を一嘘に付するならん、勿論人類の生せし奇事にありては、特別の原因ありて之に働けること吾人の知る所なり。また吾人は實驗的に幾度にても、之を繰り返へすを得るものなり。されど吾人奇蹟を見て單にその特別原因を認むることなきがために、此の奇蹟は自然界の法則に悖りといふべき理由あらざるなり。

更に別の例を擧げて言はんに、或時數個のパン不思議に增殖せられて、能く數千人を養ふに至りしこと

ありしと想像せよ。吾人は此の塩合をも自然法に悖りしものと言ひ得るか。否、斷じて言ふを得ず。是れパンは炭素窒素等の元素より成りたるものにて、是等の元素は到る處に乏しからざればなり。而して吾人の知れる所にては、之を合せてパンとなすの途只一つあり。即ち活ける植物の力を借るの外なきとながら、さりとてこは唯一の方法なりとは斷言するを得ず。げにパンをはじめとして今後化學實驗室内に於て製出せらるべき有機的物質には、何等信を置くべからざる不審の點とては是れあらず。勿論、前記の諸例解は、未だ以て神が如何に其奇蹟を行ひ給へるかを示すに足らず。但し吾人をして神若し自然法に悖らざらんとすれば、奇蹟をも行ふを得ざりしなりとは言ふを得ざらしむ。以上述ぶるが如くなれば、證明的奇蹟とて決して神が尋常事件を發生せしめ給ふ行動と異なる種類の行動を以てして發生せしめ給ふにはあらず。證明的奇蹟も、尋常の事件も、双方等しく自然法に從ひて起るものにて、又双方とも神の物質に及ぼし給ふ其聖旨の作用に起因するものなればなり。只尋常の事件にありては、其の發生以前に無數の自然的鏈鎖ありて其中間の媒介となり、證明的奇蹟にありては、此の鏈鎖の數比較的少きを異なりとするのみ。此理を以て見る時は、凡ての事件、皆或る意味に於ては、自然的と超自然的とを兼ねたるものといふべし。即ち其の發生の法式よりいへば自然的なり。又之を發生せしめ給ふ起源的原因よりいへば超自然的なり。此故に、自然的のもの丶原因も之を其極度まで溯源すれば、必ず超自然的ならがるはなし。

而して吾人思ふに、必ずしも溯源の勞を取る必要なかるべし。是れ自然界に於ける神の内住といふ說は、頗る道理ある說なればなり。所謂自然界に於ける神の内住とは、是れ普通の稱なれど、實は神に於ける自然界の内住といはゞ、恐らく一層事實に近かるべし(徒十七〇二十八、西一〇十七)。而して其意味は、凡て自然的勢力は、皆、神の聖旨の現在的、直接的活動によるといふにあり。而して、斯くの如きは、舊約の記者等の取りたる見解なりしが如し。是れ舊約にありては雲、霧、降雨、草木の生長に至るまで、一切の自然的現象を神に歸すること、恰も奇蹟に於けると相等しければなり(例せば、詩百四〇、百四十七〇の如き)。果して然らば、舊約の記者等は、自然的のものと超自然的のものとの間に明確の區別を立てず、等しく之を神の所作として認めたりしなり。換言すれば、神の自然界に於ける内住は、近世の科學は近頃漸く之を認め初めしもの丶如くなるも、猶太人は本能的に之を承知したりしもの丶如し。而して此の内住說若し誤謬なきものならば、奇蹟に關する困難を減殺すること少からずと謂ふべし。若し然らんには、自然界に對する干渉なるもの更になく、神は終始自然界に活動したまふものにて、只奇蹟の際には其活動稍尋常の事件に於けると異なるのみなればなり。

何れにしても、神若し定式の如く、其自然界を支配する力を使用せんと欲し給ふこと、信ずべしとせんか、また證明的奇蹟の發生する順序に就ても、何等疑ふべき所なし。是れ、自然力は、何れにしても、神の奴僕たるに止まり、決して其主人公にてはあらざればなり。此に於てか、吾人は奇蹟の第三要素を論

ずべき順序となれり。是れ神が何等かの行動をなさんと欲し給ふか否かは、勿論此の行動の目的如何に關係するものなるを以てなり。

(三)休徵としての奇蹟

偖證明的奇蹟の目的は啓示を證明する休徵たるにあり。而して神の啓示をなし給ふべきは、前にも說きし如く、頗る近眞的のことなるが故に、吾人の今研究すべきことは、此の啓示を證明するの手段として、證明的奇蹟は適當か否かといふこと是れなり。而して證明的奇蹟は蓋し之が最も適當の手段なるものゝ如し。是れ證明的奇蹟は、人をして啓示に注意せしむるものなると共に、又其超人的のものなるを確信せしむるものなればなり。而して此の二點は恰も是れ必要の點なり。且つ其物質的世界に於ける非尋常の性質は、心界に於ける啓示の非尋常なる性質と、能く相照應するものゝ如し。故に此の啓示は、又一種の心的奇蹟と稱せらる。

而も、之に就て反對論者は尙ほ主張していはん。神の性質は、自然界に顯れし點を以て見れば、是れ不變のものなり。此故に、神が、時々自然的事件に關して、特別の行動をなし給ふべしとは、頗る近眞的ならず。而して、自然界を研究すれば研究する程、愈々此の反對說には理由あるを覺ふ。是れ暴風雨の如き、地震の如き、其他幾千の天災を見るに、若し之を自然の成行に放任せず、却て少し〳〵之に干涉せば大いに人類を益すべしと思はるゝに、未た曾て干涉の起りしことなければなりと。更に此の反對論を、

他の言もていはんに、奇蹟は神の知慧、若しくは神の力の欠點を示す。何となれば、神若し全知ならば、事の發生を豫知したるべく、又若し全能ならば、之がために準備したるべき筈なればなり。此故に其自然に對しての干涉は、即ち前過を改むるとも看做すべきものなりとす。

此の反對論は、奇蹟に對する反對論中、最も重大のものに相違なし。されど、又決して、如何ともすべからざるものと言ふにはあらず。第一、こは吾人が神の性質を識らざるに座するもの多し。たとひ之を識れりとも、只部分的たるに止まるためなり。試みに思へ、吾人にして若し只自己流の判斷を用ゐていふ時は、今日の如き世界を以て神の創造なりとは、言ふを得ざるべし。惡の存在といひ、殊に又善人が惡人のために苦痛を受くること〳〵いひ、是れ皆如何にも相應しからぬことなり。而も斯くの如きは、日々の常事なり。知るべし、吾人は、只自己流の判斷力のみにては、神の常道を以てする世界統治法をさへ解する能はざるものなることを。然るを況んや、神が特別の境遇の下にありては此の常道以外のことをなし給ふべきを解するの力をや。之に加ふるに吾人の記臆すべきは、神は自由意思者にましまし同一境遇の下にありてすら、必ずしも同一行動をなし給ふものにはあらずといふことなり。(第一章を見よ)てさすれば、別の境遇の下にありて、別の行動をなし給ふは、怪しむべきことにあらず。且つ夫れ神の造りたまへる世界の一部は自由のものなるが故に(例せば、人類の如きは然り)、別の境遇の起るべきは言ふを待たざるなり。

之に加ふるに論者の反對說は、是れ吾人も知れる唯一のペルソナル、ビーイングたる人類(神と人類とを除けば其他にペルソナル、ビーイングなし)との比較に對する唯一の反對說なり。成程、人類にありては、同一の行動をなすこと是れ其常なり。而も、尙ほ特別の事情に際し、特別の理由を有する時は、特別の行動をなすことあるべく、否現に之をなすこと往々あり。然るを何故神は獨り同一の行動をなさゝるべからざるか。之を要するに、人類にありて貴重すべき不變性といへば獨り、道德的の不變性あるのみ。即ち常に正を行ひて變らざること是れなり。神の不變性なるものも、吾人の知れる限りにては只此種のものゝみなるやも計り難し。されど神は之がため特別の目的を遂せんとする場合にも、特別の行動をなすを得ざるものとなるが如きことは是れあらず。

第二に、神は特別の場合には、特別の行動をなし給ふべき筈のものと思はる。是れ、奇蹟の直接の結果は、自然界の常道を以てしても得らるべきかなれど、奇蹟の重もなる目的は自然界の常道にては得らるべからざればなり。例せば、病人を癒すに、之を奇蹟的に療さずとも、自然的に療すことを得べし。されど若し之を自然的に療さば、療者が神より派遣せられしものなりとの證據ともならず、又神の名に於て敎をなすの證據ともならざるべし。要するに其使節は信認狀なき使節となり了るべし。而して斯くの如きは、吾人の前にも言ひし如く、事實あり得べからざることなり。

第三に、證明的奇蹟は自然界の常道の如くに、神の不變性を示すことなけれども、さりとて神の不變性と撞着するものにもあらず。蓋し證明的奇蹟は神の後日の思ひ付きには非ずして、却て世の初めよりの計畫なるを以てなり。神は、世界歷史の或る時期に至りなば、何々の事件起るべきを豫知したまひ、其聖旨を實行するためには、之に特殊の取扱を與ふるを可とすと認め給へりとせよ。隨つて神は、是等の事件の起れる時、常規以外の行動をなさんと決心し給へりとせよ。さすれば、其常規以外の行動は、神に取りて撞着にもあらず、又變化にてもあらざるなり。

第四に、證明的奇蹟の示す所にして自然界の常道の示さゞる一種の屬性、神に具はれるかも知るべからず。例せば此の證明的奇蹟を與へたまふ其寬大なる性質の如き是れなり。夫れ啓示の一つの目的は、神眞に人類の幸福を顧りみ、人類の情愛をしたひたまふことを、人をして確信せしむるにありといふも差支なかるべし。而して、斯くの如き啓示を證明すとて、神は己れを顯したまふにも寬大以て人類の所爲に摸し、其行爲も自然界の常道に由るよりは寧ろ人類の行爲に倣ひ、斯くして人類に一層容易く己れを理解せしめ給ふと想像せば如何。是れ決して不當の想像にはあらざるなり。

第五に吾人の記臆せざるべからざるは、此の自然界全体は、(前にも言ひし如く)、或る目的に達する一箇の手段に過ぎざるが如くなること、是れなり。而して、此の目的とは、即ち人類の道德的訓練是れなり。若し然らんか、此の目的を達するため、(此の目的は、即ち又、自然界存在の目的に外ならず)神は若し適當と思ひ給はゞ自然界にも干涉し、其事件の徑路をも變更し給ふべきは、是れ勿論のことならず

や。故に奇蹟は、科學的には、近眞的ならずとも、其道德的近眞は、之と相平均すといふべし。道德的近眞とは、啓示を證明すといふが如き或る道德的目的を達するため、奇蹟は適當せるものなるをいふ。此の故に、吾人は只一句を以て能く反對論者に答ふるを得べし、曰く、神は全知全能なると共に又全善なり、而して神の知慧と力とは、或は奇蹟を必要とせざりしにもせよ、其善は即ち恐らく神をして奇蹟を用ゐしめ給へるなりと。

今や吾人は、此の論法を結ぶべき順序となれり。初めに吾人は、證明的奇蹟なるもの若し、啓示を證明する休徵として起れりといふこと、信ずべしとせば、奇事としても、將た又神の特別の所作としても、共に信ずべきものなるを論述せり。次で、吾人は、又、前に已に是認せる、神は啓示をなし得るものなりとの假定に基き、神は啓示の眞理を證明する一手段として、證明的奇蹟を用ゐ給へるにて、こは吾人の知れる限りにては、神の性質と撞着せず、隨つて少しも訝かしきことにあらざるを論述せり。此に於てか、吾人は、全体上より、斷案を下して曰く、奇蹟的啓示は、確かに是れ信ずべきことなりと。而して奇蹟的啓示の、實際是れありしや否やは、乞ふ之を後の諸章に於て、論究せん。

第八章　其創造談は神の啓示に由れるものなりし事

(甲)創造の日

外觀的諸困難。されど、日といふ言は、譬喩語と解し、神を以て見れば、創造の年數の如きは、いふに足らざるものなるを示すと看做せば、此の諸困難は消え去るべし。此の見解を取るに就ての附加的理由。

(乙)創造の原理

(一)其純粹なる一神主義＝是れ勿論眞實なり。

(二)其漸進的發達＝是れ勿論眞實なり。

(三)發達の法式＝其各段落は、一々、神の創造力に起因す。是れ恐らくは眞實ならん。

(丙)創造の順序

(一)宇宙の起源

(二)地球太古の狀態

(三)第一日＝光の創造
(四)第二日＝穹蒼
(五)第三日（乾ける土
(六)　　　草木）
(七)第四日＝太陽と太陰
(八)第五日＝魚鳥
(九)第六日（陸上動物
(十)　　　人）

(丁)結論

此の記事の精確なるは、即ち神の啓示に由れるものなるを示す。

吾人は、第一編に於て、神の存在を論定し、また神は人類に對して奇蹟的啓示を垂れたまふといふとも、信ずべきことなるを論定せり。由て、吾人は、次に移りて猶太教を論せんとす。而して此の猶太教も亦、基督教と同樣自ら此の奇蹟的啓示なりと主張する宗教なり。

之が辯護上、吾人の第一に先づ講究すべき論證は、即ち創世記第一章に記載せられたるもの、是れなり。而して之を辯護する人の說に曰く、此の創造談著作の年代及び著者の如何を問はず、之を神の啓示に由れるものとせざるべからず。是れ此の創造談は、實質上、精確の叙述にして、神の啓示に由るにあらざれば其當時到底之を知るを得ざりしものなればなりと。

されば、吾人の今調査すべきことは、他なし、之を今日吾人が、地質學其他の科學より得たる眞理に比すれば、此の創造談それに近きか、將た、それ等の科學に通せざる人の臆測說それに近きかといふこと是れなり。偖、斯くの如き臆測說の遙かに眞理に遠きは是れ言ふを待たざることにして、之が證據は、幸にして、昔のバビロニヤ、印度、波斯その他諸國の創造談に、夥しく保存せられたり。是等諸の創造談は、其創世記と符合せる箇所を除けば、揃ひも揃ひて、全然誤謬なりといふも、過言にあらざるべく、獨り創世記に至りては、勿論他の創造談にあるが如き背理奇怪の分子あることなし。

吾人苟も啓示なるものを是認する以上は、何れかの世界創造談に太古人類に垂れたる啓示あること、其啓示は猶太人に由りて精確に保存せられたるも、他の國に於ては曲解せられたる所のみ保存せられしことを疑ふべからず。或は思ふ、猶太人の啓示を受けたるは、稍、後ちの時代のことなり。而して當時彼等は、已に特種の創造談を有したりしが、其中僅少の精確なる部分は自ら此の啓示と相合し、以て完全の創造談を成せりと。何れにしても天体動物等の如きものを禮拜するは、是れ世界一般の風習なるを思へば、第一の啓示として、是等の物体皆悉く獨一無上の神の創造なるを說示するは、蓋し題目撰擇の最も當を得たるものと謂ふべし。

(甲)創造の日

第一に、吾人は稍丁寧に創造の日の意義を講究せざるべからず。偖、日なる言は他書に於けると同樣、

聖書に於ても、時期の意義にて用ゐられしものとすれば、其意義只二つあるのみ。即ち廿四時間の一時期若しくは十二時間の一時期是れなり。勿論此の言は、審判の日とか主の日とかいふが如き、極めて漠然不定の意義に用ゐらるゝことも往々あり。されど、斯くの如き場合には期間といふの意なし。隨つて、之を審判の時とか主の時とか言ひ換ふるも差支なかるべし。何れにしても日といふ言だけにては長き時間を意味するに用ゐられしとなし。然るに他の一方に於て考ふべきは、太陽の作られしは、第四日なれば、之に先だちて、普通の日のあるべき筈なしといふことなり。而して、著者は、明かに、此理を承知し居たるものに相違なし。然り、著者は之を其文意の中に含めたり。是れ著者は、時を分ちて日と年となすことを明かに太陽に歸したればなり。

果して然らば、吾人は之を如何樣に調和すべきや。曰く、是が滿足の解決は只一つあるのみ。即ち日なる言を、神に關する譬喩語と解すること、是れなり。此故に、神の日といふ語を解釋すること、猶ほ神の目、神の手といふ語を解釋するが如くにせざるべからず。而して、此の解釋は、以て諸の困難を排除するに足る。所謂、譬喩語とは、之を嚴格にいへば、眞實ならざる語をいふ。即ち眞理を代表して、人をして、或る程度まで之を解せしめ得る言なり。たとへば、神その右の手を以て勝利を得給へりといふ句ありとせんに、此の意義は勿論、神その勝利を得給ふに他人の助にもよらず、兵器の力にもよらず、只自家固有の力にて之を得たりといふにあり。斯くの如くにして得たる勝利は、人間にありても、之を其右の手によりて得たりと言ひて差支なし。此の事情なるを以て、神の行爲は其性質の極めて相似たる人類の行爲の形容を借りて代表せらるゝなり。之と同一の原則によりて解釋すべき句は、主の目は義人の上に止り其耳は義人の祈禱に傾く（彼前三〇一、二）等の句を初めとして、其他聖書の中に散見する數百の句是れなり。吾人は、別に、此の手、目、耳等の言に、新しき意義を付することをせず。只、斯くの如き語を神に應用する時は、人類との類似より得來れる記述に過ぎざれば、隨つて之を強ゐて文字的に解釋すべからずといふのみ。

而して今の場合に於ても、日なる言は之れと同一の意義に解すること、蓋し最も然るべしと思はる。是れ譬喩語は、此の創造談の始終に亘りて、其數夥しければなり。即ち最初、光を呼び出し給へる神の命令語より、終りの休息に至るまで、其用語は皆嚴正の意義に於ては眞實にあらず、只人類の解し易き樣神に關する眞理を代表したるなりとは、是れ何人も是認せざるべからざる所なり。此故に、吾人は、六日を以て、文字的の六日と解すべきにあらざること、神が文字的に語り、文字的に休息せりと解すべきにあらざると等し。然らば、吾人は、如何に之を解すべきかといふに、他なし。神は、六日といはゞ最も人類に分かり易き時期間に、萬物を創造し給へりといふこと是れなり。即ち宇宙は、廣大なりとはいふものゝ、神に取りては、人類の一週間分ぐらゐの所作に過ぎずと認むべきものなりしなり。要するに創造の時期は、長かりしとはいふものゝ、之を神との關係よりいへば、全く言ふに足らざるものにて、其各

段落は、即ち神を以て見れば單の一日と同樣なりしなり。

之に加ふるに、若し必要とあらば、吾人は別に三點を擧げて前記の說の辯護となすを得べし。第一此の說は、科學と創造談との調和のために設けられし純然たる近代の學說にはあらずといふことなり。即ち希臘生れの猶太人ファイロは、紀元前二十年に生れ、勿論、地質學を知る筈なきに、創世記の日を、或は文字的に解釋し、或は一定の時期を代表すと解釋するもの、愚を笑へることあり。

第二にイスラエル人は、人類の計時法を神に應用せる場合には、之を文字的に解すべきにあらざるを能く會得し居たるなり。されば神の眼には、千年も昨日の如しといふ語もあり（詩九十〇四）。又他のところには、『汝は肉眼を有たまふや汝の觀たまふ所は人の觀るがごとくなるや。なんぢの日は人間の日のごとく汝の年は人の日のごとくなるや』とも記されたり（百十〇四、五）。玆に日といひ年といふ語を神に應用するは、目といひ、見るといふ語を神に應用すると全く相おなじく、而して目及び見るの共に譬喩語に過ぎざること、皆人の認むる所なり。更に第四誡の エホバ六日の間天と地と海とその中にある一切のものを作りて云々といふも、斷じて此見解に反するものにはあらず。是れ此中に記載せられたるは獨り日にのみ限らず、働くといひ休むといふ語も亦此中に記載せられたれはなり。而して神の働は人の働と異にして、神の休の人の休と異なるは、何人も之を拒まず。然るを、其働の日が、獨り人類の働の日と異ならざることあらんや。

第三に此日といふ語、若し文字的に解すべきものとすれば、故らに七といふ數を撰びて、八若しくは其以上の數を撰ばざりし理由明白ならず。試みに思へ、造物主若し只廿四時間の一日だけ休息し給へるものとすれば、其後は何をなし給へりや。若し其後も尙ほ引續きて休息し給へるものとすれば、十二日と、いふ數を撰びて、神初めの六日は働き、後の六日は休息し給へりといふも、亦可ならずや。之に反して、此日といふ語は無限の時期を代表するものと解せんか、さすれば七といふ語を撰べる理由、いと見易し。是れ即ち吾人は、尙ほ其第七日、即ち第七期にあるものにて（記臆せよ此の第七日には、終り即ち夕を記載せざることを）造物主は今日も尙ほ休息中なればなり。而して、こは勿論、間違なき事實なり。是れ人類の出現より以後は、未だ曾て特に神の創造的行爲を要するほどの事件起りしことなければなり。果して然らば創造の時に關して、創世記と地質學との間に、多少とも矛盾あるべき道理なし。是れ兩者の敎は、互に其種類を異にするものなればなり。即ち地質學の方は、年月世紀等によりて算定せる創造の時を、人より見て、吾人に告ぐるものなり、否告げんとするものなり。之に反して創世記は此創造の時が神より見て、言ふに足らざるものなるを、吾人に告ぐるものなり。此故に、科學の發見にして、此の問題に何等かの影響を與ふとせば、或人の言ひし如く、只一點あるのみ。即ち吾人は、科學の助けに由り、一層明かに宇宙の偉大絕妙なるを認識すべく、一層明かに其の今日の完全に達する迄に無數の年月を經過せしを悟るべく、隨つて又一層明かに、此の大事業を僅々數日の事業と視たまふ神の如何ばかり

偉大なるかを了得すべきなり。

(乙)創造の原理

次に吾人は移りて、此の創造談中、或は明示せられ、或は含示せられたる頗る大切の原則數條につき講究せん。

(一)其純粹なる一神主義

第一には、先づ其純粹なる一神主義に就て論ずべし。此の一點だけにても、此の創造談をして、諸の創造談中に一頭地を抜でしむ。偖此の記者の言に據れば、日月星辰を初め、宇宙全体、皆一の第一原因に起因するものなりといふ。而して此記者の言が一點間違なきものたることは、本書の前諸章に已に之を說示せり。而して、こは、今日にては、もはや明了の點ながら、此の記事の著作時代にも亦明了のとなりしかといふに斷じて然らず。見よ、諸他の昔の創造談は、或は凡神敎的のものありて、神と宇宙とを混淆し、或は二元的のものありて、善惡二つの主義の存在を認め、或は多神敎的のものありて、宇宙を幾多の神の事業となせり。然るに獨り、此の猶太の記者のみは、是等諸說の弊實に陷ることなし。即ち彼は勿論獨り正しく、其他の記者等は皆誤謬なり。

(二)其漸進的發達

次に吾人の注意せざるべからざるは、創世記に據るに、世界の創造は、漸進的發達の方法によれることは

是れなり。神は、突然、完全の宇宙を創造し給はず。却て歩々着々、徐ろに之を建築し給へり。地は最初定形なく又曠空しかりき。而して其遂に秩序あり、又住民あるものとなりしは、幾多の段落を經たる後の事なり。之に加ふるに神は、一段落毎に、(但し穹窿の場合と、人類の場合とを除く。之に就ては、後段に論ずべし)其事業を檢し、之を善といひ給へり。斯くして神は、各段落毎に、特有の美麗秀絶を認め給へるなるべし。されど充分の滿足を表し給ひて、甚だ善との宣告を與へ給へるは、全く其事業を終結し給へる後のことなりとす。

此點に關しても、此の創造談は又全く間違なきものなるが如し。是れ蓋し地質學の確示する所によるに、地球の形成り、生物之に住するに至れるは、漸進的にして、突然成就せられたるにあらず。即ち歩々着々、幾多の年代を重ねて成れるなり。又此の年代は、頗る大切重要のものたりしにて、之を單に人類出現のための準備と見るを得ず。却て其特有の美麗秀絶を具へたるものたりしなり。斯くの如くにして、科學の示す所によれば、人類は受造物中最高のものにて、萬物の進化は人類を其最終結果となすものなるも、而も是れより以前に尙ほ幾多の時代段落あり。而して、何れも皆、善といふ形容詞を冠すべき價値あるものたりしなり。されど、此に至りて吾人は疑を生ず。如何にして、創世記々者は、是等一切のことを知り得たるかと。

(三)其發達の法式

偖此の漸進的發達は如何にして起りたるかといふに、創世記による時は、初めの一段落より次の段落へと進むには、神の命令の言に由れりといふ。勿論命令の言とはいふものゝ、必ずしも有聲の言を發し給へりとの謂にはあらず。神は此際一種の力を發し給へるものなるが、其の力は之を譬ふれば恰かも人類の發する命令の言と相類せるものたりしなり。全能の神には、吃々勞働に從事し給ふの必要なく、只一言を以て、能く之を成就し給ふべく、而して各段落は特別の創造力とも稱すべきものによりて成就したるなり。

此の點に關しても、科學は又創世記と相一致するものゝ如し。是れ科學は、自ら動植、人類等の種々なる受造物が、最初如何にして出現したるかを說明する能はざるものなればなり。勿論、是等の各段落は其前の段落より(生物は非生物より)進化せるもの、或は進化し得るものなりといふに就ては、科學と創世記との間に、何等の異議なし。即ち創世記に地青草を……發生せり(一〇十二)とあるは、是れ非生物より生物の出でたるを暗示す。更にそれよりも明かなるは天地の創造られたる其由來(二〇四)といふ句なり。此の由來といふ語の、一種の有機的相傳即ち進化といふ義を含むは明了なり。但し、科學の創世記に反對する點は、此の進化が單に自然的發達の力によりて起り、別に新たなる創造力の助けを借らざりしといふ一事にあり。されど、今日斯くの如き進化を起さんとするの擧が、悉く失敗に歸したるを思へば、此の當時一種特別の原因ありて作用したりとなすは、決して背理の想像にあらざるなり。

尙ほまた、種々の變化中、創造力によらずして起れりと見るは、困難のもの少からず。例せば、此の生物の起源てふ問題に就て一考せよ。吾人の知れるかぎりにては、生物の初まる自然的法式とては、活ける親より初まるの外はあらず。而も、此の地上には、未だ曾て、活ける親のなかりし時代あり。其の時には、自然的方法によらず、却て超自然的方法によるにあらざれば、生物は遂に起源するを得ざるべし。又他の例を擧げんに、動物にまれ、人類にまれ、最初の自由意思者が此の地球に出現せし時は、是れ即ち前古未曾有の一勢力が、新たに出現せる時なり。而して自然的勢力と自由的勢力との間には、非常の間隔ありて、自然的方法は此の間隔の橋たるに足らず。是れ自由的勢力は、本來超自然的のものなればなり。果して然らば、吾人は遂に創造力を認めざるを得ざるなり。

若し夫れ特別の創造力を認むる時は、創造の各段落を適切に說明するを得べく、他の方法を以てしては科學も到底之を說明する能はざること是れ何人も是認せざるべからず。要するに、科學は如何にして此の各段落の生ぜしかを知らざるものなり。隨つて科學は、其一致し得る限り、創世記と一致するものなるが、其創世記は明白に此各段落を科學の知らざる一の原因に歸せり。此故に創世記の創造談は、此點に就ても亦、確かに間違なきものなり。少くとも間違なきに近きものなり。

(丙)創造の順序

次に吾人は創造の一々の順序を論究せん。茲に、記臆すべきは、創世記は宇宙の起源と、地球太古の狀態とを說ける後ち、八箇の創造行爲を列擧せりといふことなり。是れ第三日に二箇、第六日に二箇、其他の日は一個づゝなるに由る。今この八個に加ふるに、宇宙の起源と地球太古の狀態との二を以てせば總計吾人の調査せざるべからざる項目、十個あり。

(一)宇宙の起源

曰く「元始に神天地を創造たまへり」と。余思ふに、此の創造てふ語の希伯來原語は、必ずしも無より創造するの意にあらざること、是れ何人も同意する所なるべし。現に、此言は、斯る意味を有するを得ざる場處に用ゐられしこと往々あり(例せば詩百二〇十八、賽五十四〇十六、結二十一〇三十等)。隨つて所謂物質の無始存在といふことは、是れ創世記にありては、未決の疑問なり。且つ天地といふ言は、宇宙を意味する普通の希伯來語なるが故に、地の上に天あればとて、こは特に注意すべきほどのことにもあらざるべし。されど、若し天が最初に創造せられたるの意味なりとせば、是れ又間違なきことといふべし。そは、多くの太陽、多くの星辰、先づ現はれて地之に次ぎしものなればなり。されど、こは尙ほ疑はしき點なれば暫らく之を擱くとするも、宇宙には起源ありて、此の起源は神に由るものたるは是れ創世記に據りて明了の點なり。又前にも已に說ける如く、科學は吾人をして、全く之と同一の斷案を下さゞるを得ざらしむるなり。

(二)地球太古の狀態

今、創世記に基き、又其言を明白自然の意義に取りて解釋する時は、地は最初、定形なく曠空く黑暗にして、又確に水に圍まれしものたりしなり。而して、吾人かの星霧說を取ることゝし、また前記の諸點を以て地球が獨立の遊星となれる後、冷却して自ら發光せざるに至れる時期のことを指すものと見れば、創世記の記事は蓋し其實を得たるものゝ如し。蓋し吾人が、地質學に由りて判斷する所に據るも、當時地球は定形なく、生物の點よりいへば曠空ものにて、又恐らくは濛々たる水蒸氣に包圍せられ、暗黑を生ずるばかりなりしなり。果して然らば、創世記は、其出發點に於て已に當を得たるものなるが、此に至りて、吾人は亦疑問を起さゞるべからず。曰く、如何にして記者は之を知りたるかと。

(三)光

地球發達の第一步は、創世記の記事に據るに、光の發生せると是れなり。而して、光は其固有性として必ず熱を具ふ。されば、光は必ずや最初に發生せしものならざるべからず。是れ氣候の變化、風、雲、雨、潮流等の構成、皆一に光に關係するものなればなり。其の他、光は動植物の生活に必要なる物質力をも供給す。此を以て、創世記が、此の第一步に光を置けるは、確かに當を得たるものなりとす。

勿論斯る太古にありては、此の光の源はかの地球を產み落せる氣体的星霧の殘物に相違なし。隨つて此の光は、今日の太陽の如く一點に集中せるものにあらず、却て漠々たる空間の瀰漫したるにて、恐ら

くは重疊せる雲霧を貫きて、初めて地球に達したるなるべし。而も、此の光は尙ほ廻轉止むことなき地球の一側面にのみありたるべきを以て、必ず光暗の交替ありたるならん。こは、創世記の記事にも暗示せられたることにて、且つ是れより以前には實際無かりしことなりとす。

(四)穹蒼

第二歩は即ち上なる水(雲)を下なる水(海)より分割し、此の兩者の間に穹蒼即ち氣界を置けること是れなり。偖記者の所謂る穹蒼とは、堅き平面にして、上なる水を之に滿へたるなりとの說あれど、こは殆んど維持すべからざる說なり。是れ穹蒼は『天』と稱せられたればなり。又此の天の上の水といへば即ち天より降下する雨の源の意味に相違なければなり。而して此の源とは、即ち雲を指すものたるは何人も容易に判斷し得る所なるべく、此の雲と地との間に挾まりて堅き穹蒼なるものあるべしとは、誰一人想像せしものはあらず。殊に又、後に記したる空の鳥が、斯くの如き穹蒼を翔けるといふことをや。而して、前にも記せしことあるが如く、神は此の穹蒼を見て、善といひ給はざりしが、こは若し此の穹蒼を以て、雲と海とを分割する虛無（打ち見たる所）の空間を意味するものとせば、是れ蓋し自然の勢なり。されど若し此穹蒼にして有形の物体を意味せんか、神は必ず他の凡ての物に對すると等しく之に是認の言を與ふべき筈にして、之を省きたるは、其理由解すべからざるなり。

尙ほ此の見解は、此の創造談の、對稱的に排列せられたるを見て、一層確實にせらるゝを覺ふ。所謂對稱的とは、六日を分ちて三日宛の二組となし、其中第一組の三日を、第二組の三日の準備となせることは是れなり。見よ、第三日には光現はれたり。而して、第四日には、發光物体たる日月の二つ現はれぬ。又第三日には、地と草木と現はれしが、第六日には、此の地上に住み此の草木を食ふ動物と人類現はれぬ。斯くの如き事情なるを以て、吾人は又第二日と第五日との間にも、同樣の符合あるべしと想像せざるを得ず。然るに第五日には、水中に棲む魚と、空を翔ける鳥と現はれぬ。此故に若し第二日の事業にして前記の如く、水を作り、空氣(即ち穹蒼)を作ることにあらざれば、其對稱は之を完全といふべからざるなり。

勿論此の說に對して反對するものありて謂はん、日月の二は穹蒼に置かれたりと記せられたり、されど、穹蒼、若し氣界といふの義ならば、嚴密には之を適切といふを得ずと。されど、記者の意は、之を文字的に解すべき筈のものにあらず。是れ、日月を穹蒼に置くとはいふものゝ、置くとは、何物かへ固着せしめたりとの意にあらざるは、何人も皆判斷し得る所なればなり。現に、月は日に對して終始その位地を變ずること猶ほ虹の如きものなれば、勿論固着せられたるにはあらず。而して此の虹のとも、創世記には(九〇十三)雲の中に置かる(和譯には起るとあり)と記されたるぞかし。且つ夫れ、日月は文字的に穹蒼にあるものとも謂ふべからず。是れ雲は(即ち穹蒼の上なる水)實際、日月の裏面にはあらずして、只時々その表面に出現するに過ぎざるを、皆人の知る所なればなり。之に加ふるに天といふ言も

穹蒼といふと同樣その意義曖昧なることを知らざるべからず。即ち吾人は通常、天の雲といふと共に、又天の星といふこともあるにあらずや。之を要するに、穹蒼とは是れ氣界の義なること、殆んど疑なし。而して其順序が、光の後ち、動植物の前にあるは、是れ確かに其當を得たるものなりとす。

(五)乾ける土

次に吾人はまた大切なる一項目に到着せり。即ち乾ける土の初めて現はれたること、是なり。偖、創世記に據る時は、此の地球には初めより乾ける土ありたるにあらず。却て、元は、地球全体、水のために掩はれ居たるなり。而して科學の說く所を見るも、是れ亦實際然りしもの丶如し。即ち、地球は元と水蒸氣に包まれしものなりしが、此の水蒸氣は漸次凝結し、遂に一面の海を成すに至りぬ。然るに其後ち噴火的作用か、若しくば、其他の收縮作用の起れることありて、地表ために高低を生じ、其結果水は低所に集まりて海を成し、而して他の一方には、乾ける土現出したるが如し。されどこ丶に疑ふべきは、創世記々者は如何にして之を知り得たるかといふことなり。今日、自然界の狀態を以て見る時は、一も乾ける土のなかりし時代を想像するに足る材料なし。然らば之を記者の臆說といはんか、兎に角實に驚くべき臆說といはざるべからず。

(六)草木

次に吾人は生物の起源に到着せり。而して是も亦創造談中、その置くべき順序に置かれたるものなり。何を以て、之をいふかといふに、草木には四種のものを必要とす。即ち土壤と空氣と水と熱を兼ねたる光是れなり。然るに、此の四の物は、此の草木の現はれし時、已に存在し居たればなり。

此に注意すべきは、此の創世談には、青草と、草蔬と、果を結ぶ樹のこと、記載せられたること是れなり。而して此等草木は一時に發出せりとせらる丶もの丶如し。されど此の事件の順序を記したる全体の構造を以て見るに、此の草木は順次に發出したるなりとの說も、亦必ずしも成立せざるにあらず。順次に發出したりとは、此時、草木は、其發生を初め、之を源となして、後世長く草木の發生を見るに至れりとの意にて、こ丶に特に記載せられたるものは、其中最も大切なる三種なり。此の三種の發生の順序は、能く地質學と相符合す。第一は青草なり。青草とは勿論種子なき植物(隱花植物)のことならん。是れ種子のことは、二の場合には記載せられたるに、獨りこ丶にのみ記載せられざればなり。第二は草蔬なり。草蔬とは、穀物及び蔬菜のことならん。而して第三は、果を結ぶ樹なり。されど、此の三種のことに關しては、必ずしも、力を入れて主張するにはあらず。是れ此の三語の希伯來の原意は、稍明了を欠くを以てなり。

次の項目に移るに先だち、こ丶に外面上、困難と思はる丶一事につき、一言せざるべからず。他なし、草木系統のものは、勿論此期に完備せず、次の諸期に至りて初めて完備せるものなりといふこと是れなり。例せば、或る特別の新種は、魚鳥期に入りて稍久しき後ち、初めて發生したるなり。之と等しく、動

物期に入りて後ち、發生せし魚鳥もなきにあらず。偖、この難問たる、諸種の生物交互甚しく相錯綜して發生せる事實よりして起れるなり。而も創世記の順序は、頗る眞理に近き順序にて、之に優りたる順序は、他に是れあるべからず。例せば、記者若し之を、魚、鳥、植物、動物の順序に排置するか、又は動物、魚、鳥、植物の順序に排列したるが、若し實際錯綜して發生せるものを、順次的に排置する必要ありとせば、斯くの如きは其力に及ぶだけ眞理に近き排置法を取れるものといふべし。

(七)太陽と太陰

次に吾人は、大陽と太陰の創造を說くべき順序となれり。さて此に星辰も亦記載せられたれど、星辰は第四日に創造せられたりとは記せられず。又此の日の初めの命令にも、さる意味見えず。それは攔き光の成りたる後に、太陽の成れりといふは、此の創造談中蓋し最も驚くべき點にて、古來より一つの難問と看做され居る所なり。之に對しては多少牽强附會なる種々の說明も提出せられたるが、今日にては、幸にしてもはや其必要なきことゝなりぬ。是れ創世記の此の記述は、徹頭徹尾間違なきものなることゝ、科學は、粗ぼ已に之を證明したれればなり。此事たる一見如何にも奇に相違なし。而も光は太陽よりも遙か以前に存在したりしは、是れ疑なき事實なり。言を換へて之をいへば、此の太陽系の原形たる氣体的の星霧は、一種の發光体たりしなり。然るに其後幾多の年を經て、此星霧は一定の輪廓を具へし物体となり、强度の中心ある光を發するに至り、即ち太陽と呼ばるべきものとなりぬ。

而して地球の如き遊星は、冷却、凝結兩つながら太陽の如き中心團塊よりも速かなるを以て、星霧の太陽とならざるに先だち、草木は地上に發生するを得たり。此の點に就ては、地質學者中、異論を唱ふる者少からず。されど、今日、吾人の知識は、未だ何れとも、確信を以て斷言し得るほどの程度には達せざるぞかし。何れにしても、地球は元と其の水面より發する蒸氣のため、密雲に包まれ居たるなり。隨つて乾ける土と、草木と現はれて、此の水蒸氣の減ずるまでは、太陽は恐らく地上に輝かざりしならん。されば光ありて後ち、太陽成りしといふは、確かに間違なきことなり。否、乾ける土と草木とに次で、太陽成れりといふも(少くとも、乾ける土と草木と出でゝ後ち、初めて太陽は地上に輝けりといふも)亦恐らく、間違なきことなるべし。

論者は此說に對して、或は反對していはん。太陽は實際第四日に創造せられたるにはあらず。此時に至りて、初めて充分に收縮し、以て一つの大なる光となれるのみ。されば、創世記には、恰かも此の意味の記事ありとなかるべからずと。さて此の反對論に對する答は、他なし、創世記には、恰かも此の意味の記事ありといふこと是れなり。蓋し、太陽創造のことは、第一節の天といふ言の中に已に含まれたり。此故に、第四日の記事に至り、神二の巨なる光を造るといふ塲合には、一種特別の言用ゐられたり。而して、其言は、創造といふの意味なるよりも寧ろたつるといふの意味にて、現にたつると譯せられし處もあり(例

せば母前十二〇〇〇年の如き)。此の事情は、今日吾人が事實として知れるものと能く相符合す。即ち太陽は元と星霧として創造せられたるなり(若しくは星霧より進化したるなり)。而して後ち、久しき年月を經て收縮し、今日現に見るが如き大なる光とはなりぬ。

こゝに講究すべき二の反對論あり。第一は曰く、太陰は太陽よりも小なれば、地球に先だちて收縮したるべく、太陽の如くに地球よりも後なることあるべからずと。されど、此の記事にもある如く兩者を等しく光として考ふる時は、こゝに之を並べ擧ぐるは、是れ當然のことなり。是れ月光は、畢竟日光の反射に過ぎざるものなればなり。隨つて太陽の收縮して、强度の光を發するよりも以前にありては、太陰も素とより充分に輝き得べきにはあらず。偖、この點は今日にては何れの人にも明了のことなるが、此の記事の著作せられし時代にも、亦同じく已に明了なりしといふべきか。

第二の反對論は曰く、創世記を以て見る時は地球は萬物の中心なるが如し。而して太陽の如きも(兎に角、其光は)只地球を照らすためにのみ存在するものとせられたりと。偖、創世記の記事は、地球を以て當太陽系統中の最も重要のものと認めしものたるは、論なし。されば、其記述に誤りなくば、之に對して、何等の反對論をも唱へ得べきにはあらず。是れ人類との關係よりいふ時は(而して創世記の創造談は、人類のためにのみ著作せられたるものなり)勿論、地球ほど、大切のものはあらざればなり。次に又、日光の目的に就ていふも亦然り。吾人は、日光が此の地球の住民に取りて大切なるを知る。其他には如何なる大切の目的を達し居るや、是れ吾人の知る所にあらざるなり。

されど、斯くの如きは、要するに是れ小事のみ。大切の點は前にも已に言ひし如く、創世記の記者が前にも光の成りしことを記し、後にも太陽の成りしことを記せること是れなり。斯くの如きは、此の記事著作の當時にも、又その後の數千年間にも、共に背理のこと、見へしに相違なし。是れ太陽が光の源なるは、何人も皆判斷し得たる所なればなり。但し、今日の吾人は、此の記事の誤りなきを知ることなるが、只疑はしきは、創世記記者の之を知り居たることなり。創世記々者は、之を何等かの人類的手段にて、知り得たるものとすべきか。或は斯る手段によらず、其驚くべき臆測を以て之を言ひ當てしものとすべきか。思ふに、創世記々者は兩つながら之をなさゝりしならん。果して然らば、他に途なきが故に神の啓示によりて之を知り得たりといふの外はあらず。

(八)魚と鳥

次に吾人の說くべきは、魚と鳥との發生なり。而して此の記事を以て見るに、魚も鳥も一時に發生したりとの意か、或は漸次に發生したりとの意か、明了ならず。只、他の場合より推して、漸次に發生したりとの意なるべしと思ふのみ。又、魚を以て、鳥よりも前にありしとなし、更に魚、鳥よりも前に植物ありしとなすは、是れ科學と符合することいふを待たず。げに、魚鳥よりも以前に植物ありしとの一事は、是れ博物學者の皆明かに承知せる所ならざるべからず。其理由は、動物の食物なるものは、皆直接間接

に植物よりして得らるゝものなればなり。而して、創世記が此期に就て特に水の動物の饒なるをいへるは、蓋し其當を得たり。若し、鳥に就ても、饒といひしならば、吾人の知る所を以てするに、誤解たりしならん。又特に大なる魚のことをいへるも、是れ其當を得たり。斯くの如き巨大の蜥蜴類は、蓋し當時の一大特色なりしを以てなり。

尙ほ此に一言せざるべからざるは、此の記事に魚と鳥とを並べ擧げて、陸上動物と區別せると是れなり。こは、決して、明了のことにはあらざれど、又間違なきことなり。其故は、魚も鳥も、共に卵生動物なり。又魚も鳥も空中にありては翼を用ゐ、水中にありては、鰭を用ふといふだけにて、其動き方は相似たり。其他、近時に至りて漸く發見せられし所によれば、魚と鳥と其血質粗ぼ相同じといふ。之に反して陸上動物は些少の例外はあるも、以上の各要點に於て全く相同じからず。こゝに至りて吾人は又疑ふらく、鳥は陸上動物と同樣、空氣を吸ひて陸上に住するものなり。然るに、如何なれば、創世記々者は此の鳥が動物よりも尙ほ一層水中の魚に類似せることを知り得たりやと。

然るにこゝに一つ、此の創世談の非難中にありて、最も大切の議論と覺ゆる一條あり。そは、かの無脊椎動物に關するものなるが、此中には海綿珊瑚等の如きものより、昆蟲介類等に至るまで、夥しき種類の動物をも包含す。然るに、此の無脊椎動物は、創世談中、果して何れに含められたるものと看做すべきや。或人は之を水に生せし動く生物の中に含まれたりとなすべく、また或人は陸に生せし昆蟲の中にありとなすならん。されど、之を兩者何れに置きたりとも、共に當を得たりとは謂ふべからず。是れ或種の無脊椎動物は、必ず植物に伴ふを常とすればなり。さればとて、此の難問は、如何ともし難きものといふにはあらず、是れ前記兩者とも、必ずしも無脊椎動物を含むといふにはあらざればなり。即ち水中の動く生物は、只魚類を指せしものなるべく、また昆蟲は只、小動物を指せしものならん。且つ夫れ、こゝに一言反問したきは、何故無脊椎動物は之を此の記事より省くを得ざるかといふことなり。此の記事は、必ずしも創造せられたる一切のものを記述すとはいはず。却て此の記事は、非常に簡單を主としたると共に又此の無脊椎動物は、比較的微賤のものなるを思へば、之をこゝに記載せざる理由、必ずしも解し難からず。果して然らば、此の難問も亦消え去るなり。

(九)陸上動物

其次は、陸上動物なるが、こは正しく地より生せしものにて、既存の生物より進化せるものにはあらず。而して科學は、之に何等の證明を與へざれど、其魚鳥の後、人類の前に置きし順序は、間違なきものたること、是れ科學も亦說示する所なり。鳥と粗ぼ其時を同ふして、數種の有袋動物も亦發生したりしは事實なり。されど全体としての陸上動物が發生したりしは、是れ確かに鳥よりも後のことなりとす。尙ほこゝに注意し置くべきは、創世記が陸上動物を分ちて、三種となせることなり。家畜と昆蟲と（昆蟲の意義は確かならず。之が希伯來語に二つあり。一は創世記一〇二十四に見ゆるものにて、又一は（是れ

も同一動物を指せるに相違なし」創世記七〇二十一にあるもの是れなり。後者は利未記十一〇二十九に、鼬鼠、貂鼠、大蜥蜴の類をも含むものとせられたり。但し、今は、他の動物の間に記載せられたるを以て見れば、亦恐らく小動物をも意味せるものならん）地の獸（即ち野獸）是れなり。但し此三種は、二十四節と二十五節とを比較するに、寫字者の誤りと覺しく、其順序相同じからず、隨つて此順序に就て議論をなすは、危險のことたるを免かれず。また三十節にも、一の困難あり、是れ此の句の中に肉食動物を載せざるが如くなればなり。されど、記者は、其誰たりしを問はず、之を承知し居たるは、確實のことなりとす。

（十）人。

最後は、人の創造なり。此に、人といふは人類を指していふものにて、箇人を指すものにあらざるは、次に「彼等」とある言を見ても明了なり。偖此の人類の創造は、時期の後にして性質の特別なるのみならず、又其位地も前掲諸他のものに比しては、高尚のものとして記載せられたりと謂ふべし。其理由蓋し、地は思慮ある動物を生じたりとか、又は其類の記事なく、却て人は神の像の如く作られし（或は進化）と記されたればなり。此神に類似の性質とは、勿論人類と動物と通有の体的若しくは心的屬性のことにはあらず。（若し然らんには動物も亦神の像を具へしものと謂はざるべからず）。却て人類と諸他受造物との通有ならざる一種特別の屬性に關してなり。斯く人類は、一種特異の性質を具へ、且つ自然界全体を統御するの任を帶ぶるものたるに拘らず、記者が人類のためにとて、特に一日を割り當つることをせず、却て之を陸上動物と并べ擧げ、共に第六日の出來事となしたるは、是れ怪しきことゝいふべし。斯くして記者は、多少人類に超自然の性質あるを認むると共に、又動物と關係あることをも認めたり。而して科學は、創世記に比して、五點に於て相符合せり。

第一は、人類發生の時代に關してなり。人類は、第三紀即ち最近地層期の末よりも以前に發生せしものにあらずとは、今日凡ての學者が、皆等しく認むる所なり。加之、人類の發生後には、何等の動物も發生せしものなきこと、是れ亦學者の許す所なり。果して然らば、人類の發生は萬物の中にて新しきものたるのみならず、又實に最後のものなり。而して、こは恰かも、創世記に人類の地位と定められたる所と相符合す。

人類發生の精確の時日に就ては、聖書に一言も之を說かず。聖書の年代記は、第二章のアダム創造のときにまでは溯りたれど、第一章の人類創造のことにまでは溯らざればなり。アダム以前にも人類のありたることは、此の第一章の外にも尙ほ別に含示せられたる所あり。たとへは、カインが我に遭ふもの、我を殺さんとて恐れたりしといふが如き、又カインに妻ありしといふが如き是れなり。當時、アダムには娘ありしといふことを聞かず、況んや其娘の一人がカインと共に放逐せられてカインに嫁せりといふことをや（創四〇十五—十七、二十六、六〇二—四）。此に於てか、聖書註解家の中には夙に（地質學が

之に想到したるよりも遙か以前に)創世記第一章は、前人種のことをいへるなりと主張せる人も是れありき(例せば紀元一千六百五十五年アイ・ペイレイリウスの如き是れなり。スピーカー註解に引用せられたり)。此故に、吾人はこゝに、アダム、エバの話に關する諸難問を論ずる必要なし。此の難問に就ては、余は今日まで一つも滿足の解決を見たることあらざるなり。

第二は、人類の特別原因に因由するものなりといふこと是れなり。吾人は、第四章に於て、已に動物と人類との間には、非常の相違あることを講究せり。而して第一の人類は、或は、既存の猿より進化せるものにもせよ、斯くの如き大變化には、必ず特別の創造力の必要ありしものと思はる。況んや斯くの如き大變化は、空前絶後、世界の歴史にも只一回のことなるをや。何れにしても、科學は、之に就て、他に何等の解釋法をも有せざるなり。

第三に、人類の進化といへば、既存の能力が大發達を遂げたりといふ意味にのみ止まらず、又未曾有の高尚なる能力が新たに發生したることを意味す。其能力とは、即ち自由意思にして、是れ人類をして、小規模ながら、或は意匠し、或は事を遂行せしむるものなり。こは、他の受造物と比較して、人類の特性たると、前に已に之を示したれば、こゝには最早之を講究する必要なし。而して、此點は、即ち人類が、(植物、動物等と異にして)其創造せられたる際善と稱せられざりし所以の理由なり。蓋し、自由意思者にありては、善といへば此中に道德的の善即ち義をも含まざるべからず。然るに人類は、義なるものとして、創造せらるゝを得ざりしは是れ已に第六章に於て說明し置きたるが如し。人類は、機械の如く完全に、小供の如く無罪に創造せられ得ざるにあらず。されど、人類をして義なるものたらしめんとすれば、人類の協力を要す。即ち邪を行ひ得る力あり乍ら、正を行はんとの自由撰擇を要す。斯くの如き理由なるを以て、神は人類創造の際特に善とは稱し給はざりしなり。さはいへ、人類は勿論、其自由意思を遂行するに極めて適當したる狀態に造られしものに相違なし。されど、此點は、神が萬物の創造を終りて最後に發したまへる甚だ善との是認の言に含まれたり。

第四に讀者は記憶せらるゝならん、神も亦自由意思を具へ給ふものにて、同じく意匠と遂行との力あるは、是れ第一章第二章に於て說明したる所なることを。而して、こは神の特性にて、神の行動と其他の諸勢力の作用との異なる點、蓋し此にあり。果して然らば之を科學的にいふも、人は神の像に作られしものといひて、少しも誤謬なし。是れ人類が、此遊星の萬物と異なる特殊の屬性は、やがて是れ神の屬性に外ならざるを以てなり。而して、斯くの如き人類を創造するは、即ち是れ大なる可能力を創造するものなり。正邪を行ふの力も、亦その思ひのまに〳〵造主の意思に反する行ひをなすの力も、之に由りて此世に罪と其結果なる不幸を齎らすの力も、等しく是れより生ずるものなり。吾人、此の事情を思ふ時は、神が人類を造り給はんとするに先だち、特に暫らく熟考する所あり、此時に限りて神言給ひけるは云々と記したる創世記の記事は蓋し當を得たるものと思ふなり。

此に、尙ほ一つ注意すべきは植物、動物等の場合には、其類に從ひてといふ言の用ゐられたるに拘らず人類の場合には、用ゐられざること是れなり。是れ人類は、植物、動物等と同じ意義に於て、類の中の一とは言ふを得ざるに由る。人類は、銘々に皆無比無類のものなり。諸他の萬物と異なる一種特別のペルソナル、ビーイングなり。分子を集めて作ることを得る或る方法の一例（たとへば樹木の如きもの）にてはあらざるなり。

第五に、以上の相違あるに拘らず、人類は其物質性よりいへば陸上動物と頗る類似せるものなること、是れ科學の極めて明かに說示せるところなり。此故に創世記が、凡ての動物皆同日に創造せられ、人類は、それと別日に創造せられたりとすることなく、却て魚と鳥とを同日に作られたりとなし、陸上動物と人類とを、又別の同日に作られたりとなせるは、頗る當を得たるものといふべし。

以上述ぶるが如き諸點は、皆頗ぶる注目すべきものなれど、余り之が研究に力を用ふる時は、却て大切の眼目を忘るゝの危險あり。然らば、大切の眼目とは如何といふに、以下乞ふ簡單に之を說かん。創世記を見るに、生物に三の時期あり。而して各期皆その特徵を具ふ。即ち第三日の特徵は草木にて、第五日の特徵は、魚と鳥なり。而して、此日には、特に巨なる魚のこと、記載せられたり。又第六日の特徵は、陸上動物にて、此日の終に至り、人類も亦創造せられたり。今、地質學の三大期なるものを見るに、亦全く是と同一の特徵あり。即ち第一紀の特徵は草木なり（例せば、炭層）。第二紀の特徵は、蜥蜴類即ち巨なる魚にて第三紀は陸上動物なり。而して此の第三紀の終り（現今は往々第四紀と稱せらる）は、人類を其特徵とすといふ。斯くの如くにして、地質學と創世記の一致は、如何ほど控へ目にいふも、眞に驚くべきものと謂ふべし。

（丁）結　論

以上吾人は、詳かに、創世記に記載せられたる創造談を調査し、且つ出來るだけ、之を天文學及び地質學の說と相比較せり。而して大体に於ては、各點皆相符合せること、是れ前條吾人の示せるが如し。吾人は今之に加へていはん、是れ若干の重もなる科學者の意見なりと。即ちローマニースは曾て事實爭ふべからざるが如き語氣を用ゐていへることあり、曰く、『モーセの創造談に於て、地球に動植物の發生せりとなせる順序は、進化の學理の要求し、地質學の證據の證明する順序と能く相符合す』と。果して然らば吾人は斷定す、創世記に記載せられたる創造の順序は、多數の場合に於ては、確かに間違なく、又凡ての場合に於て、多分間違なきものなりと。

而して斯くの如きは、確かに是れ頗る大切の點なり。是れ創世記と科學との符合は、之を偶然といはんとするには、余りに多數にして、又余りに疑はしければなり。何故、余りに多數なりといふかといふに、人の出來事を臆測によりて、正當の順序に排列せんとすれば、其機會は、一に對して四萬〇三百十九なればなり。又何故、余りに疑はしといふかといふに、無識の人が太陽の前に光ありきと記し、地球は曾

て、一寸の乾土をも有せざりきといふが如き筈なければなり。之に加ふるに、此の創造談の大体の原理も亦之が有力の證據なり。殊に其純然たる一神主義と、其漸進的發達の如きは、即ち然り。また吾人は、此の記事の非常に簡潔單純なるを見て、一層の敬意を表せざるべからず。げにや、斯くの如き多量の報道を、斯くの如き簡短の文中に、縮めたるものは、他に其類稀なり。又斯くの如き困難の問題を、斯くの如く精確に記述し、而も斯くの如く其用語の單純通俗なるものも、他に其類稀なり。

偖以上論じ來れる所に對して、吾人は如何なる斷案を下すべきか。思ふに、之に就ては只二つの外その途なかるべし。其一は、此の記者は誰なりしにもせよ、必ず今日の人ほど科學に通じたりしと、否今日の人よりも一層科學に精通したりしとすることなり。又、一は記者この智識を神より啓示せられたるなりとすることなり。而して吾人苟も、啓示なるものを是認する以上は、兩者の中後者を以て近眞的なりと認めざるを得ず。此故に吾人は斷案を下して曰く、此の創造談は神より啓示せられたるものなりと。

第九章　其起源は奇蹟に由りて證明せられたりし事

摩西五經の貴重なる價値。摩西五經はモーセの著作たることを自證す、而して是れには疑はしき點なし。

(甲)摩西五經の埃及的趣味

是れ此の五經が古書たることの有力なる證據なり。而してこは左の三點に顯はれたり。

(一)ヨセフの歴史に於て

(二)モーセの歴史に於て

(三)律法と說話とに於て

(乙)摩西五經の律法

此の律法も亦五經の古書たることの有力なる證據なり。而してこは左の四點に顯はれたり。

(一)其主題

(二)其歴史との關係
(三)其律法と律法と相互の關係
(四)其用語

(丙)古書にあらずとの說

之を證明する論證の重もなるもの三あり。されど何れも斷じて有力のものにあらず。

(一)摩西五經の用語
(二)其律法の世に知られざりし事
(三)申命記の發見

(丁)結　論

摩西五經は概して同時代のもの、記述なり。此故に吾人は出埃及記の奇蹟を是認せざるべからず。何等の確證なしとの反對論。

以下吾人は猶太教の起源を論ぜんとす。詳言すれば出埃及に關係したる事件を論ぜんとす。而して出埃及に關係したる記事は今日只摩西五經の中にのみ存するを以て、吾人は丁寧に該書を調査せざるべからず。今摩西五經は果して其記載事項の、信認すべき且精確に近き記錄なるや、又全体より見て精確の記錄なるやといふに、こは主として其著作の時日如何に關係す。試みに問ふ、摩西五經はモーセの著作したる若しくはモーセの時代に著作せられたる所謂同時代の文書なるかと。

最初に一言せざるべからざるは、五經の大部分はモーセの著作なることを明かに自證すといふこと是れなり。斯く言へばとて、其標題若しくは卷頭第一節に此の題號を置けることをのみ指すにはあらず。斯くの如きは後世容易に加筆し得るものなり。されば吾人の意味する所は他なし、摩西五經の始終を通じ、出埃及記となく、民數記となく、申命記となく、其多くの出來事、其記載せる律法を(屢次數章に亘ることもあり)實際モーセの書き記せるものと積極的に數回斷言せることを指していふものなり。こは重要の點なれば、忘却するなからんことを要す。(出十七〇十四、廿四〇四、三十四〇二十七、民三十三〇二、申三十一〇九、二十二、二十四)。

之に加ふるに、摩西五經の中、創世記の初めの諸章を除けば、一として其事件の起りし當時之を書記するを得ざりしものあらずとは是れ近代の發見に由りて明了となれる所なり。即ち筆記術はアブラハムの時代よりも數百年前、既にバビロニヤ及び埃及全國に普く行はれ居たりとは今日吾人の知るところ、而して、猶太人の祖先等に密接の關係ありしものも即ち此の二國に外ならず。且つ夫れ出埃及の時代には、埃及は已に非常に開化せし國なりしにて、モーセを初め其他イスラエルの諸領袖は、若し筆記せん

とすれば、筆記するの力ありしと是れ確實なり。而して此の人々は兎も角イスラエル人を埃及より救ひ出せし人々なれば、之に就て記錄を遺したるべきは、粗ぼ疑ひなし。されど彼等は此の記錄を摩西五經に遺したるか、今日の摩西五經は即ち其記錄なるべきかといふに、是れ吾人の今當さに判斷せざるべからざる問題なり。而して吾人の第一に講究せざるべからざるは、摩西五經の埃及的趣味とも稱すべきものと、其律法とにて、此の兩者は何れも摩西五經の古書たることの有力なる證據なり。第二に之が反對說即ち摩西五經は古書にあらずとの說に就て述べ、第三に摩西五經を眞作と認むるより生ずる結論を說かん。

(甲)摩西五經の埃及的趣味

第一は摩西五經の埃及的趣味に關してなり。所謂埃及的趣味とは、五經中埃及に關することを記するには、徹頭徹尾正確にして間然する所なきが如きをいふ。斯くの如きは、是れ埃及の事情に精通せる其時代の記者には勿論自然のことなると共に、後世カナンに住せし記者にありては如何にも有り得べからざることなり。されど此の證據の價値如何を味はんとすれば、多少古代の埃及のことを知らざるべからず。而してこは頗る大切のことにて、此に之を略するに忍びざるものあり。由て第一に先づヨセフの歷史に就て講究し、次でモーセの歷史に及び、最後に律法と說話とに就て述ぶる所あらん。

(一)ヨセフの歷史に就て

初めに先づ論ぜんとすることは、此の記者は同時代のものならじとの證として從來屢々用ゐらるゝ三點に就てなり。そは此の三點は何れも埃及の風俗を說明せるものにて、讀者を認めて此風俗を知らざるものとなせるに似たればなり。所謂三點とは、埃及人は希伯來人と別の臺に於て食事をなすこと、埃及人が牧羊者を忌むこと、埃及人が屍に覆ぬるの習慣是れなり(創四十三〇三十二、四十六〇三十四、五十三〇三)。されど文章の連絡を以て見る時は、初めの二よりする推論は頗る疑はしく、第三よりする推論は非古書說に利益あり。

さはいへ五經は所謂同時代のものゝ手に成れりといふ說にも許多の證據あり。然り、書中の一點々々殆んど皆之を古代の碑文に照らして說明し得ざる所なし。試みに書中の只一章だけに就ていはんに、(創世記四十一章)パロが非常に夢に重きを置けること、疑はしき場合には法術士と博士とを召して之れに下問せることは是れ今日吾人の知る所なり。而して法術士と博士とは兩つながら埃及の碑文に屢次記載せらるゝ所にして、又並べ擧げられし場合も少からず。更に又此の夢の內容を見るに、其の埃及的なること掩ふべからざるものあり。家畜の河より上り來りて葦(是れ亦埃及語なり)を食ふは是れ埃及に於ては普通に見ることにて、カナンの地にては殆んど絕無のことたりしならん。之れと等しく七の穗ある麥も埃及の產物なるべく、カナンの地に發生したりとは何處にも記載せられず。その他吾人は又膳夫の長と稱する官吏、酒人の長と稱する官吏の是れありしことをも承知せ

り。

次にヨセフがパロの前に至急出發を命ぜられし時、暫らく鬚を剃るに時を費せしこと記されたり。凡そ古代の埃及の事情に通ぜし人には、こは如何にも自然的のことゝ感ぜらるゝなるべし。是れ埃及の上流社會のものは常に鬚を剃るを以てなり。されどイスラエル人にありては、こは如何にも不自然のことなるべし。是れイスラエル人は常に鬚を蓄へたればなり（母後十〇五）。又穀物を藏に貯へて、頻々たる飢饉と租稅とに備ふることも、是れ純然たる埃及的のことなり。穀藏の長といふ官名も亦能く人の知れるものなりとす。

その他、吾人はま　外國人にして埃及の要路に立つに至れる時は、屢々改名を行へるを知る。又王は其愛寵するものに之が記章として印章の指環と金の頸輪（即ち頸にかくる索）とを與ふる習慣ありしを知る。特に此の金製の頸輪を與ふることは純粹の埃及的習慣にて、之を金を受くると稱し、碑文の中には絶えず之を記載せり。又ヨセフの新名ザフナテパネアも、その他アセナテの如き、ポテパルの如き、何れも皆眞實の埃及的名稱なり。但し（其中只アセナテだけを除けば）現今にてはヨセフほどの古き時代に之を發見するを得ず。之を要するに、本章に記されたることは、（而してこは見本として擧げしのみ、此類の章他に尙ほ多し）一事一物皆埃及に關せるものとしては全く正確なるも、之をカナンに關せるものとしては多く不正確たるを免かれず。

其他、此創世記の後部は、實際埃及にて著作せられたるを示す證據も亦是れあり（此の證據は間接的のものなり。されど其間接的なるがために一層價値あるものと思はる）。此の證據は六ヶ處にありて、何れも地名の後にカナンの地の云々といふ句を附加したり（創二十三〇二、十九、三十三〇十八、三十五〇六、四十八〇三、四十九〇三十）。而も是等六ヶ處の地と混淆の恐れある同名の地、他に是れあるを見ず。果して然らば、シケムを初めとして、其他の地がカナンにありといふは、イスラエル人に與ふる說明としては何の必要ありや。イスラエル已にカナンを征服し、其處に住して何人も皆之を承知せる時代には是れ必要なき說明なり。故に吾人は此の說明を以て彼等が尙ほ埃及寄寓中のことなさゞるを得ず。此の論點を一層確實にするものはシユルの野に關したる記事なり。シユルの野は埃及とカナンとの間に挾まれるものなるが、聖書（希伯來語原文なり、和譯にあらず）に之を記してエジプトの前アッスリヤに行く途中にありといへり（創二十五〇十八）。果して然らば、此句も亦、埃及にて記されしものならざるべからず。シユルをアッスリヤに至る途上にありとするは、只埃及に住める人の能く言ひ得る所なればなり。

此他上揭のものほど有力にはあらざれど、同一の證據たるべき句、他に尙ほ是れあり。たとへば初めに先づ人の健康を問ひ、次で其人は尙ほ生存せるかと問ふ順序顚倒の質問の如き是れなり（創四十三〇二十七、二十八）。此の奇なる風習は純然たる埃及風のものにて、之と全く同一の實例はメチプタ第八年

の日付けある稿本に發見せられたり。メチブタとは蓋し出埃及時代のパロとして一般に認められたる王なり。而して、此の風習をカナン在住の記者が採用したりとは思はれず。是れ此の記事をして可笑しきものたらしむればなり。

(二)モーセの歴史に於て

第二にモーセの歴史に就て說くべし。抑もモーセが蒹を以て作り之に瀝青を塗りし箱舟に入れられしといふは全く是れ埃及に適したる記事なり。此の二の材料は共に普通埃及に於て用ゐらるればなり。されど此の事情は埃及以外の國には全く當て嵌まることなし。又磚瓦を作るに草藁を用ふること記載せられたるが、之と共に埃及にては、穀物を苅るに之を穂の根本より摘み取る風習あり。故に藁束は株となりて其儘田野に立てり(出五〇七、十二)。偖この二つの事は共に疑ふべからざる埃及的風俗なり。吾人の知れる限りにては、カナンのイスラエル人は草藁を雜へて磚瓦を作ることをせず。又穀物を苅るに之を籠に摘み入るゝことをせず、禾束に結ぶの風俗なればなり(例せば創三十七〇七の如き)。

次に十の災害に就て說かん。偖此の十の災害は何れも著しく地方的特色を帶びたるが、其中一つだにカナンの事情に適せるものとては是れなきが如し。之に加ふるに此の十の災害の順序も頗る意味ありげなり。抑もモーセが初めてパロと會見したるは何時頃なるかといふに、當時尙ほ株の田野に立てりと記載せられたる事情より見れば收獲時の直ぐ後ち即ち五六月頃のとなりしは明了なり。而して出埃及はアビブの月に起れるものにして、アビブの月は今日の三月と四月に當るが故に、此の十の災害は凡て一ヶ年に亘りて續々起れる出來事なり。今之を埃及に於ける天然の災害と比するに、驚くべきほど能く相符合するを見るべし。

(一)水、化して血となれりといふは、勿論之を文字的に解釋すべからざると相同じ(耳二〇三十一)。而して、水、血に化すとは、ナイルの水赤く變色することを指すものにて、年々六月の終り頃よりして始まる。但し此の變色は通常魚を殺すに至るが如きことなく、又水を飲むに堪へざるに至らしむるが如きことも是れあらず。尙ほ此に、偶然ながら、木石の器のことを記載せるは面白し(出七〇十九)。是れナイルの水を潔むるには、之を斯くの如き器の中に湛ふること是れ埃及の風俗なればなり。記者は確かに此の風習を熟知したりしにて、又その讀者も之れを熟知せるものと看做したりしなり。(二)蛙の最も煩はしきは九月にあり。(三)蚤とは恐らく蚊の類ならん。而して此の蚊と(四)蚋とは不幸にして一ヶ月限りのものにはあらず。されど通常その最も多く害をなすは十月のことなり。(五)家畜の惡疾と(六)腫物とのことは確かに之を知るに由なし。されど此の二が前の災害に次で來れるは蓋し自然の順序なり。蚊と蚋とは共に疾を傳ふる媒介者たるは今日吾人の知る所の如し。(七)雹害に關しては、大麥已に穗を出し小麥は尙ほ生長せずとあるを見れば、即ち其時期の一月末なりしを知るべし。此の季節は埃及にありて甚しき

雹害のある時なりとす。(八)蝗は從來三月に其害を埃及に恣にせる例あり。聖書の意味も亦こゝにあるべし。是れ草木の葉の尙ほ若き時なればなり。而して蝗の埃及に來るは東風によること多く、又風位の變更によりて吹き歸さるゝと、恰かも出埃及記に記載せらるゝが如し。(九)摸るべきの暗黑とは恐らく砂漠の風に原因するものならん。此の風は三月の末より以後時々に吹き起るものにて、其濛々たる砂塵を捲くや晝尙ほ暗きを覺えしむ。(余またトランスヴアールにありし際之を經驗せることあり。特に一千九百年十月二十日の沙嵐の時の如きは、一天俄かに搖き曇りて十五分間ばかりは余儀なく蠟燭を點じたり)。而して一奇ともいふべきは、此風往々にして三日間も繼續することなり。又狹き一條の帶となりて吹き進むが故に、國內の一部は暗きも之に接したる一部は明るきことあり。(十)長子の死は勿論天然の災害にはあらず。されど此に特に面白く感ぜらるゝは、何等の說明をも加へずしてエジプトの諸の神に罰をかうむらせんとの句を擧ぐると是れなり。(出十二〇十二、民三十三〇四。又出八〇二十六を見よ)。こは埃及にて活ける動物を拜する習慣あるを指せしものにて、此の動物の長子も亦死すべかりしなり。斯くの如き事情は、記者埃及に住居せしにあらずんば知ることを得ず。是れ活ける動物を拜するが如きは、吾人の知れる限りにては、決してカナンに於て行はれざりしことなればなり。

以上記したるところの符合は頗る驚くべきものにて、是れと共に又、事件と同時の記錄なることをも暗示するものなり。且つ又或程度までは、パロが歷々イスラエルの出發を許しながら、後に之を禁じたる怪しき變心の事情をも說明す。是れパロは此の凡ての災害と(獨り最後のものを除き)全く相同じき災害の前に起りしことあるを聞き、今の災害は何等眞實の意義なしと說明せられしかも知るべからざればなり。されど之をして後世の記者ならしめば、災害の順序を轉倒し、以て其意義を破壞するに至りしかも知るべからず。現に詩七十八〇と百五〇とに其例あり。此の兩篇の順序は何れも摩西五經とは相一致せず、兩篇相互も相一致せざるなり。

(三)律法と說話とに於て

尙ほ記者が埃及の事情に精通したりしことは、其後摩西五經中に記載せられたる律法と說話を見て明かなり。たとへば律法を家の柱と門とに書けりといふが如き、又石灰を塗りし大石の上に之を書けりといふが如き、兩つながら純然たる埃及の風俗なり。殊に後者は、吾人の知れる限りにては、他國には行はれざるものなり。之と等しく記者は杖に人の名を書する埃及の習慣にも能く通曉したりしが如し(民十七〇二)。其他死者に食物を供ふる奇なる風俗の記事あり。この風俗も亦埃及に行はれしものにて、其理由は恐らく死者を木乃伊となし、而して其復活を信ずるより、食物を墓邊に置き、以て其用に供せんとせしに由るならん。而して此の習慣とても、吾人の知れる限りにては、イスラエル人の間に行はれしことはあらざるなり(申六〇九、十一〇二十、廿七〇二、二十六〇十四)。

更に又埃及に住せる人の常食を擧げて、魚、黄瓜、水瓜、韮、葱、青蒜といへる所あり、是れは皆埃及人の常に口にする食物なり(民十一〇五)。然るに右の野菜五種の中四種の希伯來名稱は、聖書の他の塲處には見えざれば、是れカナンに於て普通のものなりしとは思はれず。而して又一方にはカナンの地の特產物たる蜂蜜、乳、牛酪、無花果、乾葡萄、巴旦杏、橄欖等のものは一つも此中になし。故に右の食物表は純然たる埃及的のものなりとすること是れ當然なり。

次に注意せざるべからざるは、摩西五經中に記載せられたる禮拜の儀式が、大部分は埃及より出でたる形迹あるこ是れなり。其中最も著しきものは即ち契約の櫃なり。出埃及に先だつ數百年前の埃及の石碑に已に神聖の櫃を描きたるが、此の櫃は往々之を杆に貫きて人の肩に載せ、而して其上にケルビムの如き形したる翼あるものを据ゑたるもあり。その他尙ほ如何にも埃及より出でしに相違なしと思はるゝもの多きが中に、尙ほ二三の例を擧ぐれば幕屋の如きあり、贖罪所の如きあり、祭司の裝束及び規則の如きあり、殊に其麻の衣を着用するは是れ全く埃及特有のものゝ如し。又金を櫃に着するが如き、聖所の種々なる粧飾物の如き、是れ亦埃及より出でたるなり。之に由て是を觀れば、立法者が極めて能く埃及の事情に通じ、國民また粗ぼ之と同じかりしを察すべし。而して此の事情は誠に能く埃及に於て教育を受けしモーセに當て箝まり、又埃及を遁れ出でしばかりなるイスラエル人に當て箝まるは言ふを待たず。是れ或は其後數百年を經てカナンに住せし立法者にも不可能にはあらざるべきも、勿論能く當て箝まれりとはいふべからざるなり。

又イスラエル人が此の禮拜のために用ゐしと稱せらるゝ材料も、獨り此時代に於てのみ用ゆるを得るものなりき。たとへば契約の櫃はカナンに於て製造せられしとせば、樫か、香柏か、松の木なるべきに、然らず。かへりて合歡樹もて作られたり。合歡樹はカナンに於ても稀には用ゐらるゝことあれど、寧ろシナイ近傍に於て極めて普通なる樹なるぞかし。尙ほ其他の材料には山羊毛あり、牡羊の毛あり、紅海の近海より得たる臙脂獸の皮あり、金、銀、銅、寶石及び埃及の掠取物より得たる麻絲あり。殊に此の麻絲は確かに埃及のものなり。是れ埃及の言を之に用ゐたればなり(出二十五〇一—十)。而して後世の記者ならば得て有り勝ちなる時代の錯誤に至りては何處にも是れあるを見ず。

之に加ふるに、他の塲處に於ては此の五經記者は已れを同樣に其讀者も亦埃及を熟知せるものと看做せる塲合少からず(申七〇十五、二十八〇六十、出二十三〇九)。例せばイスラエル人等は、其埃及にありし際に惱まされし疾に就き注意を受くること二回に及び、(『汝らが知る彼のエジプトの惡しき病』若しくは、『汝が懼れし疾病』とて)彼等若し非行あらば、神再び同じ疾を以て罰し給ふべしと警告せられたり。されど斯くの如き警告も、彼等が數百年の後ちカナンにありし時ならば全く無用のものなるべし。隨つて此言は事後に問もなく書き記されしものなるや疑ひなし。之と等しく、イスラエル人等は其埃及にありし際は他國人なれば、他國人の心を知る。此故に他國人に深切なるべしと勸められし

ことあり。斯くの如き言も亦イスラエル人等が埃及を去りて數百年後に書き記されしものとは看做すを得ざるなり。

尙ほ他の處には、記者カナンの氣候及び產物の特色を記し、而して之を了解し易からしむるとて、之を埃及の特色と比較せる所あり（申八〇七—十、十一〇十—十三）。果して然らば、記者は是れイスラエル人を認めて埃及を知るものとなせるものなるも、却てカナンを知らずとなせるものなり。たとへばカナンのことを記して山と谷多く隨つて小川の流れある地なりといひ、埃及の如くに足をもて灌漑かざるべからざるが如き地にはあらずといへり。而も是に就ては何の說明だも與へられざるが、思ふに、こは水車のことを謂ふものなるべし。水車は埃及の如き平坦の地にては、水を揚ぐるに必要のものにて、且つ之を運轉せしむるには人の足を用ゐたればなり。然るに後世カナンに住せし記者が何の說明だも施さずして斯くの如き句を用ふることあるべきか。而も若し此言を以てモーセの口より出でしものと見ば一切の事情明白なり。其何等の說明もなき理由は、（埃及より出で來れるばかりの人には）何の必要もなければなり。

最後に摩西五經の記者は能く埃及の國語に通曉したりしものに相違なし。書中に記載せられたる埃及語の名稱は、殆んど皆精確に埃及語を希伯來語に轉寫せるものなり。之と等しく記者は又數回埃及の名詞、若しくは埃希兩國共通の名詞を用ゐたるが、一句の中に時々その數語の並擧せられたることあり。例せば箱舟、萑、瀝青、樹脂、葦河、邊の如き是れなり（出二三）。而して是等の言の多くは（例せば以上七語中の最初の四語の如きは）、預言者などにありては埃及のことを記する場合にすら使用せらるゝことと稀なるを以て、吾人は當然斷案を下すを得べし、曰く此の諸語は埃及在住の記者の用ふべきものにて、カナン在住の記者の用ゐざるべきものなりと。

之を要するに、摩西五經中埃及に關する事柄を記する場合には、其風俗たると、氣候たると、國語たるとを問はず、記者の能く之を熟知せるを到る所に顯せるは明了のことなり。而も是等の多くはカナンのそれに比すれば全く異なるぞかし。之に加ふるに、是等の證據は一つだに故意とらしく、又記者自ら其知識を誇るらしく擧げられしものなく、皆偶然に記されしものにて、少しも不自然らしき點あるを見ず。此故に吾人は是非とも斷案を下さゞるべからず。早く、此の記者は事件と同時代に埃及に住し、埃及の事情を熟知せるものなり。又此の記者は吾人が前にもいひし如く埃及を出で來りて間もなき人々のために之を書き記せるものに相違なしと。

（乙）摩西五經の律法

吾人は次に移りて摩西五經の律法を說かんとす。摩西五經の律法とは出埃及記の半に初まりて他三書の大部分を占めたるものなり。而して此の律法も亦余が後に記する如く、（出埃及に關係すと記せるとこと以外に）所謂同時代の創定たる確證あり。而してこは少しも怪しむに足らざることなり。是れ古代諸